



しかし前方から来た中年の男性とぶつかりそうになり、浮きだっていた心が一変して焦りに変わる。ニーナは慌てて頭を下げた。人通りが多いということは、こんな風にぶつかる可能性も高いということに漸く気づく。もしもぶつかり続けたら、ケティス作った花束が滅茶苦茶になってしまうだろう。それを防ぐには細心の注意を払わなければならない。

ニーナは浮き足立つ心を抑え、神殿に花束を捧げることだけを念頭におき、花束を落とさないよう抱えなおした。黒く丸い瞳をキリッとさせ、気合を入れる。

「あら、ニーナじゃない」

そんなとき後ろから声をかけられる。振り返ると、見知った二人の少女がこちらに駆け寄ってくるのが見えた。

「ネドマーとウェルチじゃないか。わたしに何か用か？」

自身が持つ幼い外見に合わない男のような口調でニーナは答えたが、やってきた二人の少女はそれを気にすることはなかった。ニーナがそんなしゃべり方をするという事は、少しでも親交がある者全てが知っていることだから。

「えっと、別に用があるってわけじゃないんだけど」

「ただ視界に映ったから声をかけただけよ。――今一人なの？」

「ああ。神殿に花を捧げに行く途中なんだ」

抱えている花束を少し持ち上げると、二人の少女は顔を見合わせた。そのとき彼女達の口元が含みを帯びてつり上がっていたことに、ニーナは気づかない。

「ニーナ……ちょっと話を聞いてくれない？」

「なんだ、どうしたんだ？」

ネドマーが急に顔を曇らせ、物憂げに手を顔に当てた。ウェルチがネドマーの肩に手を置いて大丈夫？ と心配そうな顔をして覗き込んでいる。これは何かあったに違いない。

「わたしでよければ話を聞くぞ」

めでたい祭りの日に、そんな暗い顔をしなければならないなんて、とても悲しいことだ。話してくれることで彼女の気持ちが少しでも晴れるのなら、幾らでも話を聞こう。

「実は、今朝になってお母さんが急に高熱を出しちゃって……」

「それは……お気の毒に」

「それで慌てて薬屋さんに行ったんだけど、私の手持ちじゃ薬が買えなくて……」

「私も出したんだけど、それでもまだ足りないのよ……」

「薬が買えなかったのか!？」

楽しい祭りの日に風邪を引いてしまっただけでなく、薬を買うこともできないなんて。せめて何か、彼女にしてあげられることはないだろうか。

「そうだ！」

ニーナは片手で花束を抱えると、自分のポケットに手を入れた。取り出したのは、ニーナの小さな手に収まってしまう程小さな皮の袋。財布だ。

「あまり多くは入ってないが、これを薬代の足しにしてくれないか？」

ネドマーに向かって財布を差し出した。祭りを楽しもうと用意した金であり、本当に些細な金額しか入っていない。それでも、少しは足しになるはずだ。

「そんな……悪いわ、ニーナ」

「いいんだ。ネドマーの母さんが元気になってくれたら、わたしも嬉しい。まあ、これで足りるかわからないけれど」

「……ありがとう。そこまで言ってくれるなら」

ネドマーが頬を僅かに上気させ、ニーナの掌にある財布に手を伸ばす。

「――へー、誰の母さんが元気ないんだって？」

ネドマーでもウェルチでも、ニーナでもない第三者の冷やかな声音に、ネドマーの伸ばされた手がピタリと止まる。そして二人の少女の顔が明らかにさあっと青ざめた。

声を挟んだ主は、横髪だけが長い鮮やかな青い髪に、幅が広めの黒のリボンにヘアバンドのように巻いて下の位置で結んだ少女だった。小さな白い顔に象嵌された、翡翠を思い起こさせる翠色の瞳を鋭く窄め、胸の前で偉そうに腕を組んでいる。

「アズマ！」

ニーナは大好きな親友の姿に、頬を綻ばせた。

本当だったら、アズマと二人で祭りを楽しみたいと思っていたのだが、彼女は今日一日、仕事をしなければならないと言っていた。それを聞いてガックリと落ち込んだが、仕事があるのなら仕方が無い。だから会えると思っていたのに、こうして彼女の姿を見ることができたのが嬉しかった。

「今日は一日中仕事だと言っていたのに、休憩を貰ったのか？」

「まさか。これも仕事の一環だよ」

言葉の意味がよくわからず、ニーナはきょとんと首を傾けた。

アズマはニーナを一瞥すると、すぐにまた二人の少女に視線を戻す。二人の少女はビクッと身体を震わせた。

「その話、あたしにも詳しく聞かせてくれない？ 確か母親が元気ないんだっけ。こんな祭りの日に薬が必要だなんて、ご愁傷様なこと」

じろりと細められた翠の双眸はとても冷やかで、鋭かった。

「え、えと……」

「その……。わ、私用事を思い出したわ！ ごめんなさい、失礼するわね！」

「え、ちょっと待ちなさいよ！」

二人の少女はアズマから逃れるかのように一目散に走り去っていく。

「あ、ネドマー、お金……！」

まだネドマーはニーナから財布を受け取っていない。しかしネドマーはニーナの声が聞こえないのか、どんどん遠くへ走り去ってしまう。

「ニーナ」

「うん？」

アズマに名前を呼ばれ、そちらを向くと、額に衝撃が走った。アズマに額を勢いよく小突かれたのだと気づくのと同時に、傾いた体を慌てて立て直さなければならなかった。

「い、いきなり何をするんだ」

「何を、じゃない、このお人よし！ あんたまた金を騙し取られるところだったんだよ！ 少しは疑えこのボケ！」

アズマは腰に手を当て、じろりとニーナを睨みつける。

ニーナは軽く涙目になりながらも、騙し取られるとは心外だと訴えた。ネドマーが母親の為に薬を買おうとしていたのだから。

「だからそれが騙されてるって言ってんだよ！ ネドマーの母親って言ったら、一度も風邪を引いたことがないっていう程、頑丈さじゃ他の追随を許さないって有名だろーが！」

「今までひいたことがないからって、これからもひかないとは限らないじゃないか」

そういうとアズマは、大きく嘆息しながら左手で額を押さえた。この究極のお人よし、と何やら小さく呟いている。

「アズマ、ここにいたのか」

一人の大柄な男が呆れ混じりに溜め息をつきながらやってきた。緑と灰色を上手く組み合わせたジャケットは、アズマが着ている物と全く同じもの。

「別にあたしはサボってないよ、隊長。金を騙し取られそうになった善良な民間人を守ってたんだから」

「……突然走り出したと思ったら、そういうことか」

隊長と呼ばれた男はニーナをちらりと見遣ると、得心がえたとばかりに肩を竦めた。

「見回りお疲れ様です、隊長さん」

ニーナは隊長に向かって頭を下げた。

セフィラスには、街の治安を守るために組織された自警団がある。神が住まう神殿がある街は、祭りの日でなくとも人が集まりやすく、集まった人々が犯罪に巻き込まれないようにしなければならないからだ。

それともう一つ。この世界には『魔獣』と呼ばれる人を襲う凶暴な生物が存在する。魔獣は突然どこからともなく現れ、一旦現れると手当たりしだいに暴れ出し、街や人々を蹂躪してしまうのだ。

魔獣は神出鬼没で、街の中のどこに現れるか予測が全く立たないうえに、街の周りを堅固な壁で囲んでも現れるという、守りに回るにはやっかいな相手だった。現れるのはせいぜい数ヶ月に一度くらいの頻度だが、それでも一度現れただけで、街は大きな被害を被ってしまう。

風神の誕生祭というめでたい日に魔獣が現れでもしたら、大勢の人々が魔獣に襲われるだろう。それを防ぐために自警団の者達は、今日一日総出で街中を見回っている。

そんな荒事中心の自警団に、少女でありながらアズマは所属していた。幼い頃から人よりも身体能力に優れた彼女は、持ち前の身のこなしを活かし、片刃の短剣を用いた剣術で他を圧倒する実力を持っている。そうでなければ、少女であるアズマが自警団に入団することはなかっただろう。

「そういうわけで隊長、こいつを一人にしたらまた誰かに騙されそうになるに決まってるし、あたしニーナについてくから」

「……相変わらず過保護だな」

「それで丁度いいくらいだね。騙されたことにも気づかないお人よしなんだから」

「だからわたしは騙されてなど……」

「いいから黙れ」

完全に誰かに騙されることを前提に話が進められ、ニーナはむ、と唇を僅かに尖らせる。アズマと一緒にいられるのは嬉しいこ

とだが、花屋で働くようになって自分では大分しっかりしてきたと思っているのだ。アズマとは一つしか歳が違わないのに、彼女はいつまで経ってもニーナを子供扱いする。それが少しだけ不満だった。

「ニーナが危なっかしい娘だということは、街に住む誰もが知ってることだからな……。一人にするのは、確かに心が咎められる」

「隊長さんまでわたしを子供扱いするのですか！」

確かに年齢に比べて背は低いし顔立ちも幼いという自覚はある。しかしニーナはもう十五になったのだ。ここセフィラスが属するリトルラ王国では、十五はもう立派な大人と見られる年齢だというのに、彼もまたアズマと同じくニーナを一人の大人として認めてはくれないらしい。

「仕方がない、付いてってやれ。そのかわり、警戒を怠るなよ？ 魔獣はいつ現れるかわからないのだからな」

「どうもー」

アズマは軽く手をふって応えた。そんな横柄ともいえる態度に彼は僅かに眉間を寄せるが、大きく嘆息するだけで何も言わず、その場を後にする。アズマが誰に対しても敬意を表すことがないということを、彼は充分承知していた。

「隊長の了解も得たし、神殿に行くならとっとと行くよ」

「あれ、何で神殿に行くってわかるんだ？」

神殿に行くと言ったのはネドマーとウェルチだ。そのときは確かアズマは傍にいなかったはず。

「そんな高そうな花束、神殿に捧げる以外にないじゃん。それにケティスさん、花束造りはりきってたし」

アズマが花束の先を覗き込んだ。色とりどりの花は、アズマの白く端正な顔立ちによく映える。いつもの自警団としての格好ではなく、他の人々のように着飾っていたのなら、きっといい絵になっただろう。

「自警団の仕事は確かに大事だが、着飾ったアズマも見なかったな」

「阿呆。あたしが女らしい格好が嫌いなこと、充分知ってるだろーが」

自警団ということが一目でわかるように、団員には共通のジャケットを着ることが義務付けられている。しかしそれ以外は、機動性さえあれば団員の自由だ。

アズマはジャケットの下に藍色のハイネックのインナーと、同系色の短めのズボン。足は脛まで覆う丈夫そうな厳ついブーツを履いている。動きやすさを重視した格好であり、洒落っ気は微塵もない。

「あたしのことよりも、自分のことを気にしろっての。せっかくの祭りだってのに、いつもと同じ格好だってことは、ニーナも人のこと言えないよ」

ニーナは首を下げて自分の服を見た。腰に藍色の腰紐を巻いたベージュのワンピースに、丈の短い若芽色の半袖の薄手のジャケット。先程までいつも通り働いていたのもあって、特に着替える必要もないと、そのままの格好で出てきた。確かに改めて自分の服装を考えると、ニーナも人のことは言えないかもしれない。

「でもわたしは自分が着飾るよりも、人が着飾ってる姿を見るほうが好きだな」

「あたしは自分も他人も、どんな服を着ようが興味ないけどね」

あくまでも素っ気無いアズマに、ニーナはむーと唸った。いつも思っているが、アズマは愛想がなさすぎる。せっかく綺麗な顔立ちをしているのだから、もっと愛想よくすればいいのに、と思う。

「何唸ってんの。速く来なよ」

気づくとアズマは先の方に進んでいた。ニーナは花束を抱えなおし、慌ててアズマの後を追った。

神殿には多くの人々が集まっている。風神の誕生日を祝うために。捧げ物をする順番待ちの列はとても長かった。

アズマは人の多さに純粋に感動しているニーナを横目で見ながら、呆れ混じりに嘆息する。この大勢の人間がいる中、心から神の誕生日を祝っている人間がどれだけいるだろう。少なくとも、隣に一人だけいることだけは確かだが。

神は世界の理を守る者、と言われているが、神はずっと神殿の中で引きこもっており、外に姿を現すということをしなない。神殿に仕えている神官しかその姿を拝むことはできず、セフィラスに住んでいても、風神の姿を見た者はアズマだけでなくほとんどいないと言っても過言ではない。この日だけは姿を現すのかと思いきや、特にそういうわけでもないのだとか。

正直アズマにとって、一度も見たことのない超人的な存在の誕生日など、どうでもいいことだった。神の誕生日にかこつけて人間を大勢集めるために、仰々しく派手に祭りとして祝っているのだとしか思えない。セフィラスを有するリトルラは小国で、人口もあまり多くなく、そんな国柄で確固たる収益を得るには、外から客を呼び寄せるのが一番だから。

祝われる神が姿を現さないのも、そんな人間の事情を察しているからかもしれない。

「風神様……一目でも見ることはできないだろうか」

「きっと凛々しい姿をしているに違いないわ」

そこかしこから風神の姿を拝みたいと熱望する声が囁かれいている。風神がどんな姿をしていようが全く興味がないアズマは、とにかく早くこの行列から抜け出したいとばかり思っていた。

「アズマ、アズマ。見てくれすごいぞ。キラキラした物があんなにたくさん……！」

大分列が進むと、人々が神に捧げた貢物が次々と神殿の中に運ばれていくのが見えた。ニーナが丸くて大きな瞳を、更に大きく開いて輝かせている。普段目にする事のない品々が物珍しいのだろう。

身を飾る装飾品から、剣や槍のような武器、そして曲を奏でる楽器などなど、物質的には色様々だ。全てに大粒の宝石がたくさん散りばめられているという共通点を除けば。

「あんな成金趣味の、どこがいいんだか……」

あれらを贈ったのは貴族か豪商だろう。無駄に金がかかっている。神に取り入りたいという欲望がひしひしと伝わり、アズマは顔を顰めた。ニーナのように、見た目の華やかさだけを賛辞することは、アズマにはできない。

「そんなことを言うてはだめだぞ。皆風神様のために、一生懸命考えて用意したのだから」

「そんな清らかな考えを持った人間なら、あんなものを贈ったりはしないとと思うけどね」

見た目の華やかさと同時に、無機質な味気なさをあれらの貢物からアズマは感じた。ニーナが抱えている花束のように、心が込められているとは思えない。

「大事なのは見た目じゃなくて、心ってこと。あたしならあんなのより、ケティスさんの造った花束の方が嬉しいね」

「うん、そうだな。おめでとうと祝う心が大事だな！」

ニーナは得心がいったとばかりに満面の笑みを浮かべた。

ニーナと出合ってから、五年程経っただろうか。ニーナの持ち前の純粋さと人の良さは、その頃から全く変わっていない。少しは人を警戒することを覚えてほしいと思いつつも、その純粋な心を失ってほしくはない、とも思う。その素直で純粋な心にアズマは救われたのだから。

アズマはそっと頭に巻かれたリボンに触れた。今自分がこうして呑気に貢物の順番待ちをされているのも、ニーナがいてくれたからこそだ。

だからこそ、ニーナの人の良さにつけこもうとする輩を許すことができない。可能な限り、悪意を持つ者達からニーナを守りたいと思う。たとえそんな思いが『過保護』だと揶揄されようとも。

暫くして漸く順番が回ってきた。ニーナは待ち構えていた神官に花束を渡し、祝辞を述べて頭を下げる。アズマもニーナに倣って頭を下げた。ここで頭を下げずらせずにいたら、無礼者として一悶着起こるだろう。無駄なことは起こさないに限る。

「貴殿らに風神様のご加護を」

神官からの決まり文句を聞き流し、長い間待ったとは思えないほど、花束の献上はあっさり終わった。

「風神様、喜んでくれるだろうか」

「どうだかね。ま、適当な花瓶に活けといてはくれるんじゃないの？」

花束を贈ったのはニーナだけではないだろう。個別に活けるのは大変だろうから、大きめの花瓶にある程度纏められそうではある。最悪の場合、捨てられる可能性もあるだろうが、それはあえて口には出さない。

「この後どうする？ 適当に見て回るか、それとも直ぐ店に帰るか」

「むむ……できればいろいろ見て回りたいが、確かアズマは仕事で……だったな」

「隊長から許可貰ったし、別に気にしなくてもいいけど」

彼はアズマの不遜な性格を知った上で自警団に迎えた。アズマの腕を買って。魔獣との戦いはまさしく命懸けで、実際重傷を負

って亡くなった団員もいる。女であれど、腕が利くならば一人でも多く人手が欲しいと直々に乞われたのだ。

元々アズマも、ニーナと同じくケティスの花屋で働いていた。しかしある日、花屋の近くに魔獣が現れ、ニーナを守るためにアズマが元々携えていた片刃の短剣を駆使して魔獣に立ち向かった。自警団が駆けつけたのは、満身創痕になりながらも、何とか倒した後だった。

魔獣を一人で相手にしたのが十代半ばの少女だと知った彼らは驚愕した。ニーナやケティスに手厚い看護を受けている最中、隊長がアズマの元へと尋ねてきて自警団への入団を打診されたのだ。

始めアズマは断った。アズマが守りたいのはあくまでニーナだけであり、それ以外はどうなろうと知ったことではない、と。そのままはっきりそういえば、怒って引き下がるだろうと思った。しかし彼は顔は顰めたものの、高圧的な態度に出ることはなく、更に深々と頭を下げるのではないか。アズマの性格など問題にならないくらい、戦力の確保は切実な問題らしい。

そんな彼に心を動かされたのか、アズマの事情を詳しく知らないケティスが少し考えてみてはどうかと提案する。考えるまでもない一蹴したかったが、それだと何故そこまで拒むのか説明しなければならなくなるだろう。

自警団に入りたくない最大の理由は他にある。しかしそれを説明したら、アズマはこの街にいらなくなるだろう。いや、自分だけなら構わないが、とぼっちりでニーナまで追い出される可能性が高い。せっかく安住の地を見つけたのに、それでは振り出しに戻ってしまう。

ニーナとアズマは元々セフィラスの人間ではない。ある事情で以前住んでいた街を離れ、各地を転々としていた。十代半ばの少女を、同時に二人も雇ってくれる者がなかなかいなかったからだ。

セフィラスで見つけた花屋の主人、ケティスはとても気のいい人物で、頼れる親戚が誰もいない二人の少女の事情を知るやいなや、住み込みで働くといいと言ってくれた。ケティスは連れ添っていた夫に先立たれ、子供にも恵まれなかったためずっと独りだったらしく、むしろ娘が二人も出来たと、とても嬉しそうだった。

植物の世話など一度もしたことがなかったが、ケティスは根気よく丁寧に教えてくれたので仕事の内容はすぐに覚えた。しかし不特定多数に愛想よくすることができないアズマに接客は向かず、ニーナが客の相手を、アズマが花の世話をと次第に仕事を分担するようになった。

漸く手に入れた平穏な暮らし。しかし逆にその平穏に甘受してしまったせいで、危機管理能力が落ちてしまっていたのは痛手だった。各地を放浪していたときならば、誰にも気づかれることなく一刀の下に魔獣を捻じ伏せることができただろう。放浪中に出合った魔獣は、全てそうして葬ってきた。

逡巡の後、アズマは入団する代わりに様々な条件をつけた。まず、こちらの態度が気に食わないならすぐに辞めること、過去の詮索や干渉をしないこと、無理や無茶はしないこと、女として扱わないことなどなど。

かなり一方的な条件をいろいろつきつけたが、彼はそれを呑んだ。それ以来、アズマは自警団の一任として日々見回りをしたり、他の団員と力試しをしたりといった生活を送っている。そのおかげで今まで特に問題も無く、鈍った感を取り戻すこともできた。

女だということに反発する者は多いと思ったが、予想に反してあっさり彼らはアズマを受け入れた。魔獣の強さを身を持って知っている彼らにとって、意味のない自尊心よりも、生存率を上げることの方が大事だと完全に割り切っているらしい。気に入らないと思っていないわけではないのだろう。

つまり、大事なときにしっかり役目を果たささえすれば、それでいいのだ。実際、アズマが入団してから三回程魔獣が現れたが、そのときに死んだ者は誰もいない。怪我人は相変わらず出たが、命に別状はない程だった。一人か二人は犠牲者がでると言われる『魔獣退治』で死者を出さなかったのだから、十分な成果といえる。

アズマとニーナは賑やかな街並みの中を、途中出店を覗いたりしながら歩いた。風神モチーフを謳った置物等の土産品がやたら目につく。誕生祭を目的に来た客目当ての商品だろう。他には若い女性が好みそうな装飾品や化粧品、食べ歩きができる出店が連なっていた。

お互い身を飾ることに興味がない少女二人は、果実を絞って作られた冷たい飲み物を買った。喉を潤しながら、普段目にしないものを見るだけでも充分楽しめる。

「美味しい！ 普段もこんなお店があればいいのに」

「一杯分の量の果汁を絞るのに、どれだけ果物使うと思ってんのさ。こんな祭りの日でもない限り、そんな贅沢できないっつもの」

「むむ……」

他にもあの店の食べ物がおもしろいそうとか、この店の置物が面白い形をしているとか、そんな取り留めもない話を続けているときのことだった。

「きゃあああああああああああ！」

「！」

建物を挟んだ隣の通り道から悲鳴があがった。立て続けに何かが破壊される音が響き、逃げ惑う人々の声を掻き消した。

アズマは顔を顰めた。魔獣だ。こんな人の多い日に出てほしくはなかったが、彼らが人間の事情を考慮してくれるわけがない。

「ニーナ、あんたは近くの物陰に隠れて。あたしが戻るまで絶対に動かないこと。いいね？」

「あ、ああ」

ニーナに釘を刺したあと、アズマは始めに悲鳴が上がったところを目指して走った。しかし小路から次々と人々が逃げてくるために、魔獣がいるであろう通りへ行くことができない。通れるようになるまで待っていたら、街の被害は拡大する一方だ。

アズマは一旦後ろに下がり助走をつけた。そして勢いよく地を蹴って跳躍する。逃げ惑う人々の頭上を大きく超えながら小路に入った。左右にある建物の壁を交互に蹴り飛ばして勢いを保ち、魔獣がいる通りへと着地する。

小路を抜けた先は、風景が一変していた。

皆逃げることができたのか、人気はほとんどなく閑散とし、建物の壁という壁が破壊され、道には瓦礫が広がっている。

――グルルルルルルル.....

低く鈍い唸り声。それが聞こえた方向へと足を走らせると、視界に黒くて大きな獣の姿が映った。

かなり大きい。体長だけでも五メートル近くあり、ごわごわとした黒毛に覆われた尾も、同じ位の長さがある。そのせいで余計に大きく見えるかもしれない。今まで相手をした魔獣の中でも飛びぬけた大きさだ。身体が大きければ体軀から伸びる四肢もずんぐりと太く、しかし顔だけはすっきりと、どこかシャープな印象を与えた。だが赤黒い瞳に光は宿っておらず、口からは鋭い牙が伸びていた。

「ひっ.....だ、誰か.....！」

突然聞こえたか細い声に、アズマはチッと舌打ちした。姿は見えないが、どうやら逃げ遅れた者がいるらしい。

魔獣との距離はまだ少し離れている。仕方なしに、アズマは右腕を勢いよく魔獣めがけて前に振った。何も無いところから飛び出したのは一本のナイフ。まっすぐ魔獣へと飛び、後ろ足の付け根に突き刺さる。

ゆらりと魔獣がアズマの方を見た。

「あたしが相手をしてあげる、きなよ」

言葉が通じているかはわからない。しかし魔獣の意識をこちらに向けることには成功したようだ。魔獣はアズマを見て、再び唸り声を上げる。

「そのへんに隠れてる奴！ 魔獣の気をひきつけてやったから今すぐ逃げろ！ いいな！」

声を張り上げると、崩れた瓦礫の影から慌てて走り去るのを確認することができた。

アズマは左手を振った。再びナイフが宙を飛ぶが、今度は魔獣に躲かれてしまう。だがはじめから当てるつもりはなく、ナイフに意識を向けさせることが目的だった。

自警団から支給されたジャケットに、アズマはナイフをたくさん仕込んでいる。アズマの使う得物は片刃の短剣で、接近戦でものを言わせる代物だ。しかし距離を詰めることができなければ、逆に何もすることができない。それを補うための投げナイフだ。

アズマは地を蹴り、一気に間合いを詰めた。ベルトに括り付けられた短剣を右手で抜き放つ。そのまま横に薙ぎ払うと剣先が黒毛を掠め、ひらひらと宙を舞った。躲かれた。巨軀の割りに動きが素早い。

勢いがついたまま前に傾いた身体を捻りながら横に跳ねた。直後、魔獣の前足が振り下ろされ地面を砕く。その振り下ろされた腕めがけ、着地したと同時に地を蹴り飛ばし、短剣を下から振り上げた。確かな手ごたえが右腕に走る。

――グオオオオオオオ！

魔獣が苦痛に歪んだ雄叫びをあげた。アズマが斬りつけた腕から滴り落ちるのは紅い鮮血ではなく、黒い霧のような気体だった。

しかし魔獣は傷ついた前足を庇うことはせず、アズマ目掛けて突進した。魔獣の牙がアズマに届くか届かないかというぎりぎりの距離を、バックステップでかわしていく。魔獣の腕が石でできた建物の壁を破壊し、瓦礫の塊を鋭い牙で噛み砕いた。

しかし片腕を傷つけたことは決して無駄ではなく、相変わらず黒い霧が噴き出している腕に力が込められたかと思うと、ピリリと痺れが走ったかのようにほんの一瞬だけ動きが止まる。その隙をついてアズマは魔獣の横を駆け、斬りつけた腕と同じ方の足に幾つものナイフを投げつけた。不意をついたおかげで、全てが足に深々と突き刺さる。

――グル.....グルルルル.....

同方向の腕と足が傷つき、バランスがとれなくなったのか、巨軀が揺れ、ドシンと音を立てて地面に伏した。腕と足の一本ずつで支えるには、身体が重すぎたのだろう。

アズマは魔獣に向かい合う位置に移動した。光のない赤黒い瞳と目があう。

――グルルルルルル！

魔獣が鈍く唸った。ろくに動くこともままならないというのに、その瞳から殺意は消えていない。

生きている限り、破壊の限りを尽くすのが魔獣だ。息の根を止められるまで、破壊の手を止めることはない。

だから魔獣が現れたら必ず殺さなければならない。だが、アズマは魔獣がもうほとんど動けないにもかかわらず、止めを刺そうとはしなかった。

『止めは刺さない』。自警団に入る際につきつけた条件の一つだ。動きを封じるまでは攻撃の手を緩めることはしないが、止めだけは決して刺さないと。

あのときはニーナを守ることに必死で、誰かが止めを刺すのを待つという悠長なことをしてはられなかった。だからやむを得

ずに止めを刺した。

魔獣を殺すことをしたくないのが、自警団への入団を決めた最大の理由だ。魔獣を殺したのは一度や二度のことではないが、止めを刺したときの感覚と、震える身体を忘れることはできなかった。何故なら自分は――

――グルォオオオオオオ！

魔獣の雄たけびに、アズマははっとする。思考に耽っている間に、魔獣はどうやら体勢を整えていたらしい。半分無事な手足で上手く勢をつけ、グワ、とアズマに剥き出しの醜い牙を向けた。迫り来る鋭い牙から身を守るべく避けなければならないのに、不意を突かれて驚いた身体は思うように動かない。

(しまっ……！)

一片の油断も許されないのが魔獣退治のセオリーだ。例え動きを封じたとしても変わらない。そのことをすっかり失念していた。

襲い来る衝撃を覚悟して腕で顔を覆った。そのときだった。

「――閃光となりて、打ち砕け」

耳触りのいい低めの声が耳を掠める。同時にカツ、と視界が真っ白に光った。腕で顔を覆っていなければ、目をやられていたかもしれない。

耳を塞ぎたくなるほどの轟音が鳴り響く。しかし覚悟していた衝撃はアズマを襲わなかった。

覆っていた腕を徐に下ろすと、アズマは目を睜った。襲い来ようとした魔獣が、まるで雷に撃たれたかのように感電していたから。黒毛は消し炭のように焦げ、青白い閃光がピリピリと走っている。

風が吹いた。アズマの青い髪が揺れる。風に吹かれた途端、魔獣の身体が崩れた。砂粒のようにさらさらと流れ、溶けるかのように宙に消えていく。

魔獣は遺体を残さない。命の灯火を失った瞬間、肉体は宙に霧散するのだ。

「無事か」

アズマはバツ、と声の主の方を向いた。そこに立っていたのは一人の青年だった。高い位置で結い上げられた、長く紫がかかった黒髪に、深海を思わせる蒼い瞳。背は高いが腰に巻かれた腰布ごしに見ても明らかに細く痩せていて、それが余計に高く見せているのではないかとアズマは思った。襟元は顔の輪郭まで覆うほど高い割りに肩から先を覆う袖はなく、露になっていた。その露になっている二の腕には紫紺の刺青が刻まれ、肘から手首にかけて、ジャラジャラとたくさんの腕輪が嵌められている。

「あんた、『霊術師』……？」

『霊術師』というのは、人間が己の魔力を糧に世界を構成する精霊達と契約を結び、使役する者達の総称だ。風の精霊と契約すれば風を、火の精霊と契約すれば火を、水の精霊と契約すれば水を、地の精霊と契約すれば地の力を人でありながら操ることができる。

精霊を使役できるのは『神』だけの特権ではなかった。しかし当然ながら、誰もがなれるものではなく、生まれながらの素質がなければどんなに努力したところで霊術師にはなれないらしい。

彼らが扱う精霊の力はすさまじく、魔獣退治に一人でも加われれば絶対的な力となる。先ほどアズマが動きを封じた魔獣を一撃で葬り去ったように。当然、どこの街も喉から手が出るほど欲せられる人材だろう。

しかしその特性故、彼らは一人の人間にのみ仕えないということが、暗黙の了解になっている。一つどころに留まることなく、各地を点々とし、どんな小さな村でも魔獣が現れたら退治する役目を背負う、それが霊術師だ。

アズマは一度だけ霊術師を見たことがあった。この青年ではなく、もっと齢を重ねた中年の男だったが、確かこの青年と同じように剥き出しの腕に紫紺の刺青と、たくさんの首飾りを首から下げていた。そんな奇抜な姿はかなり前の記憶でありながら、鮮明に思い出すことができる。

青年は無表情だった。眉一つ動かさず、僅かに細められた双眸はどこか眠たげだ。男にしては肌は白く、無駄に顔の造作が整っていた。そのせいで無表情に余計に拍車が掛かっているように思える。

不意に彼は突然踵を返した。

「え、あ、おい！」

声をかけるも、青年は見向きもせずそのまま走り去ってしまう。閑散とした通りに、アズマだけがポツンと残された。

「何だったんだあいつ……」

突然現れ突然去る。しかも何を考えているかわからない無表情。唯一わかるのは、そんな見ず知らずの霊術師の青年に助けられたという事実だけ。

アズマは一つ嘆息すると、剣を鞘へと収めた。魔獣は死んだ。今はそれでよしでいいだろう。

今度は待たせているニーナが心配だ。連れて来る方が危険だから置いてきたが、逃げ惑う人々の流れに流されているかもしれない。小柄なアズマよりも更に背の低い少女に、押し寄せる人々を耐え切るのは難しいだろう。

アズマも踵を返し、瓦礫だけが残った通りに背を向けて走り出した。

(アズマ……大丈夫だろうか)

ニーナは近くの建物の影に身を潜めながら、魔獣と戦っているであろうアズマのことを思った。アズマが強いことは知っている。セフィラスに落ち着くまで、戦う力のないニーナが各地を放浪できたのは、アズマがずっと守ってくれたからだ。

だからといって怪我をせずに済むかはわからないし、それにニーナの気がかりは、どちらかといえばアズマの精神面にある。アズマが魔獣の命を奪うことを厭おう気持ちを、よく知っているから。

アズマが自警団に入るとの承諾したときのことを思い出す。始終不遜な物言いをしていたのは、やはり魔獣の命を奪うことが嫌だったからだろう。たくさんの条件をつけつつ、結局入団することを決めたのは、恐らくニーナがいたからだ。

破壊の限りを尽くす魔獣を何故殺したくないのかを一から十まで説明したら、ニーナ達は間違いなくセフィラスから追い出される。そうしたら、再び心が休まることのない放浪生活が待っていたはずだ。そしてアズマは、運動能力に乏しく体力もないニーナにそんな生活を強いることよりも、自分が魔獣と戦うことを選んだ。

ニーナはその場にしゃがみ、膝を抱えた。アズマが魔獣と戦う度に思う。自分はずっとアズマに守られているのだと。何故そこまでニーナを守ることに固執しているのかは、たった一つしか思い当たらない。

(まだ……兄さんのことを引きずっているのだろうか……)

ニーナの唯一の肉親の姿が脳裏によぎる。アズマと同じく大好きだった兄。もしも今ここにいてくれたなら――

「――やっと見つけたぞ」

「え？」

背後から声をかけられ、思わず振り向くと、そこには同い年くらいの少年が立っていた。

初めて見る顔だ。セフィラスに住んでいる全ての人々の顔を知っているなんて言うつもりはないが、この少年の顔は一度見たらきっと忘れないだろう。さらりと音を立てそうな腰まである深緑色の艶やかな髪が、まず目に焼きついた。あどけなさの残る丸い瞳は赤みの濃い茶色。形のいい眉に白い肌。女性にしては低めの声を聞かなければ、少年とは思わなかったかもしれない。それほど端正な顔立ちをした少年だった。

少年は赤茶色の瞳を窄めてニーナを睨み付ける。彼の背は特別高い方ではなかったが、小さなニーナを見下ろすには充分な背丈がある。その冷たく鋭い視線に、ニーナは身体がビクリと震えるのを感じた。

「え……あ、あの……わたしに何か……用か？」

「何か用か、だと？」

恐る恐る声をかけると、少年は苛立ちまじりに瞼をビクリと動かした。すると、行き成り強く腕を捕まれ、力任せに引っ張られる。

「い、痛っ……！」

「惚けでも無駄だ、この盗人め！ 大人しく俺から盗んだものを返してもらおうか」

「え、え？」

惚けても無駄だといわれても、ニーナはこの少年から何も盗んではない。その前に、この少年を見たのも、今が初めてだ。

「あ、あの……申し訳ないが、人違いではないのか？ わ、わたしは貴方から、何もいただいてはいない。見かけるのも初めてだ」

「……あくまでシラをきるつもりか」

腕を掴む手に更に力が込められる。激痛が腕から全身に伝わり、ニーナは思わず顔を顰めた。

「残念だがそれは無駄だぞ。お前から感じる強い力が、それを証明しているのだからな！」

「強い……力？」

ニーナは戦う力を持たない、そこらへんにいるごく普通の娘だ。強い力など持っているはずがない。やはりこの少年は人違いをしている。

「わ、わたしはどこにでもいるただの娘だ……！ 強い力などないし、神に顔向けできないような恥ずべき行為をしたことも、一度としてない！」

痛みを堪えながらも、少年の赤茶色の瞳をまっすぐ見つめ、言葉だけでなく視線でも己に非がないのだと訴える。

「……」

少年は眉根を寄せてニーナをじっと見据えた。見下ろす視線はやはり鋭く、怖かったが、今は目を逸らしてはいけない。ニーナが彼から何かを盗んだ犯人ではないとわかってもらうまでは。

「なら、お前から感じる強い力は何だ。ただの娘が、こんな力を持っているだなんてありえない」

「そ、そんなことを言われても……」

自分でも少年のいう『強い力』が何なのかサッパリわからないというのに、彼に説明できるわけがない。言い淀んでいるうちに

、少年の瞳に剣呑が帯びていった。

「それを証明できなければ、お前が犯人じゃないと認めるわけには――」

「おい、その手を離せクソガキ」

少年の言葉を遮り、突然割り込んできたわざと低められた声。同時にバシン、という音と共にニーナの腕を掴む少年の手が離れた。見慣れた鮮やかな青い色彩が視界に映る。

アズマだ。魔獣との戦いにひと段落がついて戻ってきてくれたのだろう。アズマはニーナの前に立ち、翡翠の瞳で少年を睨み付ける。

「なっ……誰だ貴様は！ 話の邪魔をするな！」

「話の邪魔？ 腕掴んで一方的に責め立てるのが、貴族のお坊ちゃんの話の仕方ってワケ。それは勉強になるわ」

「……っ！ 俺は貴族ではない！ あんな低俗な奴らと一緒にするな！」

ニーナはアズマの後ろから、そっと少年の姿を覗き見る。脛まである裾の部分に金の刺繍が施された長い貫頭衣に、腰に巻かれた黒の帯紐。パッと見ただけで手の込んだ造りだとわかる。貫頭衣の下に着ている服は白の無地だが、上質の絹でできていた。

ニーナは青ざめた。この少年は一般市民などではない。盗人と誤解を受けたせいで彼が着ているものにまで意識を向けることができなかった、とは言い訳にしかならないだろう。

（身分の高い人に敬語を使わなかった……！）

不敬罪、という言葉がニーナの頭にズーンとのしかかる。目上の人には必ず敬語を使うと心がけているニーナにとって、不敬罪も神に顔向けできない恥ずべき行為だった。例え目の前で親友の少女が、少年にとてつもない罵詈雑言を投げつけているとしても。

「あんたが貴族だろうがなかろうが、そんなもんでもいいんだよ。――ニーナに一体何の用？ 場合によっては――」

アズマはベルトにつけられてる剣の柄に手を添え、構えた。アズマの背丈はニーナよりは高いものの、女性の中でもあまり高い部類には属さないにも関わらず、気迫に気圧されたのか、少年はたじろいで一步後退する。アズマの美しい容姿が気迫に拍車をかけたのかもしれない。

「そ、その娘が俺の首飾りを盗み出したのだ！ 一方的に詰っていたわけではない！」

少年がアズマの後ろにいるニーナに向かって指を差す。彼はどうやらまだニーナを疑っているらしい。どうしたら信じてくれるのだろう。

「……は？ ニーナがあんたから盗みを……？ ありえないね。こいつは金に困ってると言われただけで、本当に困ってるのか疑いもせず、自分の金をほいほい人に渡すようなお人よしだ。疑うなら、この街の奴らに聞いて回るといい。皆が皆『ありえない』と証言してくれるだろうよ」

アズマは腰に手をあて、やや上目遣いで少年を見上げる。身分が高だろう少年に対しても、アズマは高圧的な姿勢を崩さない。

ニーナはハラハラした。アズマが誰に対しても不遜な態度なのは今に始まったことではないが、この少年はそのことを知らない。セフィラスの者は、アズマが魔獣退治に必要な人間だと理解しているため黙認してくれてるが、彼はそうもいかないだろう。アズマが罪に問われるかもしれないと思うと胸が痛んだ。

「……その娘から、強い力を感じている。俺の首飾りを持っていないのであれば、そんな力を感じるはずがない。だから詰問していた」

少年がニーナを疑っているのは、ニーナから感じるという『強い力』のせいだろう。だがアズマはそれを聞いても後込みすることとはなく、むしろ余計に剣呑を募らせた。

「何、その強い力って。あたしらみたいな一般人に、そんな抽象的なことを言っても理解できるわけないじゃん。理解を得たけりゃ具体的に説明してくれない？ 具体的に」

「そ、それは……」

少年が言葉を詰まらせる。しかしアズマは詰問の手を緩めず、容赦なく疑問をぶつけた。

「それと、そんな力を感じ取れるって、あんた何者？ 普通の人間じゃないね。――だからって霊術師にも見えないし」

「う……」

「……ここにいたのか」

少年の背後に、突然一人の青年が現れる。少年より一回りほど背が高い長身と、高い位置で結い上げられた長い紫がかった黒髪が特徴的だった。

「あいつ、さっきの……！」

アズマが目が大きく見開きながらボソリと呟いた。長身の青年のことを知っているのだろうか。

「『墮霊』は無事鎮めた。お前の方は見つかったのか？」

「ルキ……！」

少年が青年の方を向いて頬を僅かに綻ばせる。しかしすぐにこちらの方を向き、キッ、と眦をつり上げた。

「あの黒髪の娘から強い力を感じるんだ！ お前も何か感じないか!？」

「強い力……？」

ルキと呼ばれた青年がニーナに視線を向ける。どこか焦点が定まっていない蒼い瞳に見据えられ、ニーナは思わず一步後退る。アズマはそんなニーナを察し、まるでニーナを隠すかのように腕を広げた。

「……珍しいな」

まるで呟くように紡がれた声は抑揚に乏しかった。ニーナに緊張が走る。

「数多の精霊……こんなにも精霊が一箇所に留まってるのは、初めて見た」

「……精霊？」

思わぬ言葉に、ニーナは思わず周りをきょろきょろ見回した。しかし、精霊と思われる存在の姿はどこにもない。思えば、精霊の姿なんて今まで一度も見たことはなかった。

「何を馬鹿な……。こんな狭い場所に、こんな強い力になる程集まるわけがないだろう。一匹の力は、たかが知れているのだからな」

「その数が半端じゃない……群がるを超えて密集してる。……その数は万を超えてるかもしれない」

「ま……!？」

少年があんぐりと大きく口を開く。ニーナは再び自分の周りを見た。やはり精霊のようなものの姿は全く見えなかった。

「気まぐれな精霊が、一箇所にそんなたくさん集まるわけがないだろう！」

「実際ここにいる。『強い力』を感じているのが、何よりの証拠だと思うが」

「で、では何故こんな所に集まっているんだ！」

「俺が知るわけない」

食って掛かる少年に、青年は眉一つ動かさず、アズマ以上に素っ気無い口調でさらりと答える。

「――ねえ。能面男を怒鳴り散らす前に、しなけりゃならないことがあるんじゃないの？」

アズマの冷たい声音にちらりと顔色を伺うと、声音以上に冷たい視線を少年に浴びせていた。ニーナに向けられたものでもないのに、思わずビクリと背筋が震える。

それだけアズマは怒っていた。アズマの怒りの矛先を一身に受けた少年は、う、と声を詰まらせる。

「そ、その……疑って悪かった……」

「え、あ、はい」

罰が悪そうに目を逸らしながら、少年が謝罪の言葉を紡いだ。そこで漸く、ニーナから感じたという『強い力』がニーナのものではなく、今この場にいる精霊のものなのだと理解する。

「その、わたしの方こそ……高い身分の方とは知らず、不躰なことを口にして申しわけありませんでした」

敬語を使わなかったことに対して頭を下げると、なんでお前が謝るんだ、と慚然とした声でアズマが呟いた。

「ま、これで無事疑いは晴れたってわけだ。じゃああたしらはこのへんで」

アズマがニーナの手首を掴み、長居は無用とばかりにくるりと背を向ける。

「あ、アズマ、ちょっと待ってくれ」

「ん？」

アズマはぐいぐいと引っ張る力を緩めた。ニーナは項垂れている少年の方を見遣る。

「わたし達も、彼の首飾りを一緒に探さないか？」

「はあ!？」

素っ頓狂な声をあげたアズマはニーナの手首から手を放し、その手でニーナの額を勢いよく小突く。額から頭全体にじんわりとした痛みが広がる。

「このお人よし！ 何でわざわざ犯人扱いしてきた奴の失くし物を、あたしらが探さないといけないのさ！ 知ったことじゃないだろ！」

「だ、だってあの人困ってるんだろう？ 大事な首飾りを失くしてしまって」

ニーナを厳しく問い詰めたのも、その首飾りがとても大切だからに違いない。そんな大事な物を失くしてしまったら、とても悲しいだろう。少しでも力になれるのなら、力になりたいと思った。

「だからってね……！ あんたを家に帰したら、あたしは見回り、あんたはケティスさんの手伝いがあるのを忘れた？ ニーナのお人よしが今に始まったことじゃないのは充分すぎるほど知ってるけど、そんな余裕はあたしにはないよ」

「う……」

この騒ぎで神殿からの帰り道だということをすっかり失念していた。ケティスはゆっくりしてきていいと言っていたが、首飾りを探すことになったら帰りは更に遅くなり、迷惑をかけてしまうだろう。世話になっている身なのだから、不必要な迷惑は避けるべきだ。

「……アズマ、身勝手に申しわけないが、見回りのときに一緒に探すことはできないか？」

店で手伝いをしなければいけないニーナと違い、アズマの仕事はセフィラスを回ることだ。周囲に気を配るのだから、運がよければ見つかるかもしれない。

「あたしは荒事専門。物探しは専門外だから。――それ以前に、街のどこかで失くした小さな首飾りを、少人数で探せるわけがないし」

「そ、そうか……」

やはり無理かと、ニーナは肩を落とす。しかしそれなら尚のこと、彼ら二人で探すのは大変ではないだろうか。

落ち込むニーナを見兼ねたのか、仕方ない、とアズマが嘆息しながらニーナの頭にポンと手をおいた。

「……人数増やせばましにはなるかもね。隊長に連絡とって、団員（みんな）に手伝って貰う。それでいい？」

「！ ありがとう！」

嬉しさのあまり、アズマの手をとってぶんぶんと振った。何だかんだ言いながらも、アズマは優しい。いつも、こうして手を差し伸べてくれる。

「そんなわけだから、あんたが失くしたっていう首飾り、探してやるよ」

「……いいのか？」

「感謝するなら、こっちのお人よし娘にね」

つんと軽く頭の後ろを小突かれる。それがアズマの照れ隠しの行動だということは、長いつきあいでわかっていた。

「自警団の隊長に話つければ、皆喜んでやってくれるだろうよ」

「じ……自警団？」

しかし少年はそれに喜ぶでなく、逆に顔色を青くさせた。アズマが訝しげに眉を寄せる。

「何、そのいかにも罰が悪そうな顔は」

「い、いろいろこちらにも事情があってだな……！」

「事情？ 失くした物がどれだけ大事か知らないけど、それよりも大事な事情っていうのがつまらないことなら、あたしは協力しないよ。ま、大方予想はつくけど」

「……っ」

少年はアズマからふいっと顔を逸らす。アズマの予想がついているという自警団に話せない事情とは何なのだろうか。ニーナには全く検討もつかなかった。しかし、大事な首飾りを探すことに支障をきたすことなのだから、よほどのことに違いない。

「やはり、わたしも手伝う。わたしが言い始めたことだし、ケティスさんにも事情を説明すれば、探すことを許してくれるかもしれない」

自警団に手伝って貰うことができないのであれば、やはり自分が手伝うべきだ。アズマはそんなニーナを見て腰に手をあてながら大きく嘆息した。

「手伝う気満々なのはもう仕方ないとして、せめて失くした首飾りの特徴くらい聞いとけよ。――それくらいは説明してくれるんだろうね？」

「あ、ああ。それくらいなら」

「それなら、ここではなくて、どこか落ち着いて話せるところへ移動しませんか？」

魔獣に荒らされずに済んだ通りには、ちらほらと人が戻ってきていた。建物の影になっている小さい小路も、そのうち誰かが通るかもしれない。そうしたら通行妨害になってしまう。

「なら、ケティスさんとこの花屋でいいね。探す許可貰うなら、その方が都合もいいし」

「えっと、そこでいいですか？」

「俺はどこでも構わない」

少年が頷く。背の高い青年を見上げると、彼もコクリと首を縦に振った。ルキと呼ばれていた青年は、どうやら口数が少ないらしい。

ふとニーナは、自分達がまだ自己紹介をしていないことに気づいた。これでは彼らが自分達を何て呼べばいいかわからないだろう。

「申しわけありません、自己紹介がまだでした。わたしはケティスさんという方が経営している花屋で働いているニーナと申します。こちらは自警団に所属しているアズマです」

アズマを手で示してから、ペコリと頭を下げた。

「……俺はゼフォン。こいつは俺の従者のルキだ」

ゼフォンと名乗った少年は、素っ気無い口調ながらも、ニーナ達に名前を教えてくれた。

花屋に戻ると、ケティスが目を丸くしながらニーナとアズマを見た。驚いているのだろう、ニーナとアズマが二人の男を連れてきたという事実に。ニーナは色恋に疎く、アズマはそういったことに全く興味がない。だからこそケティスが驚くのも無理は無い、とアズマは思った。

「まあ……ようこそいらっしゃいました。狭いお部屋しかございませんが、どうぞゆっくりなさって下さいね」

ゼフォンの着ている服を見て、お忍びでやってきた貴族の子息と検討つけたのだろう、ケティスは丁寧な口調で中へと案内した。その際ニーナに、今日のところは店の手伝いはいいからとつけたして。

アズマはケティスの口調が浮かれていることに気づいていた。気分は娘が初めて恋人を連れてきた母親の心境なのだろう。共に食事をしていると、ニーナとアズマにいい人が見つからないかと零すことがよくあったから、相当嬉しいに違いない。しかし、あの二人はケティスが期待するような人間ではなかった。

先行するニーナと、それに続く二人の男。その後ろからアズマは二人を見据えた。ルキと呼ばれた長身の男は霊術師だとわかる。問題は、もう一人の背が低い方だ。

あの場にいたという精霊の存在を感じとれるなど、普通の人間ではありえない。だからといってルキのような霊術師ではないだろう。存在を感じてはいたが、精霊の姿は彼に見えてはいなかったから。

本当なら、そんなよくわからない人間をニーナに近づけたくはなかった。しかしお人よしを発動したニーナを完全に止めることは、アズマにはできない。ニーナは大人しそうな顔をして、一度決めたことは貫く頑固さを持っているのと、そんなニーナに、アズマは何だかんだ言いつつも甘くなってしまうから。だから自警団に押し付けようと思ったのに、肝心の少年がそれを拒んでしまう始末。

自警団を通しての搜索を拒んだ理由は、大体検討がついている。自分の屋敷を勝手に抜け出してきたからに違いない。従者をたった一人だけしか連れていないのがその証拠だ。自警団を通して、自分の居場所を親に知られるのを恐れたのだろう。

貴族であることは強く否定していたが、似たようなものだろうとアズマは判断している。着ている服は一般人には手の届かないような上質なものだし、特権階級にある者特有の傲慢さも伺えた。

更にもう一つ問題がある。従者が『霊術師』という事実だ。霊術師は特定の人間に仕えることを禁止されている。なのに先ほどゼフォンはルキのことをはっきりと『己の従者』と宣言した。この事実は一体何を指しているのか。

「どうぞ、こちらにおかけください」

談話室に辿り着き、ニーナが二人に椅子を勧めた。青年は無言で座り、少年は偉そうに腕を組みながら座る。思わず蹴り飛ばしたくなる衝動を抑え、アズマは青年の向かいに座り、ニーナは少年の向かいの椅子に腰をかけた。

「ケティスさんから許可を貰ったので、今日一日はあなた方のお手伝いができます。失くされたという首飾りの特徴を教えてください」

「できれば絵に描いてくれると助かるんだけど」

アズマは近くの棚を座ったまま開け、その中にしまわれていた白紙と用筆をゼフォンに差し出す。

「ア、アズマ、行儀が悪いぞ」

「別に今は関係ないじゃん」

ニーナの注意はさらりと流した。今ここで行儀を説くことは全く問題ではない。

「これでいいか？」

さらさらと、あつという間に描かれた絵は、大きめの宝石が淵に嵌めこまれた、至ってシンプルな首飾りだった。むしろ、その宝石を首飾りにするために留め具をつけたものといった方が正しいかもしれない。

「この大きな宝石がついているのが特徴だ。この石は緑風石と呼ばれている」

「緑風石とは何ですか？」

ニーナが初めて聞く単語に首を傾げる。アズマも『緑風石』と呼ばれる宝石の名前は聞いたことが無い。

「魔力が込められた特殊な石だ。主に風の精霊がこの宝石の魔力を好むため、霊術師が己の魔力を補強するためにアクセサリーとして使っている」

アズマはルキの腕につけられている幾つものブレスレットを見た。だから霊術師は装飾品をジャラジャラとたくさん身につけているのか。露出した肩に彫られた紫紺の刺青も、魔力を補強するためのものなのかもしれない。

「緑風石、っていう名前がついてるってことは、色は緑？」

「ああ。――具体的な特徴といたらそのくらいか」

つまり緑色の大きな宝石がついた首飾りを探せばいいということか。

「具体的な大きさはどのくらいなのでしょう。この絵と全く同じですか？」

「そうだな。……いや、もっと大きいかもしれない」

「そんなでかいもん、どうしたら失くせるんだよ」

この絵より大きいとなると、直系五センチくらいはある。それだけ大きければ重さもあるし、失くしたと同時に身体に違和感を覚えるものではないだろうか。

「い、いや……それは……」

「的当てをしてたら、首から下げていた首飾りがいつの間になくなってたらしい」

今まで黙っていたルキが、久しぶりに口を開く。

「ばっ、馬鹿、言うな！」

アズマは右手を額に当てた。的当てとは拳大の大きさのボールを的に当て、当たった場所と数によって景品が貰えるという遊べる店だ。これはあくまで小さな子供のための店であり、アズマと同じ年頃の少年が普通にやるものではない。

呆れ混じりに嘆息すると、ゼフォンは視線を泳がせた。本人も自分がどれだけマヌケだったか自覚はあるらしい。

「的当てか、わたしもやりたかったな」

「今はそんなこと言ってる場合じゃないっつの」

ここにもう一人子供がいた。話が脱線する前にピシャリとこの話題を断ち切る。

「的当て屋の周辺は当然探したよね？ それで見つからないとなると……誰かにスられた可能性が高いね、これは」

人が集まるということは、必然的に悪人も集まりやすい。そんな悪人を取り締まるのも自警団の仕事だった。

ちらりとルキがつけているブレスレットを見遣る。赤と青と黄色が見える中に、緑色をした宝石もあった。恐らくそれが緑風石だろう。緑柱石（エメラルド）のような鮮やかさはないが、深い緑色は落ち着いた印象を与え、金の余っている者なら一つは欲しいと思わせるかもしれない雰囲気を持っていた。しかもそれがとてつもなく大きな宝石ともなれば、高い価値があると子供でも思うに違いない。

「これは本格的に自警団（うち）の管轄だわ……そんな高そうな首飾りを堂々と首から下げて、盗られない方がおかしいけど」

むしろそんな大事な物を何故堂々と身につけていたのか。誰かに盗まれる危険性を全く考慮していなかったのだろうか。

今度はゼフォンの方を見遣る。歳の頃はアズマと同じくらいだろう。だが的当てを嬉々としてやる程精神的に幼い、もしくはろくに外に出たことがない故の世間知らずな少年が、自分の大切な物が誰かに盗まれるという考えに辿り着くことができないのは、仕方がないのかもしれない。

だからすぐにルキに視線を戻した。

「あんたがこいつの保護者だよ？ 失くしたのに気づかなかったこいつもこいつだけど、失くさないよう充分注意させるのが従者の役目じゃないの？」

もしもアズマがルキの立場だったなら、盗まれる可能性を示唆し、一時的に自分が預かるか、せめて服の下に入れて見えないようにするくらいはさせる。少なくとも、堂々と首から下げさせることはさせない。だというのに、何故この男はそれをしなかったのか。

「普通の人間に緑風石は何の価値もない。だから構わないと思った」

「珍しい石はそれだけで充分価値になるんだよ！ それに普通の人間が、石を見ただけで緑風石だとわかるわけないっつの！」

「考えが及ばなかった」

悪びれるでもなく焦るでもなく、変わらない無表情のままさらりと告げるルキに、アズマはがくりと脱力した。主人が世間知らずなら、従者も従者だ。

「何で同じ世間知らずを従者に選んでんだよ……もっとまじな従者はいなかったわけ？」

「俺が自由にできるのはルキだけだ、仕方あるまい」

フンと腕を組むゼフォンは相変わらず無駄に偉そうだった。これだから温室育ちのお坊ちゃまは、と内心毒づく。

「ア、アズマ、失くしてしまったものはもう仕方がないだろう？ そのことは置いておいて、今はどうやって探すかを考えなければ」

「……だね」

確かにそれよりも、探す方が今は大事だ。

「首飾りはスられたと判断していいだろうね。そっちは自警団に任せるのは嫌らしいが、そうも言ってられないわ、これじゃ」

得物を獲得したスリが、この街に悠々と潜伏し続けるわけがない。すぐにセフィラスから立ち去るに決まっている。誕生祭という祭りの真っ只中、通常ではありえないくらい人が集まっているセフィラスでスリを見つけるには、自警団の協力が必要不可欠だ。

「たった一人を少人数で見つけるなんて無理無理。スった奴を逃がすのがオチだね」

「そ、それをどうにかならないか……？」

「ならないから言ってる。首飾りを諦めるか、親に居場所を知られるのを覚悟で自警団に協力してもらおうか。どっちがいいかさっさと決めて」

ゼフォンが苦虫を噛み潰したかのような顔をする。そんな顔をしてどうにもならないことなのだから腹を括ってもらおうほかあ

るまい。そしてアズマの言葉に否定する様子がないことから、どうやら家出中だという推察は当たっていたようだ。

「いや、方法ならある」

そう口を開いたのはルキだった。しかし浮かべる表情は相変わらずの無表情。何を考えているのかサッパリわからない。

「本当か、ルキ！」

ゼフォンが目を輝かせながらルキを見た。さっきまで首飾りをとるか家出をとるか悩んでいた顔とは思えない。

ルキはそんなゼフォンを後目に、ニーナを見遣った。アズマの目がピクリと動く。

「確かニーナといったか」

「あ、はい」

「お前は精霊の姿が見えるか？」

いきなり突拍子もない質問にアズマは面食らったが、ニーナはその質問に驚くでもなく、普通に首を横に振って答えた。

「いいえ、わたしは一度も精霊の姿を見たことはありません」

「それが何か関係あるっての？」

思わずキツイ口調になってしまったが、ニーナのことになるかと警戒をせざるをえない。

「ニーナは精霊に好かれている」

「.....もっと一般市民にもわかるように説明してほしいんだけど」

ルキの細かく区切られた断定口調は、なんとも要領を得ない。だから何で好かれているんだとか、それが何の関係があるのかとか。言いたいことは山ほどあるが、それを言ったところで要領ある答えが返ってくると思えなかった。

「先の場所で、数多の精霊が一箇所に集まっていたらう」

「あたしらは何も感じなかったけどね」

強い力を感じると騒いだのはゼフォンだ。そしてルキが言うには、丁度あの場に多くの精霊が集まっていたかららしい。

アズマははっとした。もしも精霊が『偶々』あの場所に集まっていたわけではないのなら――ルキが今言ったことに説明がつく

。「初めは俺も偶然だと思った。だがここに移動する際、あの場にいた精霊達もぞろぞろとニーナの後を追いつつ始めた。今はいないが、外へ出ればまた精霊が彼女の周りに集まってくると思う」

「.....なら、今ここに精霊がいないのは、何で？」

ニーナが精霊に好かれる体質だというのは、今この場にも精霊はいるはずだ。それなのに今はいないという。それはおかしくないか。

「ゼフォンの傍にいたくないからだろう。広い外ならまだしも、こんな狭い空間では特に」

「.....？ ゼフォン様は精霊に嫌われているのですか？」

「いや、嫌われてはいない」

さりりとお互い不躰なことを言ったのは気に留めず、アズマはルキの次の言葉を待った。

「ゼフォンは精霊から畏れられている」

「ルキ.....！」

ゼフォンがガタリと音を立て、椅子から立ち上がった。その言葉とゼフォンの反応に、アズマは驚きを持ってゼフォンを凝視する。

精霊に畏られる存在は、この世にほんの数人しかいない。

「ニーナが惹き寄せる精霊の力が借りられれば、探す手が大幅に増える」

「借りたいと言われましても.....わたしにはどうすることもできないのですが」

「だからゼフォンがいる」

ニーナはしきりに首を傾げていた。ゼフォンの正体に気づいていないのではなく、彼のような存在がここにいるのが不思議でならない、といった顔だ。信じられないのも無理はない、アズマも信じられないのだから。

「.....ここまで聞いたらのなら、もう黙っている意味はないな」

ゼフォンが嘆息しながら椅子に座りなおす。不本意を顔にした赤茶色の瞳をルキに向けた。

「もう察しがついていると思うが、俺は『神』だ。.....正確なことを言えば風神の息子で、まだ正式な神ではないが」

風神の息子。一切関わることはないと思っていた人智を超えた存在。本当ならもっとまじな嘘を言えと言いたいところだが、これはきっと本当のことだろう。ゼフォンの言った自分は貴族ではないという反論と、人には仕えないはずの霊術師であるルキが、彼の従者をしている事実。何より、彼らの言動は全て辻褄が合っている。

ニーナの方に目をやると、ニーナは黒の瞳を大きく見開き、固まっていた。風神に会えたという感動よりも、衝撃の方が大きかったのだろう。風神の姿を見たがっていた者達も、こんなところで会ったらきっと同じ反応をするはずだ。

人間の王よりも手の届かない存在に、こうして身近で出会いたいと思うわけがない。遠目で僅かに姿を視界に納めるだけで、人間にとっては充分なのだから。

「……風神の息子なら、自分の力で首飾り探せばいいんじゃないの？ 一一と、言いたいところだけど、それができないからこうして途方に暮れてるのか」

神は精霊を従える。自分の力で精霊を総動員すれば、何を失くそうが簡単に見つけられるだろう。ルキが提案したことを思い浮かべないはずがない。しかし今彼は、それができない状態にある。

「……失くした緑風石の首飾りには、街に来る際に人間のフリをするため、俺の風神としての力のほとんどを封印してあった。…それを失くしたため、今は力を使うことができないでいる」

「だからこそ、ニーナの力を借りたい」

漸く話が見えてきた。風神の息子であるゼフォンは、ほとんどの力を失い、精霊の存在を感じることもしかできなくなってはいるが『神』であることに変わりはなく、精霊は今でもゼフォンを畏れている。そこでニーナが精霊を集め、集まった精霊にゼフォンが命令を下せば、視えなくても精霊を従えることができるだろう。

そしてもしも自身の力のほとんどを失ったことを親である風神に知られたら、恐らく説教だけでは済むまい。自警団への協力を拒否したのは居場所を知られたくないのもあるだろうが、それが一番の理由だろう。親の説教が怖くて戻れないというのは、風神の子ども普通の子供と同じか。

「その、わたしがどれくらい精霊を集められるのかは、わかりませんが、それでお役に立てるのであれば、せ、精一杯お手伝いしたいと思います……！」

ニーナが両の掌を握り締めるが、声と顔が緊張に震えているのがすぐにわかった。どこかの放蕩息子かと思ったら、それが風神の息子だったのだから普通の人間なら緊張するのが当然か。アズマからしたら、自身の半身ともいえる大事な物をうっかり失くしたマヌケな奴としか思えないが。

「ニーナが協力する気満々だからそれはいいとして、具体的にはどうすればいいのさ。ただ外に出ればいいわけ？」

「ああ。外なら、傍にゼフォンがいても精霊は寄って来ると思う。暫くゼフォンの傍にいてくれれば、それでいい」

そうすれば後は自分達でどうにかなるらしい。それだけなら、ニーナが面倒くさいことに巻き込まれることはなさそうだ。

「なら、早速外へー」

「アズマちゃん！ 大変よ！」

突然部屋の扉がバン、と開かれる。顔を青ざめたケティスが息を切らしながら言葉を続けた。

「魔獣が現れたんですって！ 自警団の人が呼びにきたわ！ 今すぐきてほしいって！」

「また!?!」

アズマは勢いよく立ち上がる。魔獣は先程倒したばかりだというのに、再び現れたというのか。

魔獣はそうそう現れることはない。そんなにしょっちゅう現れていたら、いくら腕の立つ者が大勢いようとも、どの街も人が住めないくらい荒らされている。

アズマだけでなく、ニーナもルキにも緊張が走っていた。風神の息子であるゼフォンですら、眉根を寄せ、顔を強張らせている。彼らにとっても、驚愕に値することのようだ。

「悪いけど、探すのは後だ。あんたらは危ないからここに一一」

「俺も行く」

アズマの言葉を途中で遮り、ルキが立ち上がった。一瞬呆気にとられたが、彼は霊術師であり、先の魔獣との戦いでは逆に彼に助けられたことを思い出す。戦力としては申し分ない相手だ。

「なら来て。一一行って来るから、絶対この部屋から出るなよ！」

ニーナ達に釘をさし、ケティスに軽く頭を下げ、ルキを伴って部屋を後にする。外に出ると、団員が今か今かとアズマを待っていた。

「やっときたか一一そいつは？」

しかしアズマが見慣れない男を連れていたことに彼は眉を寄せた。瘦身の長身であるルキは一見強そうには見えないのだから、その懸念は正しいと言える。

「こいつは霊術師。足手纏いにはならないことは保障する。それよりも、早く魔獣が出たところまで案内して」

彼は得心がいったとばかりに軽く頷き、こっちだと先行して走り出した。二人はその後を追う。

今は間を空けずに現れたことを気にするよりも、逸早く退治することに専念するべきだろう。アズマは余計な雑念を払い、魔獣と戦うことのみを考えることにした。

このとき、この事件に自分だけでなくニーナも深く関わっていくことになるとは露にも思わずに。

ニーナは恐る恐る顔を上げ、ゼフォンの方を見る。彼は深く考え込んでいるのか、顎に手を添えてずっと俯いたままだった。ニーナは心の中でうーん、と唸る。

アズマにこの部屋から出るなときつく言われた為、言われた通りに大人しくしているが、同じく残された少年は先程からずっと考え込んでしまっているため、沈黙が部屋の中を覆っていた。

ニーナは特別おしゃべりというわけでもないし、話上手でもなく、沈黙が苦手というわけでもない。だが、相手が風神の息子という目上の人すぎて、彼のために何か盛り上がる話をした方がいいのか、それともこのまま黙っていた方がいいのが全くわからなかった。

アズマが聞いたら気にしすぎだと呆れるかもしれないが、ニーナはアズマと違って、目上の人に敬意払うのは当然という考えの持ち主だ。だから自分のせいでゼフォンに不快な思いをさせるわけにはいかない。

二人の間に置かれたテーブルの上にある、湯気が立っているお茶をちらりと見た。ケティスがアズマとルキが行ってしまった後、二人にと用意してくれたものだ。しかし彼はそれに手を伸ばそうとはしなかった。このままではせっかくのお茶が冷めてしまう。

「あ、あの、考え事をしている最中申しわけありませんが、宜しければ冷めてしまう前にどうぞ召し上がって下さい」

ケティスの淹れたお茶は美味しい。普通の紅茶は砂糖をたくさんいれないと飲めないニーナも、ケティスのハーブティーだけは何も入れずに飲むことができた。まろやかで舌触りが優しく、後味もすっきりしている。滅多に味を褒めることのないアズマでさえ、美味しいと零していたから間違いない。

「.....お前は飲まないのか？」

同じく手がつけられていないニーナのカップを見てゼフォンが呟いた。

「お客様より先に飲むわけにはいきません。ケティスさんの淹れてくださったお茶は本当においしいので、是非飲んでいただきたいです」

ゼフォンの赤茶色の瞳を見ながら、いかにお茶がおいしいかを力説した。お茶に使われているハーブから愛情をかけて手ずから育てていること、あらかじめ温めておいたティーポットに沸騰したばかりのお湯を注ぐタイミングの的確さなどを。

「アズマも、ケティスさんと同じくらい上手にお茶を淹れることができるんですよ！」

話は気づかぬうちにアズマのことになっていった。手先が器用でお茶を淹れるだけでなく料理も上手いこと。青い髪と翠の瞳がとても綺麗で男の人に人気があるのに、本人は全くその気がないこと。身体能力も高く、いつもニーナを守ってくれていること。口は悪いが根はとても優しいのだということ。そしてそんなアズマが大好きなのだということ。何か盛り上がる話をしたほうがいいのか悩んでいたことなど、既に記憶の片隅においやられていた。

「.....お前があの娘のことが好きだということはよくわかった。だが、そろそろ飲まないで冷めてしまうのではないのか？」

「あ、そうでした！」

ゼフォンは呆れ混じりに嘆息すると、カップに手を伸ばした。そしてカップを持ち上げ、口をつける。それを見計らってニーナもカップに口をつけた。まろやかな味とハーブの香りに思わずうっとりと目を細めた。

「.....美味しいな」

「でしょう！」

ゼフォンが口にした賛辞に、ニーナはやはりケティスのお茶はすごいと思った。自分のことのように嬉しく思う。

ふと、彼はいつも何を食べているのだろうかかと気になった。

「神殿では、普段どのようなものを口にされているのですか？」

神官は質素を主としているが、神も同じように質素なものなのだろうか。それともニーナ達とそれほど変わらないのだろうか。しかしゼフォンの答えは想像を絶するものだった。

「.....神殿では食べ物を口にすることは一度もない」

「ええ!？」

「『神』は人と同じ姿をしているが、身体構造は全く違う。食べられないわけではないが、人のように外部から栄養を摂取する必要がないんだ」

思わず絶句しているニーナに、ゼフォンは更に続けた。

「『神』は無欲でなければならない。何故なら、この世界を構成している精霊を意のままに従属させられるからだ。己の欲のために精霊を動かすことがあってはならないからな」

腕を組みながら語るゼフォンは、とても誇らしげだった。

「すごいですね.....わたしだったら無欲でいることなんてできません」

アズマはよくニーナに欲がない、と言うが、ニーナにだって欲はある。ケティスの花屋がずっと繁盛してほしいとか、アズマ

とずっと友達でいたいとか。できればずっとこんな穏やかな生活が続いてほしいとも思っている。これらも立派な欲だろう。

「でも、それは少し寂しいですね……」

無欲というのは確かに立派なことだ。しかしこの世界にはケティスのお茶のように、美味しいものがたくさんある。きっとこうしてゼフォンと出会わなければ、彼は美味しいものを口にするという経験をすることはなかっただろう。それを思っただけで言葉が出た。

ゼフォンはそれを聞いても何も言わなかった。ニーナははっとした。平民の娘の癖に風神の息子であるゼフォンに向かって『それは寂しい』などと、生意気な口を叩くなど思われてしまってもおかしくはない。

「も、申しわけありません！ 風神様のご子息に生意気なことを言ってしまって……！」

ニーナは慌ててゼフォンに頭を下げた。彼の機嫌を損ねてしまったらどうか。

「……顔をあげろ。俺は別に怒ってなどいない」

かけられた声音は落ち着いていた。ニーナは恐る恐る顔をあげる。

「正直に言えば、驚いたな。大仰に誉めそやす者なら大勢見てきたが、お前のように寂しいと言われたのは初めてだ。不思議な気分だが——口先だけ達者なことをいう輩よりもよほどいいな」

そういうとゼフォンは微笑んだ。穏やかで温かみのある笑みはもともと端正な顔立ちをしていたのと相俟って、思わず小さく綺麗、と呟く。魅入られたかのようにゼフォンから視線を動かすことができず、知らず知らずのうちに呆然と彼を見つめていたことに暫く気づけなかった。

「おい、どうかしたのか、ニーナ」

ゼフォンに名前を呼ばれてニーナは漸く我に返る。

「す、すいません……！ その……ゼフォン様があまりに綺麗に微笑んでらっしゃるので、思わず見惚れてしまいました……！」

ニーナは慌てて頭を下げた。今度は勢いがつきすぎてテーブルにゴン、と額がぶつかる。じんじんと額が痛んだ。

「みと……!? え、あ、いや、その、なんだ」

ゼフォンの歯切りの悪い言葉の後は、再び居心地の悪い沈黙が続いてしまう。

「と、とりあえず、謝らなくていいから、顔をあげろ」

ニーナは羞恥と痛みと申し訳なさが混じった複雑な思いを胸中で交錯させながら、少しずつ顔をあげた。ゼフォンはテーブルにひじをつき、手を額に当てて軽く俯いている。アズマがよくする姿勢だ、と何とはなしに思った。

しかしまた言葉が続かなくなってしまう。お茶の話はもうしてしまったから、今度は別の話を考えないといけぬ。そこでふと頭を過ぎったことがあった。空気を一変させるためにもちょうどいい話かもしれない。

「あ、あの……一つお聞きしたいことがあるのですが……」

「な、なんだ」

「精霊について、なんです……」

ニーナが彼らを惹き寄せていると先程ルキは言ったが、今まで十五年間生きてきて、精霊の姿を見たことは一度もない。特に変わったことが起きたこともなかった。

精霊について知っていることも「世界を構成している基となる存在」という人並みのことだけだ。何故自分が精霊を惹きつけるのか、どうして精霊はニーナに惹きつけられるのか、全く想像もつかない。

しかし実際精霊はニーナの周りに集まっている。何故集まるのかわからないまでも、せめて精霊について知りたいと思った。

「成る程な。いいだろう、特別に教えてやろう」

ニーナの思いを汲み取ってくれたのか、ゼフォンは快く頷いてくれた。

「精霊を一言で表すならきまぐれ、だろうな。精霊にも感情というものも存在するが、基本、本能のままに生きている。自分が楽しいと思ったことをして、飽きたらやめる。好奇心が強く、次から次へと関心ごとが移っていくんだ。だから一箇所に止まることはまずない」

だからニーナの周りに精霊が集まっていたことをルキは「珍しい」と言ったのか。

「大抵の精霊の個々の力はほんの微々たるもので、一匹だけでは何もできない。まあ、中には例外もいるが。だから何かをすることになると、同じ事をしたがる仲間を集めだす。このときばかりは何百何千と集まり、風を吹かせたり雨を降らせたりするんだ。そして気が済んだら各々が好き勝手な所へ散り散りになる。精霊が集まる数によっては火事や地震などの災害を引き起こしてしまうが、彼らに悪気は全くないと言っている。自分達がしたいことをしているだけだからな。つまり、善悪の観念がないんだ」

火事や地震といった災害が、まさか精霊が集まりすぎたために起きるものとは思わず、目を丸くする。

「そんな精霊を好き勝手にさせておけば、人間や魔獣といった生物が、満足に生きられなくなってしまう。だからこそ神が精霊を従え、そういった災害を頻繁におこさせないようにしているんだ」

それでも全ての災害は防げないらしい。全てを防ぐとなると、そよ風すら吹かすこともできなくさせてしまうからだとか。

「でも、何故そんなきまぐれな精霊達がわたしの周りに集まるのでしょうか……？」

少しは精霊のことを理解できるかもと思ったが、話を聞けば聞く程精霊が自分の周りに集まる理由がわからなくなってきた。二

ーナは自分が精霊がたくさん近寄ってくるほど、面白い人間だとは思えない。むしろ、アズマのような美しい容姿を持つ人間の傍の方が楽しいのではないだろうか。

「それについては詳しいことはわからない。だが、お前を見ていてふと思ったことがある」

ゼフォンは残っていたお茶を全て飲み干すと、テーブルの上に置いた。

「恐らく居心地がいいのだろう。お前の心は純粹で澄んでいるからな。その心に惹かれてやってくるのだと思う」

そうやって再び微笑んだゼフォンの笑顔は、やはりとても綺麗だった。

「あ、ありがとうございます！」

同じように見惚れそうになるのを防ぐためにーナは頭を下げた。綺麗な人の笑顔の威力はすさまじい。ドキドキと心臓が大きく脈を打っているのがわかる。

「え、えっと、お茶のおかわりはいかがですか？ わたし貰ってきますよ！」

「ふむ……それではもらおうか」

ゼフォンのカップを手にとり、失礼しますと頭を軽く下げてから、足早に部屋を出た。ケティスにお茶を淹れなおしてもらう間に、心をなんとか落ち着けなければ。

アズマには部屋から出るなといわれたが、家の外にさえ出なければ大丈夫だろう。

ーナは大きく深呼吸を繰り返しながら、ケティスのいる台所へ向かった。

「……本当に変わった娘だな」

ゼフォンはニーナが部屋から出て行ったあと、一人ボソリと呟いた。あまり多くの人間を知っているわけではないが、それでもニーナは変わっているといっているだろう。

友人のことを語るとき、ニーナの瞳はとてもキラキラと輝いていた。その瞳に打算的な含みは何一つない。それだけアズマという青い髪の少女のことを誇りに思っているのだろう。

ゼフォンが神官以外で話したことがある人間は、ほとんどが己の欲望を内面に潜めた者達ばかりだった。全ての人間がそんな者達ばかりではないとは知ってはいたが、だからこそニーナの存在はゼフォンにとって衝撃的だった。

犯人扱いされたにも関わらず、自ら進んで失くしてしまった首飾りを探すのを協力すると言い出したときは、何てお人よしなんだと思った。青い髪の娘が心配するのもよくわかる。あの純粋さは貴重なものだが、この世の中、いい人間ばかりではない。少なくとも、ゼフォンに近づいてくる人間のほとんどは利己的な者ばかりだ。人のよさにつけこまれないとも限らないだろう。

しかし同時に嬉しかった。首飾りを探すために何人かに見なかったかと声をかけたが、大変だねと同情されることはあっても、手伝おうと言ってくれた者はいない。彼らにも都合や事情があるのだから決して恨んではないが、困っているのだからと申し出てくれた彼女の優しい心に、とても感銘を受けた。背丈はあまり背が高い方ではないゼフォンよりも頭一つ分くらい小さいというのに、なんて広い心を持っているのだろう。

ハァ、と肩を竦めながら嘆息する。ニーナの心の広さに比べ、自分が神殿を抜け出した理由の情けなさときたら。青い髪の娘がこれを知ったら怒り狂うに違いない。抜け出したときはこれで何とかかなと思ったが、思い返せば何の解決にもならないと漸く気づいた。

しかし神殿に戻るのは億劫だ。いくら父の誕生日で騒がしいといっても、そろそろゼフォンがいないことに気づき始めている頃だろう。ゼフォンの苦勞を知っている父親は特に気にすることはないだろうが、神官は慌てているかもしれない。そして執念深い奴らは、ゼフォンの帰りをずっと待ち続けている可能性もある。それを考えると気分がすっかり暗くなった。

神殿の者達に首飾り探しを手伝ってもらうことも一旦は考えた。しかし、今日は幸か不幸か父の誕生日。神官達は集う民達の相手をするので精一杯だろう。そんな彼らに更に仕事を増やしてしまうのは気が引ける。

父は父で、自業自得なのだから自分で探せというに違いない。母も父の意見に同意するはず。

そんな状態のゼフォンを奴等は放っておかないに違いない。つけいる隙を与えるきっかけは、絶対に作りたくなかった。

結局、まずは首飾りを自力で探すという結論に至る。奴らのことは首飾りが見つかった後で考えればいいだろう。

ふとテーブルの上を見ると、ニーナのカップがちょこんと置いてあった。人におかわりを勧めておきながら、自分の分を持っていくのは忘れてしまったようだ。思わずクスリと笑みを漏らす。

そういえば、お茶というものはどうやって淹れているのだろう。一応知識だけは知っているが、お茶を飲んだことも初めてなゼフォンにはいまち想像がつかない。こうして神殿の外に出ることは滅多にないのだから、見聞を広めるためにお茶を淹れているところを見学させてもらうのもいいかもしれない。

わくわくと胸を高鳴らせ、ゼフォンは部屋を出てニーナがいるところを目指した。自分にあくまでもこれは見聞を広めるためであり、決して興味本位ではないのだと言い聞かせながら。

狭い家だから不慣れな所だとしてももすぐに見つかるだろう。近くの部屋を覗きながら進んでいく。

「……………」

すると何やら言い争いをしている声が聞こえてきた。不審に思い声のした方へ走ると、そこにニーナがいた。思わず目を瞠る。ケティスと呼ばれた中年の女性に、首を絞められているではないか。

「何をしている！」

ゼフォンは咄嗟にケティスに向かって身体を当てる。うっ、と短い悲鳴をあげてケティスは床へと倒れこんだ。

「ゲホッ……ゲホッ」

「大丈夫か!？」

蹲りながら咽るニーナに近寄る。ニーナは青い顔をしながらも、ゼフォンに向かってコクリと頷いた。どうやら大事には至らなかったようでゼフォンは内心安堵する。

「あの女、一体どうしたんだ。お前の保護者だろう？」

「そ、それが……突然のことで、わたしにもよくわからなくて……」

ニーナがゼフォンのカップを持っておかわりを貰いに来たとき、ケティスはいつものように笑顔で頷いてくれた。急いで準備をしている最中、突然ガシャンという音がした。ケティスがティーポットを床に落とした音だった。後はカップに注ぐだけだったのにどうかしたのだろうとケティスに近寄ると、いきなり強い力で肩を思い切り掴まれた。

「風神はどこだ」

「え……？」

いつも穏やかな声音しか聞いたことのないケティスから、低いドスの利いた声を初めて聞いて、ニーナは混乱した。しかもゼフォンが風神の息子だということをケティスには言っていないのに、何故彼女はゼフォンが風神だと知っているのか。

ニーナが何も言えないでいると、ケティスはいきなり両手でニーナの首を掴み、力を込めた。そこには情けも容赦も微塵もない。

「ぐっ……うう」

「隠しても無駄だ。我にはわかる。言え、風神はどこだ、どこにいる！」

苦しいのとケティスの豹変に混乱しているのとで、ニーナはケティスの問いに答えることができなかった。

「何をしている！」

そのときゼフォンが現れ、ニーナは解放された。

どうしてケティスが何かに憑かれたかのように突然変わってしまったのか、全く予想もつかなかった。自分がケティスを怒らせてしまったのだろうかとか今までの行動を振り返るが、心当たりも全くない。

床に倒れたケティスがよろよろと起き上がった。四つん這いになると、顔をゼフォンの方に向け、ニタリと嗤う。ニーナの背筋に悪寒が走った。本当に彼女はニーナがよく知っているケティスなのだろうか。

「見つけた……！」

ケティスが四つん這いの姿勢から床を蹴り飛ばして身体を浮かせ、まるでひっかくかのように腕を振り上げた。

「ふううううううじいいいいいいん！」

迫り来るケティスに呆気にとられていたニーナは、反応が遅れてしまった。しかしドン、と力強く突き飛ばされ、後ろに転がる。ぐ……という低い呻き声にはっと顔を上げた。

「ゼフォン様！」

振り下ろされたケティスの手は、ゼフォンの顔から服をひっかいていた。ゼフォンの顔の半分近くに赤々とした爪の痕が浮かび上がる。恐らくニーナを守ることを優先したため、避けるのが間に合わなかったのだろう。

しかしゼフォンはケティスの手首を捉え、腕を掴み、勢いを利用してケティスを投げ飛ばした。ケティスは柵に激突し、がくりと力なく項垂れる。柵にしまわれていた食器が数枚床に落ちて割れた。

「ケ、ケティスさん……！」

いきなり襲ってきたのはいくら彼女の方とはいえ、ニーナにとってケティスが大事な人であることは変わりはない。思わず駆け寄ろうとしたところをゼフォンに止められる。

「近づくな！ また襲いかかってくるかもしれん！」

「で、でも……！」

そんなニーナを後目に、ケティスは徐に立ち上がった。ふらりと身体が揺れると、チッ、と舌を打つ。

「なんとも脆弱な身体よ……こんな脆弱すぎる器では、我が復讐は果たされぬ……！」

「……どうということだ。お前は一体何者だ！」

「何者か、だと……？ 永き時を経て我のことを忘却したというのか？ ——我は一度として貴様を忘れたことなどなかったぞ、風神！」

濁った瞳がカッと開かれ、ケティスが再びゼフォンへ襲いかかろうと、フラフラしている身体を気にも留めずに床を思い切り蹴り飛ばす。

だがゼフォンは怯むことなく、迫り来るケティスを力強い瞳で見据えた。

「風の精霊よ！ その女の腕と足を拘束せよ！」

刹那、ケティスの足と腕の周りに風が渦巻きはじめ、ぐるぐるとその場で旋回した。するとケティスは前のめりになったまま立ち止まる。まるで空中に縫い付けられたかのように。

「半分は賭けだったが……何とかなったな」

ニーナの周りに集まるという精霊達。ルキが言うにはゼフォンは逆に畏れられているために談話室にいたときは精霊はいなかったようだが、台所に一人で来たために精霊が再びニーナの周りに集まっていたようだ。そのおかげで、ケティスを傷つけずに動きを封じることが出来た。

ケティスはどうかして身体を動かそうともがくが、風に縫いとめられた手足はびくともしない。どうあがいてもこの枷が外れないのだと悟ったのか、ケティスは形相を歪めながらゼフォンを睨みつける。

「おのれ……まだこれだけの精霊を操る力が残っていたのか……！」

「……！ 貴様、俺が力を失ったことを知っているのか!？」

ゼフォンはケティスに近寄り、胸倉を掴みあげる。

「俺から首飾りを奪ったのは貴様か！ 言え！ 首飾りはどこにある!？」

ケティスは焦ることなく、むしろ冷ややかにゼフォンを見据えた。いつものんびりとした面影は微塵もない。

「フハハハハハ！ いいザマだな風神！ 心配せずとも、貴様の力は我が貰い受けよう。さすれば、貴様は用無しだ。力の無い神など、誰も必要としまい」

「貴様……！」

ゼフォンが眦をつりあげ、眉間に怒りを募らせる。こんなことを言われて怒らない人はいない。本当にケティスはどうしてしまったのだろう。

「もうやめて下さい！」

気づいたときには、ニーナは叫んでいた。穏やかなケティスの口から酷い言葉が出るのに耐えることができなくて。

「そんな酷いことを言わないで下さい！ お願いですから、元のケティスさんに戻って下さい！」

ケティスと出合ってからまだ一年は経っていないが、人となりを知るには十分な時間は過ごしている。そんな中で、ケティスが誰かのことを非難したり悪く言ったりしているところを、ニーナは見たことが無い。

元々ニーナは、誰かを悪くいったり言われたりすることが苦手だ。言われることを考えたらとても悲しいから。それが更にいつも優しいケティスの口から出ているのだから、尚更。

「ほう……その娘、精霊を惹きつけるのか」

ジロリとそう言ってニーナを見る目は、初めての人間を見るかのようなようだった。

「成る程……力を使えたのはそのためか。しかし興味深いな、精霊に好かれる人間とは」

舐めるかのような視線に、ゾクリと背中が震えた。するとニーナの視界がケティスからゼフォンに変わる。まるでニーナを庇うかのように、ゼフォンがニーナの前に立っていた。

「お前が憎いのは俺だろう？ 彼女に手を出すな」

「ハハハハハ、安心するがいい。そんな面白い人間を簡単に殺したりはせぬ。――最早この脆い器に用もないしな」

ケティスがそう言った途端、彼女から黒い霧のようなものが抜けていく。黒い霧は壁をすり抜け、どこかへと消えていった。

「……彼女が変わったのは、あの霧のせい、か……？」

「ケ、ケティスさんは!？」

あの黒い霧がケティスをおかしくしてしまったのであれば、元に戻ったはずだ。

ゼフォンは精霊達に拘束を解くよう命じ、意識を失ったケティスを支え、ゆっくりと床に寝かせた。

「呼吸はしっかりしている。気を失っているだけだ。――俺のせいをついた怪我はあるかもしれないが」

「いいえ……命に別状がなければ、それだけで嬉しいです……」

ケティスの顔色は悪くはなかった。しかし、突然ケティスの顔に苦痛の色がうつる。

「う……」

「ケティスさん!? 大丈夫ですか！」

床に膝をつきながらケティスの顔を覗き込むと、ケティスはゆっくり目を開けた。

「ニーナちゃん……？ あれ、私お茶の準備をしていたと思ったのに……どうして寝ていたのかしら……？」

棚にぶつけた背中が痛むのか、ケティスは顔を歪める。

ニーナは迷った。ケティスになんと説明すればいいだろう。黒い霧がケティスの中に入って突然ニーナを襲ったと、そのまま言ってもいいのだろうか。

「強盗がきたのだ。貴女を背後から襲って気絶させ、台所を荒らしていた。ニーナは何とか抜け出し俺に助けを求め、何とか何も盗られず追い出すことができた。安心してほしい」

思わずゼフォンを凝視してしまう。それは明らかな嘘だった。ゼフォンが軽く目を伏せた。このことは黙っていた方がいい、と。ニーナは逡巡の後、コクリと頷いた。優しい性格のケティスが、自身の手でニーナを襲ったということを聞いたら悲しむかもしれない。時には真実を知らない方がいいということ、ニーナは知っている。

ケティスは軽く頷くと、再び意識を手放した。このままにしておくわけにはいかず、ゼフォンにケティスを抱えてもらい、寝室へと移動させる。決して軽くはないケティスの身体だが、ゼフォンは全く苦にすることなく寝室へ運んだ。そこでやっとニーナはほっと安心することができる。

「ニーナ」

ゼフォンに名前を呼ばれ、見上げながら顔を向けた。ニーナを見下ろす赤茶色の瞳と目が合う。神妙さが帯びた真剣な眼差しに、心臓がどき、と音を立てた。

「ケティスを操っていたあの黒い霧は、俺を狙っていた。あの口ぶりからして、俺の首飾りを奪ったのはあいつしかいない」

ケティスを操ったのと同じように誰かに乗り移り、ゼフォンに気づかれぬままに首飾りを盗んだ。にわかには信じがたいが、ケティスの豹変ぶりを目の当たりにした以上、ありえないことではない。

「俺だけが狙われているならまだいい。だが、あいつはお前を見て興味を示していた。再びあいつが現れたとき、お前も狙われる可能性がある」

「え……？」

「狙われているのが俺だけであれば、今すぐここを離れようとも思ったが、お前も狙われる可能性があるとなるとそれもいかない」

ニーナは身を守る術を持たない普通の娘だ。いくら精霊を惹きつけるといっても、ニーナ自身が精霊を操れるわけではない。もしも一人になった状態で再び黒い霧がこの家にやってきた場合、抗うこともできないだろう。いつも守ってくれるアズマは今、ここにいないのだから。

「ここは一旦ルキ達と合流したいと思う。首飾りの情報も手に入ったことだしな」

「で、でも、アズマは危ないから大人しくしていると……」

「あいつらが出てからそれなりに時間は経った。もうとっくに墮霊（・・・）を鎮めている頃だろう。ルキもついて行ったのだから間違いない」

確かにそろそろ魔獣を倒しているところかもしれない。アズマ達だけでなく、他の自警団も駆けつけているだろうから。ニーナはコクリと頷いた。

「決まりだな」

二、とゼフォンが口の端をつりあげた。

ニーナはケティスが目覚めてもいいようにアズマを探してくると書置きを残し、ゼフォンと共に外へ出た。人通りはまばらなうえに、表情はどこか翳りを帯びている。ひそひそと囁きあう姿も目に映った。今日が祭りの日とは思えない程、人々は明らかに気落ちしている。

「すみません！ アズマがどこに行ったかご存知ですか!？」

近くの顔なじみの店の店主にアズマの行方を尋ねると、あっちに行ったよ、と道を示してくれる。珍しい青い髪に自警団唯一の女性として、セフィラスでのアズマの知名度は高い。アズマを見たか尋ねていけば、いずれアズマのいる所へ辿り着けるはずだ。

先行して走るゼフォンの後ろを何とか追いかけてながら、ニーナはふと、ゼフォンの口から出た『墮霊』という言葉が気になった。話の流れ的に魔獣のことだと思うが、何故ゼフォンは墮霊と呼ぶのだろう。

気にはなったが走りながら尋ねるという器用なことはニーナにはできず、ゼフォンに置いていかれないようにするので精一杯だった。

先に走る自警団の足が遅いことに少しばかり苛立ちながら、ちらりとルキを見遣った。そこにあるのはやはり相変わらずの無表情で、これから魔獣と対峙する気負いは全く感じられない。

アズマは内心溜め息をついた。ゼフオンはわかりやすい奴だったが、ルキは何を考えているのかが全く読めないでいた。ゼフオン曰く従者らしいが、ルキはゼフオンに尊敬語を一切使ってはならず、また面倒も見ているとも思えない。だからといって無下にしているわけでもない。唯一わかったことといえば、恐ろしくマイペースだということだろうか。

アズマは頭を振った。何故こんな、何を考えているかわからない男のことで自分が悩まなければならないのかと。しかし答えは出ている。彼に借りがあるからだ。

基本ニーナ以外の人間はどうでもいいと思っているアズマだが、借りを作ったままにすることは好まない。しかし、この魔獣退治で彼に借りを返す好機があるとは思えなかった。アズマを助けたときと同じような落雷を落とせば、あっという間に決着がついてしまいそうだから。

魔獣退治で借りを返せそうにないなら、他のことで返すしかない。しかしこの能面男が何を望んでいるのか、さっぱり検討もつかなかった。

(こうなりゃ直接聞いた方が早いかも)

魔獣を倒した後にでも、借りを返したいと言ってみよう。怪訝な顔をされるかもしれないが、そうしないとこちらの気が晴れないのだから。

—グルルルルルルルルル!

魔獣の唸り声が響く。近い。

ドゴオオオオ!

「!」

建物が壮大に砕かれ、瓦礫が前方の道に降り注ぐ。アズマは前を走っていた男の首根っこを掴み、後ろに思い切り引いた。

「あんたは下がってる!」

—グルルル.....

砂埃が舞う中、一つの黒影(こくえい)が姿を現した。ごわごわとした黒毛に覆われた見慣れた体躯。先程の魔獣より二周りほど小さいが、だからといって弱いというわけではない。アズマは短剣を抜き放つ。

「引き付けるから、その隙に霊術で倒してくれる?」

「わかった」

アズマは腕を振って仕込んでいるナイフを投げた。同時に魔獣に向かって地を蹴る。ルキがいるからとて戦法は変わらない。いつもと同じように動きを封じればいいのだ。

「気をつけるアズマ! そいつは素早いぞ!」

瓦礫の奥から団員の声が聞こえた。魔獣を追って追いかけてきたのだろう。正直に言えば、その場で大人しくしてほしかった。彼らでは足手纏いにしかない。

魔獣は飛んできたナイフを軽く避けた。アズマは視界の死角から一気に距離を詰め、足を狙って剣を振るう。

「!」

しかし、剣は宙を斬っただけだった。寸でのところで身を引いた魔獣が、アズマに向かって突進してきた。横に跳ねて躲そうとするが、予想以上にスピードが速く、脇腹を掠めてしまった。鋭い痛みが走り、手を当てながら顔を顰めた。しかしここで立ち止まるわけにはいかず、バックステップでひたすら距離をとった。ズキズキと痛むが、腕や足ではないだけましかもしれない。

「確かに早いなこいつ.....!」

距離をとってもすぐに詰められる。躲すだけで精一杯で、攻撃に転じることができない。躲し際にナイフを投げるが、全て避けられてしまった。アズマはチッと舌打ちする。

「突き刺せ、美しき氷刃」

ルキの詠唱と共に空中に先が尖った氷の塊、氷柱が現れた。氷柱は魔獣めがけて落ちていくが、魔獣は体躯を小刻みに動かし、氷柱の雨を躲していく。それでも全ては避けきれず、何本かは背中に突き刺さるが、剛毛で覆われた背中では大したダメージは与えられない。

「.....幾らなんでも、速すぎだろ!」

期待していたわけではないが、霊術ですら避けられたとなると、とにかく手数でせめて弱いダメージを蓄積させていくしかない。だが、それだとどれだけの被害がでるだろう。アズマはちらりと周りを見遣った。砂塵が晴れ、遠くまで見渡せるようになった景色は、瓦礫の山々が連なっていた。全てこの魔獣が破壊したのだろう。建物の中に生き埋めになってしまった人もいるらしく、団員の何人かが、魔獣に気づかれぬよう救出活動をしていた。

アズマとて無駄に被害を広げることは望んでいない。だが、決定打を与えることができない以上、持久戦に持ち込むしかなかった。

本当は一つ足止めできる方法がある。だが、人の目が多い所でその方法を行使するわけにはいかなかった。――人間ではありえない方法だから。

「ルキ！ ダメージを与えるんじゃなくて、動きを止める術ない!？」

攻撃するよりも前に、あの速すぎる動きを何とかしなければどうにもならないだろう。ルキは軽く頷くと、腕を前に伸ばし、詠唱を始めた。

アズマはナイフを魔獣に向けて投げ、ルキを視界に入れないようにする。スピード自体には慣れてきた。避けるだけならタイミングさえ合わせればそう難しくはない。まっすぐ身体をぶつけてきた魔獣の突進を紙一重で躲す。

ちらりとルキを見遣った。詠唱はまだ続いている。もう少し時間稼ぎが必要のようだ。

魔獣に視線を戻すと、魔獣は何故かルキでもアズマでもなく、別の方向を向いていた。――小さい石が、魔獣の足元に投げつけられている。

「このっ……化け物！ おれたちの家をよくも……！」

幼い少年だった。大きな瞳に涙を溜めて、一心不乱に小石を投げ続けている。魔獣はその少年に身体を向けた。

「――危ない！」

アズマは少年の方に駆けた。魔獣が飛び跳ね、鋭い爪が少年に向かって振りかざされた。持てる限りの速さで少年を抱きとめると背中から地面に転がり、勢いのまま数メートル滑る。間一髪だった。

「この馬鹿！ 死にたいのか!？」

アズマは少年を離すと間髪をいれずに怒鳴った。魔獣が危険だということは産まれたときから親に教え込まれるはずで、まだ二桁に満たないだろうこの少年も、それを充分承知しているはず。知らないはずがない。

「だ……だって、お、おれの家が……！」

「家を壊されたのはあんただけじゃないんだよ！ さっさと逃げろ！ 足手纏いだ！」

幾つも連なっている瓦礫の山。その中にはこの少年の家も含まれているのだろう。だからといって戦う力のない者が魔獣に立ち向かうのは、ただの自殺行為に他ならない。

もう用はないと、アズマは少年に背を向け、短剣を構えなおした。

「う、うわあああああああ！」

「!？」

突如少年から上がった悲鳴に、アズマは思わずバツと後ろを見た。少年がアズマの頭を指差しながら、顔を強張らせている。それにハッとし、アズマは頭に手を添えた。いつも巻いているリボンがない。

勢いよく振り返り魔獣を見据える。右前足の鋭い爪に、見慣れたリボンがひっかかっていた。少年を庇った際、リボンの端が魔獣の爪に掠め取られてしまったのか。

（早く取り返さないと……！）

誰かに見つかる前に頭に巻かなければ。今まで隠し通してきたことが無駄になる。

この瞬間、自らができる足止めの『方法』への躊躇いを捨てた。魔獣に向かって駆け出し、赤黒い瞳を真正面から睨みつける。アズマの瞳孔がカッと開かれた。

――ギャル……！

魔獣が足の先から尾まで流れるような痙攣を起こした。刹那、あれだけ素早く動き回っていた魔獣は、まるで地面に縫いとめられたかのように動かなくなる。

そのときにはもうアズマは魔獣の懐近くまで接近していた。リボンを絡め取った足を目掛けて剣を横に振るう。

前に倒した魔獣よりも太くはない足は、あっさりアズマに斬り落とされた。体躯から斬り離された瞬間から黒い気体が噴き出し、宙に霧散していく。アズマのリボンだけが地面に落ちた。

アズマは素早く拾いあげ、手早く頭に巻いた。これでいつもの自分だ。大丈夫、他に見た者はいないはず。

漸く心が落ちついてきたアズマは、再び魔獣と対峙した。そのとき、人の手の形をした砂が、魔獣の残った三つの四肢を握り締めていることに気づく。ルキの術が漸く発動したらしい。魔獣は拘束から逃れようと体躯を震わせるが、四肢を掴んだ砂の手はびくともしない。

アズマは追い討ちをかけるためサイドに回り、今度は後ろの右足を斬り落とした。バランスを失った魔獣はドスンと音を立てて横に倒れる。それを確認したのか、砂の手が四肢を手放し、元の砂へと戻った。

「離れる」

ルキの短い声に答え、アズマは後ろに跳ねた。止めは彼に任せればいい。

魔獣の頭上に火の玉が点々と現れ、そしてゆっくりと回転し始める。次第にスピードが速くなり渦となったそれは、横たわる魔

獣を覆っていく。

——グルォオオオオオオオオオオオオ！

魔獣の悲痛な叫びが響き渡った。炎の渦が魔獣の身体を生きたまま焼いている。勢いは次第に弱まり、炎の渦が消えると、そこには既に何もなかった。何も残らないことこそが、魔獣が命を失ったことの何よりの証。

「……何とか、なったね」

アズマは肩を撫で下ろし、剣を鞘に収めた。一時はどうなるかと思ったが、無事魔獣を倒すことができてよかったと思う。ほっと安堵した、そのときだった。

「あの女！ あの女だよ！」

一人の子供が自警団の一人の腕を引っ張り、アズマをしきりに指差している。先程アズマが助けた少年だった。

「何を言ってる、そんなことあるわけがないだろう。見間違えだ」

「見間違いなんかじゃない！ おれはこの目でしっかり見たんだ！」

「！」

戦慄が走った。動き回って火照った体から血の気が引いていく。

そうだった。彼には、見られていた。双つの瞳で、はっきりと。

あの少年を止めなければ。しかしどうやって？ 下らないことを言うなときつく言えばいいだろうか。幸い腕を引っ張られている団員は、子供の戯言と信じていない。シラをきり通せば何とかなるだろうか。

アズマは軽く息を吸って吐き出し、心を落ち着かせた。

「……何を見たって？ 命の恩人に対する態度じゃないね。あんたの親は、最低限の礼儀も教えてないの？」

いつもの調子で少年に悪態をついた。大丈夫、なんとかなる、と心を支えながら。

「だまれ化け物！ 何が命の恩人だ！ ——おまえのせいだろ。おまえがああ魔獣をこの街に呼んだんだろ！ ぜんぶ、ぜんぶ、お前のせいだあ！」

——お前が街に魔獣を呼びこんだ！

——全てお前のせいだ！

脳裏に再生されたのは少年の声ではなく、中年の男達の耳障りな低い声。ぐらりと身体が後ろに傾ぐ。

（違う！ あれ（・・）はあたしのせいじゃない……！）

倒れる寸でのところを足を引いて踏みとどまると、今度は言葉ではなく一つの風景がフラッシュバックした。瓦礫と化した街並み。そして横たわる一人の黒髪の男。彼の身体からは夥しい血が流れ出ていた。肌は青白く、伏せられた黒い瞳が再び開くことはない。

どうして彼はそうなってしまった？ ——彼がアズマを庇ったから。襲いかかる魔獣の凶刃から、アズマを。——彼には他に守るべき存在がいたにもかかわらず。彼の死は——間違いなくアズマのせいだった。

ふらりと身体が横に傾いた。今度は身体を支えることができない。しかしアズマの身体は地面に倒れることはなく、ポス、という軽い音と共にピタリと止まった。

「大丈夫か」

アズマはルキに抱き留められていた。瘦身ながら肩幅は広くしっかりしていて、スッポリとアズマを包んでいる。彼の胸に顔を埋めている状態にカット頬に朱が走り、勢いよくパツ、とルキから離れた。蒼い瞳はそんなアズマを不思議そうに見つめている。

「な、なあ兄ちゃん！ あんたも見ただろ!? この女の頭についてた化け物の耳を！」

「化け物の耳……？」

サアッとアズマは青ざめた。アズマのリボンが解けていたとき、彼は詠唱をすることに集中していた、はず。彼の方を見ている余裕はなかったため確信は持てない。だが、もしも見ていたら、倒れそうになったアズマを抱き留めたりするだろうか。いや、答えは出ている。ありえないと。

「いや、見てない」

アズマは安堵から身体から力が抜けそうになった。やはり彼は見ていない。

「だから言っただろう。坊主、お前の見間違いだってな。早く親のいるところへ帰るといい。きっとお前のことを必死になって探しているだろうから」

「ほんとに見たんだ！ほんとに、ほんとなのに！」

少年はアズマを睨みつけた。あどけない瞳が憎しみに揺れている。正直いって、彼の憎しみをアズマに向けるのはお門違いだ。ただ、行き場のない怒りを形あるものに向けたいだけ。

もしも本当にアズマが魔獣を引き寄せるといふならば、セフィラスはとっくに魔獣の巣窟になっている。

「うあああああ！」

少年は唸り声をあげると、アズマに殴りかかった。一步横に動いてそれを避けると、少年はバランスを崩して地面に倒れた。瞳に涙を溜めながらも、顔を上げてアズマを睨むことはやめない。再び立ち上がると、今度は腕を伸ばしながら跳ねた。少年の狙い

は——アズマが巻いている黒のリボン。それを解こうとしている。これを解かれるわけにはいかず、アズマは伸びてくる腕を躲し続けた。

「よけんな！ 大人しくしろ！」

「.....何であたしがあんたの言うことを大人しく聞かないといけないのさ」

「うるさい！ おまえが化け物じゃないっていうなら、しょうこを見せろ！」

証拠とはつまり、このリボンを解いてみせろということだろう。——無理だ。これを解けばここにいる者達全てにばれてしまう。——自分が異形だということを。

「ほら！ 早くほどけよ！ 自分が化け物じゃないならそれくらいできるよな！」

アズマが躊躇っていると、少年は誇らしげに胸を張る。それみろ、と言わんばかりだ。

「やっぱりおまえは化け物なんだな！ ——よくもおれたちの家を、よくも——」

「お前の家を壊したのは、アズマじゃない」

突然今まで傍観していたルキが口を挟む。

「何だよ！ こいつがああな化け物と呼んだに決まってるだろ！ 何であんたはこんなやつを味方をするんだ！」

少年は怒りで顔を真っ赤にしながらルキを見上げる。アズマもルキを見上げた。表情は毎度のごとく無表情だが、先程まで眠たげに細められていた蒼の瞳は、しっかりと少年を見据えていた。

「家を壊した『化け物』は、仲間意識を持たない。ただ思うがままに破壊するだけだ。誰かの命令を聞くこともない」

「な、何であんたがそんなこと知ってるんだよ！」

「霊術師だから」

魔獣退治を何度も経験している者ならそれがわかる。魔獣はいつも単独で現れ、仲間を引き連れてくることはない。そして好き勝手に暴れまわり、命を絶つ以外に止める術もない。そんな魔獣が他者の言うことに聞く耳を持つわけがなかった。

「坊主、その青年の言うとおりで。魔獣は誰の言うことも聞きはしない。だから、魔獣がお前の家を壊したことを、アズマのせいにするのはやめろ」

「.....っ！」

彼らも見抜いていたのだろう。少年はただ、家を壊された怒りをアズマにぶつけたかっただけだということに。

「アズマ、お疲れさん。もう帰っていいぞ。ニーナが心配してるはずだ」

「.....そうさせてもらうよ」

少年はまだ騒いでいた。アズマは、向けられる彼のやり場のない怒りを背中受ける。場違いな怒りを向けられるくらいなら、別にどうということはない。問題は、彼に異形の姿を見られてしまったということだ。あの様子だと、少年はきっと周囲の人間に自分のことを吹聴するだろう。初めは皆それを聞いても笑い飛ばすだろうが、興味本位でリボンを解いてみるという人間が現れる可能性は充分ある。そんなとき先程のように拒否すれば、アズマのことを訝しく思う者も出てくるはずだ。

(まずいことになった.....)

これでは遅かれ早かれ、セフィラスを出なければならなくなる。漸く見つけた、ニーナと二人で落ち着いて暮らせる場所だったというのに。また、アズマのせいでニーナまで追い出されることになってしまう。それではあのときと同じだ。疑惑が広がる前に、せめてニーナだけでもこの街にいられるように取り計らなければ。

「大丈夫か」

真横から声をかけられて、ルキがアズマについてきていることがわかった。思案に没頭していたせいか、全く気づかなかった。

「べ、別に.....」

思わず素っ気無い返事になってしまい、ふいと反対の方向を向いた。ルキは何も言えないでいたアズマに変わり、魔獣のことを少年に説明してくれたというのに。本当ならそれはアズマ自身が言わなければならなかったのだから。

これで助けられたのは二回目だ。借りを返すどころか増えてしまった。しかも満足に礼も言えていない。

(とりあえず帰ったら.....まずニーナ説明しないと.....)

一人の少年に見られてしまったことを伝えなければならない。そして疑惑が広まるより先にアズマだけがセフィラスを離れ、ニーナはケティスの家に残るようにと説得しなければ。そうでないと、あの頑固者は出て行くななら一緒に行くと言い出しかねない。

「一つ聞いてもいいか」

「あ.....？ 何」

黙したまま歩き続けていると、不意にルキが口を開いた。アズマは没頭していた思考を一旦止めて、ルキの方に視線を向ける。

「お前は魔獣なのか？」

「.....！」

アズマはバツとルキから離れ、距離をとる。いつでも抜刀できるように剣の柄に手を添えた。正面からルキを睨むと、無感動な蒼の瞳と目が合う。

「.....何。あんたさっき見てないって言ってたけど、やっぱり見たっていうわけ？」

「『化け物の耳』は見てない。俺が見たのは『魔獣の耳』だ」

「！」

リボンの下に隠されているもの。髪と同じ色の毛に覆われた三角型の耳。それは人ならざる者の証だった。

「だったら……どうする？ あたしを殺すって？」

ルキが詠唱を始める様子はないが、油断は禁物だ。背筋に緊張が走るが、ルキはあっけらかんと言いつつ

「魔獣を殺す必要はない」

「は……？」

「精霊を集める娘も珍しいと思ったが、魔獣が人里で暮らしているのも珍しいな」

それだけ言うと、ルキはすたすたと何事もなかったかのように歩き出す。毒気を抜かれたアズマは啞然と通り過ぎるルキを見つめただけだった。

「来ないのか？」

「え、あ」

ルキが途中で振り返り、アズマは慌ててルキの後を追う。小走りになりながら、何故彼は魔獣を殺す必要がないと言ったのかが気になった。今日現れた魔獣二匹に止めを刺したのはルキ自身だということに。

「あんた……何とも思わないの？ 退治すべき魔獣が街の中にいるっていうのに……」

「何故魔獣を退治する必要がある？」

思わず尋ねると、ルキは心底不思議そうに返した。

「魔獣は人語を解する理知的な種族だ。退治する必要はない」

「理知的って……街で大暴れしてる奴に知性なんて感じないけど」

「あれは魔獣じゃない。墮霊（だりょう）だ」

「墮霊？」

生まれて初めて聞く単語だった。聞き返すと、ルキは墮霊について説明し始める。

「墮霊とは、精霊が強い負の感情、怒り、憎しみ、悲しみといったものに触れてしまい、精霊としての形を保てなくなった姿だ。通常精霊は人の目に見えないが、墮ちた時点で実体化し、人の目に映るようになる」

彼らが神出鬼没なのはそのせいだという。まさか全てを破壊する存在が、世界を構成する精霊が墮ちてしまった姿だと誰が思うだろう。

「その姿は獣に酷似しているため、人々は恐ろしい獣という意味合いで『魔獣』と呼んでいるんだろう。魔力を持つ獣である『魔獣』とは全く別の存在だ。その証拠に、倒すと身体が霧散するだろう？ あれは一度死ぬことによって、世界に還ってるんだ。また精霊として生まれるために」

何もかもが初耳だった。特に、今までずっと魔獣だと思っていた存在が魔獣ではなかったことに、アズマは衝撃を覚えた。

「ルキ、ちょっとこっちきて」

アズマはルキの手首を掴み、建物の物陰に入る。人影がないことを確認した後、するりとリボンを解いた。一度見られたのだから、今度は躊躇う理由はない。

「見ての通り、あたしは人じゃない」

頭になった獣の耳。鮮やかな青い毛を纏い、ピンと頭上で胸を張っている。今までずっと隠してきたもの。そしてアズマには本来人が持つべき場所に耳がなく、それも隠すために横の髪を伸ばしていた。

「だからって魔獣でもない……あたしは、人と魔獣の間に生まれた混血なんだ」

このことを知っているのは、セフィラスではアズマ本人とニーナだけ。もしも他の誰かに知られたら、セフィラスから追い出されるだろう。ニーナの生まれ育った街を追い出されたのと同じように。

「狭間の者か。人と魔獣が交わった話を聞いたのは初めてだ」

「だろうね。人は街で暴れてるのが魔獣だと思ってるから。……あたしもそうだったし」

アズマはポツポツと自分の過去のことを話し出す。気づけば、今までずっと秘めてきたとは思えない程、饒舌に語っていた。

「あたしの母さんが、魔獣だった……。父さんはいなかったから知らないんだけど、母さんが父さんは人間だと言っていたから、人間なんだと思う。実際、あたしは人の血を多く引いたみたいで獣型になれないし」

今は亡き母の姿が脳裏をよぎった。すらりと長い四肢に鮮やかな青い体毛に包まれた美しき獣。ずっと森の中で暮らしていたが、たまに人里へ降りることもあり、そのときだけ母は人の姿をとっていた。人の姿のときの母は、アズマと同じく鮮やかな青い髪と翡翠の瞳の持ち主で、街を歩く人々の羨望を一身に受けていた。

人間からどう見えるかに興味はないが、母と同じ色彩を継いだことはアズマの誇りだ。外見的に受け継いだのは獣の耳だけだったから。肉体的特長としてなら、人を超えた高い身体能力と、睨みつけた相手を麻痺させる特殊な力を受け継いでいるが。

「ずっと母さんと二人で森の中でひっそりと暮らしてたけど、病気で母さんは死んじゃった。その後は……まあいろいろあってニーナと出合って、今に至るわけなんだけど」

母が亡くなった後のことは、流石に出会ったばかりの人間に話せることではなかったから適当に濁した。ルキもそれを悟ったのか、特に聞き返すこともなく淡々と聞いている。

「魔獣の血が流れてるといっても、あたしが知ってる魔獣は母さんだけ。……母さんが死んでからはずっと人のいるところで暮らしてたから、人が『魔獣』って呼ぶ『墮霊』のこと、母さんと種族が違うだけなんだと思ってた」

だから魔獣を、いや墮霊の命を絶つことにアズマは躊躇いがあつた。穏やかで優しくあつた母の面影を、当然全く感じることはなかったが、それでもアズマの中に魔獣の血が流れていることには変わりがない。アズマにとって『魔獣を殺す』行為は、人が人を殺すことと同義だつた。

でも違つた。街で暴れているのは『墮霊』であり『魔獣』ではない。しかし一つ疑問がある。霊術師である彼がそのことを知っているのなら、その主人であるゼフォンもそのことを知っているはずだ。その父親である風神も。なのに何故彼らは人々に訂正しないのか。憎むのは『墮霊』であり『魔獣』なのではないと。

素直にその質問をぶつけると、淡々とした口調でルキは答える。

「人と魔獣は姿形だけじゃなく、考え方や文化も違う。お互いがお互いを受け入れるには、とてつもなく長い時間を要するだろう。受け入れる時間よりも、絶対に認めないと争いが勃発する時間の方が明らかに早い。そういった争いは、墮霊の出現の頻発を招く。余計な争いを生み出すくらいなら近づかせなければいい、ということらしい」

確かに墮霊ではなく、魔獣が恐ろしいと感じるのであれば、人間は魔獣に近寄ろうとはしないだろう。魔獣の方もまた、そんな愚かな人間に近づこうとはしまい。人は人同士でさえ醜く争うことがあるのだ。全ての人々が魔獣を受け入れるには、ほんの数年だけでは到底不可能。頭では、理解できる。

「でも……それだったら……それだったらあたしは一体何なんだよ……！ 人間でもない、魔獣でもないあたしは……！」

お互いが歩み寄ることのない種族が混じり合った狭間の自分。両方の血を持っているからこそ、どちらにも所属することができない。

時折思ったことがある。混血ではなく、魔獣か人、完全にどちらかの存在であつたらと。もしくは人と魔獣が歩み寄ってくれていたのなら、自分がこんな思いをせずに済んだのにと。も。

どちらもどうしようもないことであり、だからこそやるせない思いが募る一方だつた。

「……俺にはお前の苦勞はわからない」

「……そりゃそうだろうね」

むしろここでわかると言うのはただの偽善だ。完全なる人に混血の苦勞がわかるはずもないのだから。

「だが、お前は一人じゃない。あの精靈に好かれた娘は、何があつてもお前の味方ではいるはずだ」

「……！」

いつも無邪気に笑っている大事な親友。その純粋な心に救われたのは一度や二度のことではない。

ニーナは出会ったときからずっとアズマの味方だつた。住み慣れた街を追い出されてしまったときも一切アズマを責めず、街の人間がアズマに理解を示さなかつたことを悲しんでいた。——たつた一人の肉親を亡くしてしまったことでさえ、アズマを責めなかつた。

「精靈は居心地がいいところに集まる。あれ程の精靈を惹き付けるのは、それだけ心が澄んでいるという証。そんな心の持ち主が、お前を裏切るとは思えない」

「……あいつは、ニーナは、自分のことより他人を優先するお人よしだからね……」

いつもそうだつた。二人で街から街を彷徨っているときも、自分の方が辛いだろうにいつもアズマの心配ばかり。そんなニーナを心配するこちらの身にもなつてほしいくらいに。

「アズマ、お前は実の母親に愛され、心を許せる友がいる。だからそう嘆くこともないと思う。同じ人間でも、誰にも受け入れてもらえない者も存在するから」

「……」

思えば独りであつた時間は、母が亡くなってからニーナに出会うまでの間でしかない。生を受けてから十六年間、母かニーナと過ごした時間が大半を占めており、本当の孤独を味わつたことはほぼないと言つていい。

それなのにこれからニーナをセフィラスに置いたまま、独りで放浪できるだろうか。本当の孤独に耐えて、生きられるだろうか。

突如頭にポンと何か乗せられた。それはルキの手だつた。つまり、頭を撫でられている、ということになる。

「!？」

今までニーナに対して頭を撫でたことならあるが、ここ最近では撫でられたことはない。年齢よりも大人びたアズマを、子供のように扱う者などこの街には存在しない。

「……いきなり、何？」

「こうしたいと思つた」

淡々と呟くルキは相変わらずの無表情。本当に何を考えているかわからない。年下の少女を慰めているつもりなのだろうか。確

かに彼よりは年下だとは思いますが、せいぜい二つ三つというところだろうに。

「子供扱いしないでくれる？ 対して歳変わらないだろ。あんた歳幾つだよ」

頭に乘せられた手を払い、腰に手を当ててルキを見上げた。

「今年で五十五になった」

「は……？」

思いもよらない返答に、アズマは思わずルキを凝視した。どう見ても十八、九というところで、二十すら超えているようには見えない。

「神の従者は神から洗礼を受け、神と同じ時を生きるようになる。俺は十五のときにゼフォンの従者になって洗礼を受けた。それから今年で丁度四十年経つ」

目の前の青年が見た目以上に長く生きていることにも驚いたが、

「……あいつは、今幾つ？」

「百六十三だ」

右の人差し指と中指でこめかみを押さえる。ゼフォンがアズマの十倍以上も長く生きている事実、頭が痛くなった。

「神の寿命はおよそ人の十倍だ。成長もそれだけ遅い」

「それだけ精神の成長も遅いつてか？」

どう考えても、ゼフォンは百年以上も生きている者の貫禄というものがない。むしろありえないくらい幼すぎる。ずっと神殿の中で暮らしていたからだろうか。

「わかった」

唐突にルキがアズマをじっと見つめた。感情の乏しい蒼い瞳が細められ、口の端が僅かにつりあがる。

(笑ってる……?)

些細な変化だったが、今までの無表情を考えると、とてつもない変化ではないだろうか。アズマは思わずルキの顔に魅入ってしまった。

「可愛いと思った」

「え……？」

「可愛いと思ったから、こうしたいと思ったんだ」

だから子供扱いしたんじゃない、と続けて再びアズマの頭に手を伸ばし、ポンポンと撫でる。

アズマは頭が真っ白になった。今までアズマを『可愛い』と評したのは産みの親である母だけだ。綺麗だとはよく言われる。主にニーナから。色彩を褒められるならまだしも、アズマ自身は己の容姿を気にしたことは一度もない。人目を引く容姿をしていることは知っていた。それが理由でセフィラスに来たばかりの頃は、何人かの異性に口説かれたこともある。だが、いくら見てくれがよかろうとも、中身が伴っていなければ意味が無い。自他共に認める可愛げのない性格の持ち主であるアズマを、可愛いと評する者はセフィラスにはいないだろう。目の前の青年を除いて。

再びルキの腕を無言で払い、素早く頭にリボンを巻いた。彼の実年齢を考えれば、アズマと同じ年頃の娘がいてもおかしくはない。だから年若い娘をそう評しただけであり、他意はないのだ。と、誰かに言い訳するかのように自分に言い聞かせた。

「……顔が赤いが、熱でもあるのか？」

「ない！ それと話はそれだけ！ 帰る！」

アズマは物陰から漸く人が戻り始めた大通りへと大股で戻った。赤みのひかない顔をできるだけ俯かせながら。

少年に耳を見られてセフィラスから出て行くかどうかを悩んでいたことなど、すっぱり頭から抜けてしまっていた。

ゼーは一、と肩を大きく動かしていると、ゼフォンが大丈夫かとニーナの顔を覗き込んだ。同じ距離を走っていたというのに、彼は息一つ乱していない。

「す、すいませ……」

アズマとルキもこの距離を走っていった上に魔獣と戦っているというのに、己の体力のなさにニーナは泣きたくなった。完全に足手纏いとなってしまっている。

「走るのが苦手なのか？」

「は、はい……」

走ることだけでなく、運動全てが苦手だった。身体が弱いわけでもないのに、昔から少し激しい運動をするだけで、この身体はすぐに音を上げてしまう。アズマのようにとはいかないまでも、少しは体力を向上させるために体力づくりをした方がいいだろうか。

「仕方がないな」

ゼフォンが呟くようにそう言うと、突然ニーナの身体がかくんと後ろに倒れた。しかし地面に倒れるより先に背中に腕が回され支えられる。気づけば膝の下も腕で支えられていて、足が地面から離れていた。この体勢には見覚えがある。確か、ケティスを運んだときと同じ格好だ。

「しっかり捕まっているのだぞ」

「え、あの……」

ゼフォンの端正な顔がニーナを見下ろしている。顔が近い。

そんなニーナの動揺にゼフォンは気づきもせず、そのまま走り出した。ニーナは慌てて落ちないようにゼフォンの服を掴む。ニーナよりも重いであろうケティスを軽々と持ち上げていたことから、華奢な印象に反して力はあるのだろう。

「お、重くないですか!？」

それでもそう聞いてしまうのは、人を腕の力だけで持ち上げながら走るのが大変だろうと思ったからで、決してニーナが体重を気にしているからというわけではない。

「いいや。むしろ軽い」

ゼフォンの走る足取りはとても軽かった。その言葉に嘘はなさそうだ。

「それよりも、ちゃんと栄養を摂っているのか？ 些か軽すぎる気がするが」

「た、食べてます！」

放浪していたときは食事もままならないことも多々あったが、セフィラスに落ち着いてからはケティスが栄養を考えた食事をずっと作ってくれている。だから最近は栄養不足ということはない、はず。

「あ、あの……！ わたし自分で走りま……」

「いいから。大人しくしている」

こんな風に抱えられるのは、通常身体に怪我や異常があって動けないときだ。確かにニーナは体力はないが、どこも悪くはないのだから、こうして抱えられるのは気が引ける。

いや、それだけでなく、何故かこの体勢に妙な気恥ずかしさを覚えた。顔の位置が近いからだろうか。

段々と街行く人々の姿は減っていった。それは魔獣が現れた場所が近いことに他ならない。ニーナもきょろきょろと首を動かし、アズマの姿を探す。青い髪の少女と長身の青年の姿を見つけ出すのに、そうそう時間はかからなかった。

「ニーナ!？」

アズマがニーナの姿を視界に納めた。駆け寄ってくる。ニーナもゼフォンに降りてもらい、アズマの方へと駆け寄った。

「アズマ！ 無事でよかった！」

「阿呆！ あたしの心配より自分の心配しろっての！ 家で大人しく待ってろって、あたし言ったよね？」

「そのことで話がある」

ゼフォンがアズマとルキを交互に見据えた。勘のいいアズマは翠の瞳を僅かに細めると、周囲を見渡した。

「……その話、人気のないところの方がいい？」

「その方がいいな。あまり人に知られたくはない」

アズマはニーナの手首を掴み、こっちだとゼフォンを手招きしながら建物の影に入っていく。どっしりと高い壁に覆われた隙間道は光を遮り、薄暗く陰鬱な印象を与えた。

「簡潔に話そう。お前達の家、俺の首飾りを奪ったであろう者がやってきた」

「!？」

ゼフォンがケティスにとり憑いていた黒い霧のことを説明する。この黒い霧がゼフォンを狙っていただけでなく、ニーナにも興

味を示した。再び襲われるのを避けるため、二人と合流しようとしたことを。

「その黒い霧が何なのかわからない以上、何がおこるかわからなくてな。俺だけならともかく、ニーナをこれ以上危険な目にあわせるわけにはいかない」

ニーナは突然ケティスに肩を捕まれたときのことを思い出す。危害を加えられそうになったことよりも、ケティスに恐ろしい形相で睨まれたことに恐怖を覚えた。あのときケティスの瞳に宿っていたのは強い憎しみの光。それはニーナに向けられたものではなかったが、人に憎まれることがこれ程怖いことだとは思わなかった。ケティスは今ベットで安らかに眠っているとわかっているのに、淀んだ瞳を思い出すと不安が募る。

「あんたのことを力を失くした風神だと知ってたってことは、間違いなく首飾りを奪ったのはそいつだね。話聞いていると、あんたのこと滅茶苦茶恨んでみたいけど、本当に心当たりないの？」

「ない。俺は滅多に神殿の外にでることはないし、あんな黒い霧を見たのもだ。それでいてどうやって恨みを買えというのだ」

「.....本当に、どうしてあの黒い霧はゼフォン様を恨んでいるのでしょうか.....？」

出会い頭に強く問い詰められはしたが、それは大事な首飾りを失くして焦っていたからだ。こうして暫く会話を続けて、彼は本当は優しい心の持ち主だとニーナは思った。

黒い霧にとり憑かれたケティスからニーナを助けてくれただけでなく、そのことでケティスが心を痛めないよう気を使ってくれた。アズマ達を探していたときも、すぐに疲れてしまったニーナを怒ることなくわざわざ抱えて走ってくれた。今もニーナに危険が及ばないように考えてくれている。彼はとても優しい人だ。

そんな優しい人を何故恨むのか。ニーナには理解できなかった。

「で？ その黒い霧とやらはどこいったのさ」

「それはわからん。だが、その霧の狙いは間違いなく俺だ。だから再び仕掛けてくるに違いない」

「襲ってくるのを待ってか.....防戦に徹するしかないってわけね」

アズマが腰に手を当てながら顔を顰める。そう、こちらは黒い霧が何なのかわからないだけでなく、こちらから探すこともできない。相手の出方を伺うしかなかった。

「アズマ、すまない.....」

力のないニーナはアズマに頼るしかない。それが申しわけなく思い、無力な自分が悔しかった。アズマの様に戦う力があればと、一体何度願っただろうか。

「あんたが謝る必要はないっての」

ポンと頭にアズマの手が乗せられる。多少手荒にぐりぐりと押された。

「今大事なものは黒い霧にどう対抗するか.....それより、その黒い霧はあんたの首飾りをどこへ持ってったんだろうね」

「言われてみれば、そうだな.....」

ゼフォンが顎に手を当てた。確かあの黒い霧は壁をすり抜けていった。誰かに乗り移っている間はともかく、気体の状態で首飾りを持てるとは思えない。

「霧自体を探す、というより、首飾りをどこへ持って行ったかを考えた方があたりやすいかも。他に何か言っていたことなかった？」

あまり思い出したくはなかったが、ニーナは黒い霧の言葉を脳裏にめぐらす。

「そういえば、ゼフォン様の力を自分が使うって言ってたような.....」

「.....成程。でも、それなら奪った時点で使えばいいと思わない？ ゼフォンが憎いなら尚更。憎い奴を無力化した上に奪った力で憎い奴を殺せるんだから、復讐には充分すぎると思うんだけど」

「.....すぐには使えない事情があるのだろうか」

ニーナはぞっとした。もしも『事情』とやらがなかったら、ゼフォンは街中で突然命を奪われたかもしれないのだ。そうしたらこうしてニーナ達と会うこともなく、ルキもゼフォンの父である風神も、彼の死を悲しむことになったかもしれない。

だがゼフォンは生きている。その『事情』というのがわかれば、黒い霧に一步近づけるかもしれない。その場で首飾りに込められた力を使えなかった黒い霧の『事情』とは、何なのだろう。

ふとニーナの頭にとあることが掠めた。

「黒い霧は人に乗り移るけれど、もとから霧なんだろうか.....？ それとも自分の身体があるのだろうか.....？」

「！ いいとこつくね。.....あたしは本体があるんじゃないかと思う。本体が動けない状態か何かで、意識だけが抜け出したとか。――まあ、それを言ったら明らかに普通の人間が相手じゃないけど」

「.....そういえば、乗り移ったケティスが俺に攻撃してきたとき、あれは人間というより獣のようだったな」

まだうすすらと残っている顔についた爪痕。花の手入れをするために常にケティスは爪を短くしていたのが幸を得て、血を流さずに済んだ。今は大分赤みは引いているが、もしも爪が長かったらと思うと背筋が冷える思いだった。ニーナを庇ったせいで攻撃をもろに受けてしまったから。

「それを考えると、これってもしかして魔獣の仕業.....？」

「……人間以上に、魔獣に恨まれる理由はないぞ。何故なら生まれてから、一度も会ったことがないのだからな」

「ゼフォン」

今まで黙っていたルキが口を開き、ゼフォンとアズマが同時にルキの方に顔を向けた。

「もしかしたらお前じゃなくて、父である風神への恨みかもしれない」

「あ……」

ゼフォンはポカンと口を開け、そしてがくりと項垂れた。

「……そうだ。絶対そうだ。あの霧が憎んでるのは親父だ……。それで間違いない」

確かにそう考えるのが自然かもしれない。今までほとんど神殿から出たことのないゼフォンを恨むというよりも。

「でも、あの黒い霧は、ゼフォン様を自分が恨んでいる風神だと信じて疑っていないように見えました……」

「それが問題だ。確かに俺は親父によく似ていると言われるが、歳の差による差異は明らかだ。見間違えることなどありえん」

風神の姿を一度も見たことが無いニーナは、ゼフォンが歳をとった顔を想像してみる。ゼフォンの顔をまじまじと見つめて、赤茶の瞳とぱっちり目が合った。

「……！」

途端、何とも言えない気恥ずかしさが胸中を覆う。思わずさっと顔を背けてしまった。

「ニーナ、どうかした？」

「な、何でもなし！ 大丈夫だし！」

アズマにぶんぶんと手をふると、ハアと内心大きな溜め息をついた。ゼフォンと目が合ったことが恥ずかしいと思った、なんて本人を前にして言えるわけがない。自分でも何故なのかよくわからないというのに。

「一つ、腑に落ちないことがある」

再びルキが口を開いた。ずっと黙っていたのは、そのことについて考えていたからだろうか。

「今日現れた墮霊だが、本来なら、祭りの日のような正の気で溢れている日に、現れること自体がおかしい。それも続けてだ。――あくまで推論でしかないが、あの黒い霧が、俺とゼフォンを引き離すために精霊を墮霊にしたんじゃないかと思った」

「……まさか」

墮霊。先程アズマ達を探している途中、ゼフォンに試しに尋ねてみたら彼は快く教えてくれた。精霊が強い悪意に触れて落ちてしまった存在だと。魔獣とは違う存在だということ。

「風神に対して強い憎しみを抱いて、且つ精霊の姿が見えるなら、精霊に自身の憎しみをぶつければいい。――実際、墮霊が再び現れて俺達がゼフォンから離れた後、黒い霧がやってきた」

「――確かに、いくら俺が力を失ったとしても、お前がいたら邪魔だな。霊術への対抗手段は同じ霊術でしかないからな」

あくまで推測でしかないが、と続けたゼフォンの顔は苦々しげに歪められていた。

ニーナは心臓近くの服をぎゅっと掴む。それがもし本当のことだったら、なんて恐ろしいのだろう。墮霊は一度現れるだけで多くのモノを破壊する。建物のような無機物だけではない。人の命もだ。

そんな恐ろしい存在を己の都合で利用するなんて、悲しみを生み出すだけではないか。墮霊にされてしまった精霊も、そのせいで生涯を終えてしまった。誰にとってもいいことなんて何一つない。

「――ほう、いい勘を持つ従者を持ったのだな、風神よ」

「!？」

低く呻くような声が頭上（・・・）から聞こえてくる。四人は上を仰ぎ見ると、建物の屋根の上に小さな影を見つけた。

それは鳥だった。鋭い嘴に灰色の羽毛に覆われた羽。そして首からどこか見覚えのある首飾りを下げていた。逆光でよくは見えないが、大きな宝石が括り付けられていることがわかる。

「――俺の首飾り！」

ゼフォンが描いてくれた首飾りの絵にそっくりだったのだと、その台詞で漸く気づく。

「もうこれは貴様のではない。我のだ」

鳥は重々しく嘴を動かす。その口調は、とり憑かれたケティスと同じものだった。

「……人間じゃなく、動物にもとり憑けるってか」

アズマが顔を顰めながら鳥を睨む。鳥は自分達を嘲笑うかのように翼を大きく広げ、宙を舞った。

「ククク。この首飾りを返してほしくば、闇の森の奥地にある深淵の祭壇へ来い。――そこが貴様の墓場となるだろうがな。ハハハハハハハハハハ！」

鳥は大きく旋回すると、視線をゼフォンからニーナへと移した。ビクリと背中が震える。舐めるような視線は全く同じだ、ケティスにとり憑いていたときと。

「貴様を倒した後、その娘も我がモノにしてやろう。精霊を集める特殊な力、貴様のモノにしておくのは惜しい」

「――ニーナをモノ扱いするな！」

ゼフォンが赤茶の瞳を鋭くつり上げ、宙を舞う鳥を睨みつける。その後ろからアズマが腕を振り上げ、袖口からナイフが飛び出

した。しかし鳥はあっさりと躲してしまう。

「フフ、我が恐ろしければ来なくても別に構わない。――こちらから出向くまでだ。この街で死ぬか祭壇で死ぬか、好きな方を選ぶがいい」

鳥は、それだけを言うと大空の彼方へと飛び去っていく。灰色の羽毛がひらひらと地面に舞い落ちた。

アズマは舌打ちをしながらゼフォンに視線を向ける。

「闇の森って、確かセフィラスの街の近くの東の方角にある森のことだよな。あんな鬱蒼としたところに祭壇なんてあるの？」

『闇の森』とは、木々が深く生い茂っているため日の光があまり差し込まず、日中でも薄暗いことからそう呼ばれていた。

「あの森は深いから、奥まで行くと帰れなくなるからと、出入りを禁止してますよね」

セフィラスにやってきたとき、暮らしていく上での注意事項の一つとして森への出入りを禁じられた。見張りが立っているわけではないので行こうと思えば行けるのだろうが、薄暗い上に『闇』と呼ばれる森の中に進んで入る者はそういない。せいぜい入り口付近を散策する程度だ。

「.....厄介なことになった」

「つまり、知ってるってわけね」

コクリと頷くゼフォンの顔は険しい。

ガヤガヤと大通りが騒がしくなってきた。墮霊に荒らされたところを片付けるために集まってきたのだろう。この道も、いずれ誰か通るかもしれない。

「.....人も多くなりましたし、一旦戻りませんか？」

ニーナの提案に三人は頷いた。

ケティスの家へ戻る最中、誰も何も言わなかった。

ニーナが狙われている。アズマは歩きながらずっとこのことばかり思案していた。

あの鳥ははっきりと言った。精霊を惹き寄せる力を利用すると。

そしてゼフォンはあの鳥が来いといった場所に心当たりがあるようだった。ひょっとしたら、そこに奴の『本体』があるのかもしれない。人間か魔獣か、それとも超越した何かか。

「親父から聞いた話だから、正確なことはわからない。何せ、俺が生まれるより前のことだからな」

ケティスの家に戻り、再び談話室で落ち着くと、ゼフォンはそう切り出した。

「大体二百五十年程前だろうか。その祭壇に、親父がある墮霊を封印したんだ」

「封印……？ それって倒せなかったってこと？」

「ああ。――それだけ強い墮霊だったらしい」

精霊が墮ちた存在の墮霊。一口にそう言っても、個々の強さは精霊時の強さに比例するらしい。

精霊にも力の強弱があり、大抵は大勢集まらないうちを力を出せないような弱い力しか持たないらしいが、中には一人きりで竜巻や洪水、火事や地震といった災害を引き起こせる強い力を持つ精霊もいるらしい。滅多にいるものではないようだが、霊術師は主にそんな力の強い精霊と契約を結ぶのだとか。

「街などに現れる墮霊のほとんどは、強い負の心に興味本位で近づいて墮ちてしまった力の弱い精霊ばかりだ」

アズマは目を剥いた。普段相手にしていた墮霊が弱い精霊だとするならば、強い精霊が墮ちてしまったらどれほどの強さの墮霊になるのだろう。

「力が強くなれば、それだけ知力や理性も高くなるため滅多なことでは墮霊になることはない。だが、もしもそんな力の強い精霊が墮霊になってしまったら……」

墮霊に容赦の文字はない。命ある限り、己の全力を周りにぶつけ続ける。

アズマは今日現れた墮霊を思い出した。一匹目は目を睨む巨躯の持ち主だった。あれほどの巨躯を持った墮霊は見たことが無い。退治したばかりの墮霊は大きさは普通だったが、とても素早かった。どちらも普段相手にしていた墮霊と一風変わっている。

「今日現れた墮霊は、普通じゃなかった」

「……やはり意図的に墮霊にされたと考えるべきか」

断定するルキの言葉にゼフォンは顔を歪める。

アズマはちらりと黙ったままのニーナを見遣った。胸の部分の服をぎゅっと掴んで俯いているニーナは、墮霊の出現が意図的だったことに心を痛めているのだろう。誰もが恐れる存在である墮霊を、ニーナは『怖いけど悲しい』存在と認識している。魔獣と勘違いしていたときから、どうして壊すことしかできないのかと、彼らに対して哀れみを感じていた。アズマが魔獣と人の間に生まれた娘だから、わかりあえるのではないかと思ったのかもしれない。

墮霊が生まれる理由を知った今、その思いは更に強くなったのだろう。一度も見たことがない精霊にすら心を砕くのが、アズマがよく知るニーナだから。

「その封印された墮霊も強い力を持った精霊だったなら、何で墮ちたのさ」

「さあな。流石にそこまではわからん。――親父がその墮霊と対峙したのは、奴がある魔獣の里を壊滅させた後だからな」

「……墮霊が現れるのは人の街だけではないのですね」

「魔獣は人に比べて利己的な意識は低いけど、同じように感情はある。感情というものがある限り、墮霊が出現しなくなるということはない」

感情というものは決していいものばかりではない。欲望、嫉妬、羨望といった負の力をも生み出してしまふ。しかし、それら悪いものも含めて『感情』なのだ。悲しみを知っているから喜びを、優しさを知ることができるというように、感情そのものが悪いというわけではない。

「里を壊滅させた墮霊は魔獣を喰らい、更に力を得てしまった。人語を解し、知力を得た墮霊が狙ったのは……精霊だった」

力を得た墮霊は更に己の力を増幅させることを望んだらしい。手あたりしだい、次々と精霊を喰らったという。

「だから親父は奴をこう呼んだ。『精霊喰らい（ディヴァイーター）』と」

精霊喰らい（ディヴァイーター）。アズマは脳裏でその名前を繰り返す。魔獣を喰らってもまだ飽き足らず、世界を構成する精霊も喰らうなど、正気の沙汰ではない。そこはあくまで墮霊、破壊の限りを尽くすからだろうか。

「事態を重く見た先代風神、俺の祖父が、当時俺と同年くらいだった親父を退治に向かわせた。親父と精霊喰らい（ディヴァイーター）は地形が変わる程激しい戦いを繰り広げた末、何とか封印することができたらしい。その後荒れた地を元に戻すためと、無闇に人を近づけないようにするため、地神に頼んでその地一帯を鬱蒼とした森にもらったのだとか」

だからあの森を立ち入り禁止にしていたのか。いくら封印がしてあるといっても、無闇に近寄れば刺激を与えてしまうことになりかねない。

「でもさ、何であんたの親父に行かせたんだよ。自分が行けば退治できたんじゃないの？」
「祖父はそのとき既に、相当な齢を重ねていたのだ。何せ、俺がまだ乳飲み子のときに老衰で亡くなってしまわれたのだからな。妻を娶ったのが大分遅く、その分親父が生まれたのも遅かったらしい。丁度世代交代を考えていたらしく、都合がよかったのだろうな。親父はいい迷惑だったと零していたが」

アズマは神も老衰で死ぬ、ということに驚いた。人間からみたら無限の時を生きるようでも、彼らもまた自然の摂理に逆らうことなく老いていく。その期間が人よりも長いだけで、根本的なところは同じというわけか。

「.....だからあんたと風神を見間違えたってわけか。精霊喰らい（ディヴァイーター）が知ってる風神は、あんたと同い年くらいの風神で、且つあんたは父親似みたいだし」

精霊喰らい（ディヴァイーター）は恐らく今の風神の姿を知らないはず。歳をとった憎い張本人よりも、自分がよく知る容姿を持つ者に憎しみの矛先を向けたとしても、なんらおかしくはない。ゼフォンにとっては傍迷惑な話だろうが。

「でも.....その、精霊喰らい（ディヴァイーター）は封印されているはず、ですよね？ それなのにゼフォン様の前に現れたということは、その封印が解けてしまったということでしょうか.....？」

「.....恐らく、まだ解けてはいないが解けるのも時間の問題、ということだろうな。もしも既に完全に封印が解けていたとするならば、わざわざ無力な人にとり憑く必要はないだろう。――俺を封印のところへ招こうとしてるのも、ついた頃に丁度解ける頃合なのかもしれない」

確かにそう考えるのが妥当だろう。既に解けているのなら、己の身体でここまで来ているはずだ。しかし奴は鳥の身体を使って去っていった。もしも時間の問題だとするならば、こうしてのんびりしている場合ではない。

「.....だったら、今すぐ行った方がいいんじゃないの？ 今度こそ父親に居場所を知られるのを恐々としてる場合じゃないよ。あんたの親父に頼み込んで、また封印してもらわないと」

奴はゼフォンだけでなく、ニーナも狙っている。早く再び封印しなおすなり何なりしなければ、ニーナに身の危険が及んでしまう。

「.....そうだな。俺だけならまだしも、ニーナを危険な目にあわせてしまうのは忍びない」

「す、すいません」

ニーナが深々と頭を下げる。謝る必要などないというのに。

「だが親父に頼んだとしても、再び封印されるまではここにいるのは危険だ。暫く神殿にいた方がいいだろう。少なくとも、俺達が傍にいてやれる」

確かに、アズマ一人で墮霊を意図的に生み出すような存在からニーナを守りきれぬ自信はない。霊術が使えるルキと、ニーナが近くにいれば精霊を使えるゼフォンがいるだけでも、一人よりはよっぽどましか。

「あ、でもそれだとお店の方はどうしよう.....ケティスさんを一人残しておくわけには.....」

ケティスは精霊喰らい（ディヴァイーター）にとり憑かれた影響か、眠ったまま目を覚ましていない。彼女が目を覚ましたときに、誰もいない状況にしておくのは確かにいいとはいえなかった。

「あたしが残るよ。目を覚ましたら、心配しないような適当な理由つけとくから」

アズマが残ってくれるなら安心だ、とニーナは胸を撫で下ろした。

これで話は纏まった。世間知らず三人での移動に不安を覚えなくてもいいわけではないが、寄り道せず、真っ直ぐ神殿に向かうだけなら何とかなるだろう。

「アズマ、ケティスさんを頼んだ」

「はいよ。そっちも寄り道しない、知らない人間に声をかけられてもついていかない、二人の言うことをよく聞くように」

「.....子供扱いしないでくれ」

明らかに拗ねた様子を見せるニーナの頭を軽く撫でる。本人はもう大人の仲間入りをしたと主張するが、アズマから言わせればまだまだ精神的に子供だ。少なくとも、ム、と頬を膨らませる様は大人には見えない。

アズマはニーナを見送ると、ケティスの寝室へと足を運ぶ。ケティスはやはり眠ったままだ。しかし寝息は規則正しく、表情も穏やかで特に問題はないように見える。額に手を当ててみるが熱もなかった。

「心配しないような言い訳.....どうするか」

そうなるのが気かりは目を覚ました後の話になる。強大な力を持った墮霊にニーナが狙われているから神殿に暫く滞在するとそのまま伝えたら、ニーナを娘の様に可愛がっているケティスは卒倒するに違いない。

彼女に心配をさせず、且つ神殿に長居をしてもおかしくない理由を考えなければ。

そこで一つピンとくるものがあつた。これならいける。むしろ喜ぶだろう。

口裏合わせは、ことが全て片付いたらすればいい。

頭がスッキリしたと思ったら小腹が空いてきたアズマは、ケティスの部屋を後にし台所へ向かった。そこでポットと皿が割れたまま放置されている惨状を目の当たりにする。これは恐らく精霊喰らい（ディヴァイーター）がケティスにとり憑いて暴れたときの跡だろう。そして今、他に片付ける者はいない。

アズマはがくりと肩を落とした。

普段神殿というものは、礼拝堂に参拝する以外に入ることにはない。神官でもない限りは。

神官でもなく普通の一般人であるニーナが礼拝堂以外の神殿内部にいるのは、ひょっとしなくてもすごいことだ。思わずきょろきょろと周囲を見回してしまう。灰色と青磁色の落ち着いた色合いの造りの壁は、どこかひんやりとした雰囲気を感じている。

神殿につくなり、ニーナ達は神官達のぎょっと驚く声に出迎えられた。

「ゼ、ゼフォン様今までどちらに!?そちらのお嬢さんは.....?」

「少し訳ありでな。そのことで親父に話があるんだがどこにいる」

「い、いつものお部屋にいらっしゃいます」

神官達はバタバタと慌て始めた。ゼフォン様が女性を連れてきた！ 一大事だ！ という声があちこちから聞こえる。彼らにとって一般市民が礼拝堂以外の神殿内に入ることは、相当珍しいのだろう。

そしてゼフォンとルキにとある部屋へ案内された。ここで待っていると。そこには向かい合うように置かれた二つの長めのソファと、一つのテーブルが置いてあるだけの殺風景な部屋だったが、ソファはとても高級なものらしく、ふかふかとしていて柔らかい。

「俺達は先に親父のところへ行って来る。ここでゆっくりしててくれ」

「あ、はい」

ゼフォンはそういうとルキを連れ立って行ってしまふ。ニーナは再びソファに手を触れた。やはりふかふかしていて気持ちがいい。しかし、自分なんかこんな高そうなソファに座ってもよいのだろうか。どうにも気後れしてしまう。

かといって他に座るものはない。ゆっくりしていると云われたが、ここは立って待っていた方がいいかもしれない。

暇をつぶせるようなものもないため、ニーナはそれほど広くない部屋の中をぐるぐると歩き回った。時間はどのくらいかかるだろう。ゼフォンが家出をしたことを、怒られていないといいのだが。

暫く歩き回っていると、コンコンと扉が軽快な音を立てた。ゼフォン達だろうか。随分早い。はい、と行って入室を促すと扉が開かれた。

「こんにちは」

「こ、こんにちは！」

ニーナは声を上擦らせる。入ってきたのはゼフォンではなかった。赤みの強い茶色の長い髪を高い位置でまとめて飾りを刺した、三十半ばほどの美しい女性。お盆に乗せられた焼き菓子とお茶を持ち、優雅に微笑んでいる。

「まあ、なんて可愛らしい.....。皆が言っていたことは本当だったのね」

「え.....えっと.....」

にこにこ微笑む彼女は、まるで無邪気な少女のようだった。持っているお盆をテーブルに置くと、ゆったりとソファに腰掛ける。ニーナはポカンと見つめていたが、

「あら、貴女は座らないの？」

「そ、その.....」

「このソファ、柔らかくてとても気持ちがいいのよ。是非座ってみて」

にっこり微笑みながら座ることを促されては、気後れするのでもいいですとも言えない。ニーナは意を決しておずおずとソファに腰をかけた。ふわりとした感覚が身体に触れる。確かにこれは気持ちがいい。

「フフフ。どうぞこちらにも召し上がって」

「あ、ありがとうございます」

ニーナはペコリと頭を下げる。そしてそっとお盆に乗せられている焼き菓子に手を伸ばした。サクリとした触感の中に甘酸っぱい果実の味がする。どうやら乾燥した果物の粒が入っているようだった。初めて食べる菓子に、思わず自然と笑みが零れる。

「どうやら気に入ってくれたようね。私も好きなのよ。――それにしても、女の子をこんなところに一人にするなんて、気の利かない子だこと」

「え、えっと.....わ、わたしはニーナと申します！ 失礼ですが貴女は.....?」

女性の勢いに押されて菓子を摘んでしまったが、本来なら先に自己紹介をするのが礼儀だと気づき、慌てて名乗る。彼女の着ている物は白地で無地のものを何枚も重ね着した、上品な雰囲気のもの。どうみても神官ではない。身分の高い貴族の婦人の可能性が高かった。

「あら、ごめんなさい。はしゃぎすぎて自己紹介が遅れてしまったわね。何せあの子が家出してしまったと思ったら、可愛い女の子を連れて帰ってきたと聞いたものだから」

「は、はあ.....」

ケティスのように、慣れ親しんだ相手からの可愛いという言葉になれば、ありがとうございますと返すことができただろうが、初めて会う

相手に対しては戸惑いしかなく、返事を濁すことしかできない。だが、そんなニーナに対しても、彼女は気を悪くすることはなかった。

「ニーナさん、そんなに緊張しなくていいのよ。私はジェンティ。よろしくね」

「よ、よろしくをお願いします」

ジェンティと名乗った女性は微笑みながらカップに手を伸ばし、紅茶を飲む。

「ねえ、ニーナさん。貴女のことを聞かせてくれないかしら？ 私、ここ長いこと神殿の外に出たことがなくて、外の話を知りたいの」

穏やかな笑みを浮かべながら、ジェンティの瞳は子供のようにキラキラと輝いている。それだけ外のことに興味があるのだろう。

「わ、わたしの話でよろしければ……」

「本当!? 嬉しいわ」

何から話せばいいだろうかと考え、自然と頭に浮かぶのは親友のアズマのことだった。アズマの話なら幾らでもできる。

暫くアズマのこと、ケティスのこと、仕事のこと、とりとめのないことを話し続け、ジェンティは全ての話を興味深そうに聞いていた。

「そういえば、あの子とはどうして出合ったの？」

「えっと……ゼフォン様のこと、ですよ？」

「そうそう。で、どんな風に出合ったの？」

ニーナは思わず口ごもった。正直に言って、ゼフォンとの出会いは人に軽々しく言っていないものではないだろう。ニーナ自身は気にしていないが、ゼフォンを悪く言うようで乗り気にはなれない。

しかし、期待に満ちた瞳で見つめられると答えられないわけにはいかなかった。

「じ、実は……」

なるべくゼフォンは悪くないよう注意しながら説明すると、彼女は大きく目を開き、肩を落としながら額に手をあてる。

「ごめんなさいね、ニーナさん。あの子ったら、こんな可愛い子を疑うなんて……」

「い、いえ！ 誤解は晴れましたし、気にしていませんから……」

それに、とニーナは続ける。

「ゼフォン様はとても優しい方です」

出合ってからまだほんの数時間しか経ってはいないが、いろいろ助けてもらったし、親切にしてもらった。それを思うと心が温かくなる。今も、精霊喰らい（ディヴァイーター）からニーナを守ろうと心を砕いてくれている。

突然ジェンティがニーナの手をとり、両手で包み込んだ。

「プライドばかり高いあの子のことを、心から優しいと言ったのは貴女が初めてよ」

キラキラと輝いていた瞳に、更に恍惚の光が宿った。言葉にし難い迫力が込められており、ニーナは思わず気圧される。

「やっぱり貴女しかいないわ、貴女しか……」

「え、えっと……」

それは一体何の話だろう。戸惑っていると、照れなくていいのよ、と余計にわからないことを言われた。どう返事をすればいいか焦っていると、それを助けるかのように扉が開かれる。

「……親父の所にいないと思ったら」

今度こそゼフォンだった。ジェンティの姿を見たたん、がくりと肩を落とす。その後ろでルキがジェンティに軽く一礼した。

「何故貴女がここにいるんですか、母上」

ニーナはぎょっと目の前の婦人を凝視した。そういえばゼフォンを「あの子」と呼んでいたが、母親ならばそれも頷ける。

ジェンティはニーナから手を放し、朗らかに笑った。

「だって貴方が女の子を連れて来たと聞いて、とても嬉しかったのだから。私、ずっとこんな可愛い娘が欲しかったのよ」

「……申しわけありませんが、彼女を連れて来たのはある理由があつてのことです……」

ゼフォンは額を手で覆いながら、何故ニーナを連れてきたのか簡単に説明した。ジェンティは精霊喰らい（ディヴァイーター）の名前が出たときは顔を強張らせたが、それ以外は淡々と息子の説明を聞き、そう……、とどこか悲しげに顔を曇らせた。

「この子をお嫁さんにするために連れてきたのではないのね……残念だわ」

「!？」

ジェンティの口から飛び出た言葉に、ニーナは思わず咽た。この子、とは間違いようがなくニーナのことだろう。ニーナがゼフォンの嫁に？ ありえない。

「わ、わたしはただの一般市民です……！ そ、そんな、ゼフォン様の伴侶に相応しい人間では、あ、ありません」

ゼフォンは風神の息子であり、時期が来れば父から風神の務めを引き継ぐ尊い存在だ。そんな彼と、ただの花屋の居候である自分が相応しいわけがない。

「あら、そんなことないわ。私だってフォルティオ様……風神様に嫁ぐ前は、どこにでもいるような普通の街娘だったもの」
思わぬ事実ニーナは、え、と面食らう。ジェンティは楚々としていて美しく、てっきり貴族などの高貴な身分の出だとばかり思っていた。

「懐かしいわねえ、あれからもう二百年が経っているなんて。時の流れは遅いようでとても早いわ」

「に、二百年!?!」

彼女はもう高く見積もってもまだ四十には届きそうもない年齢だ。それなのにその五倍も生きているなんて信じられない。

「本当に申しわけありませんが、父上がニーナを呼んでいるのでこれにて失礼します。――ニーナ、着いてきてくれ」

「あ、はい」

ニーナは急いで立ち上がり、ジェンティに深々と頭を下げた。

「あ、ありがとうございます。いろいろお話できて楽しかったです」

「私の方も楽しかったわ。またね、ニーナさん」

軽く手を振りながらジェンティはニーナ達を見送ってくれた。再びシンとした廊下に出て、先を行くゼフォンの後を追う。

「あの……ジェンティ様が先程二百年経っていると仰ってましたが、あの方お幾つなんでしょうか？」

「母上か？ 母上は確か二百十七だったか。十七のときに親父と出合って伴侶となったと言っていたから間違いないだろう」

ぐらりと眩暈がした。二百年なんて十五年しか生きていないニーナにとって、途方もなく長く感じた。どうして彼女はそんなに長生きなのだろう。元々はニーナと同じ街で暮らす娘だと言っていたが。

「ああそれは、神に近い人間は、神から洗礼を受けて神と同じ時間を生きることになるからだ。だから母上は二百年以上生きていても、まだあの通りピンピンしていらっしゃる」

そういえば、精霊喰らい（ディヴァイーター）を封印したのは二百五十年位前だと聞いた。つまり、ゼフォンの父である風神はそれだけ長く生きていることになる。その息子であるゼフォンも長生きなのだろうか。

「……その、ゼフォン様の歳をお聞きしてもよろしいですか？」

「ん？ ああ。俺は百六十三、ルキは五十五だったか」

ルキを見上げると、彼はコクリと頷いた。ルキですらニーナの倍の月日を生きていたことに衝撃を受ける。見た目的にはあまり変わらないというのに、不思議な気分だ。ニーナは思わずこめかみのところに手を添える。

「アズマも驚いてた。今のニーナと同じところに指を当ててたな」

そう言いながら、ルキもニーナと同じようにこめかみに手を添えた。

アズマも同じ反応をしたのかと思うよりも、ニーナはルキの顔を思わずまじまじと見つめてしまう。ルキの口角がほんの僅かだが、明らかに笑みの形を作っていたから。もしかしなくても、彼は今笑っている。ルキと出ってから数時間、笑うどころか、表情が変化したことすら初めて見た。

「珍しいな、お前が笑うなんて」

長い付き合いだろうゼフォンも、目を丸くしながらルキを見ている。彼ですら珍しいというのなら、本当に珍しいのだろう。もしかしたら貴重なものを見たのかもしれない。

「……そんなに珍しいか？」

「自覚がないのかお前は」

そんな他愛ないことを繰り返しているうちに、いつの間にか目的の場所へと辿り着いていた。厳かな両開きの扉がドン、と立ちはだかっている。

「親父、入るぞ」

言うなりゼフォンは返事を待たずして扉を開ける。明け広げられた部屋の中は幾つもの松明が灯され、明るく照らされていた。

奥の方に祈りを捧げるかのような祭壇があり、その前に一人の男性が立っている。

見た目の年齢的には四十を幾つか超えたくらいか。ゆったりと纏っている白を基調とした長衣に、背中まである緑がかかった長い白髪に真紅の瞳。その顔立ちはまさしくゼフォンの面差しがあり、彼こそが父である風神なのだと思った。

「そなたか、精霊に好かれている娘というのは」

「は、はい！」

声をかけられ、ニーナはビシッ！ と背筋を伸ばした。

世界の理を守る絶対的存在が今、目の前にいる。絶対に失礼があってはならない。緊張が全身に走った。

「確かにそのようだ。いつもはこの部屋に近寄らない精霊が、その娘が来たたとんにやってきた。半信半疑だったが信じるほかないようだな」

「だから言っただろうが」

ゼフォンが腕を組んで風神を見上げた。風神はルキより背が高く、ゆったりとした服ごしに見てもがっしりとした体格の持ち主だとわかり、とても大きかった。小柄なニーナはかなり首を上にあげないと顔をよく見るができない。首が痛くなりそうだ

った。

「精霊喰らい（ディヴァイター）がその娘を狙うのも、精霊を効率よく集めるためだろうな……。今回りにいるのは弱い精霊ばかりだが、外を出歩けば強い精霊も惹かれてやってくるかもしれん」

厳かな声音がニーナに降りそそぐ。強い精霊が喰われれば、それだけ精霊喰らい（ディヴァイター）は力を増してしまう。それだけは防がなければならないだろう。

「正直に言わせてもらおう。その娘の存在は危険だ」

風神がニーナを見据えた。真紅の瞳に鋭く射抜かれ、身体がピクリと震える。さあと身体が冷えた。怖い。

「その娘が精霊喰らい（ディヴァイター）に近づくだけで、多くの精霊が喰われてしまう。それだけは何としてでも避けなければならない」

「だから精霊喰らい（ディヴァイター）を何とかするまで、ここで守ればいいのだろう？」

「簡単に言うな馬鹿息子。お前は精霊喰らい（ディヴァイター）の脅威を知らないからそんなことが言える」

風神は嘆息しながらゼフォンを見遣る。

「あれはただ暴れるだけの墮霊とは訳が違う。どこを狙えば確実に死ぬか、相手を苦しめられるか、それを熟知している。ただの力の押し合いをするだけでなく、虎視眈々と隙を狙い、不意をつく」

目的のためなら手段を選ばず、卑怯な手も躊躇なく使うらしい。力が強だけでなく、狡猾な手段を用いる者を相手どることが並大抵のことではないことは、ニーナでもわかった。

「だからこそ、奴を更に強くするわけにはいかない。――そうなる危険の芽は、早くに摘み取っておくに限る」

「な……！」

風神がニーナに向けて腕を伸ばす。ニーナはポカンと風神を見上げた。危険の芽を摘み取るという言葉が脳裏を駆け巡り――それがどういうことかを悟った途端、全身に冷や汗が流れた。心臓がバクバクと大きな音を立てて鳴り止まない。

「せめてもの情けだ。苦しまずに逝かせてやろう」

「待て！ 糞親父！」

ニーナと風神の間にゼフォンが割り込んだ。深緑の長い髪が視界のほとんどを占める。

「そこをどけ、馬鹿息子」

「誰がどくものか！ ー見損なった。罪もなき少女を、危険だからの一言で始末しようなどと……！」

「その娘を憐れんでいるのか？ そんなものは一時の感傷に過ぎぬ。神は大局を見据えねばならない。守らなければならないのは一個人などではなく、この世に行きとし生ける者全てだ。その娘のせいで他の生きる者達を恐怖に陥れるわけにはいかぬだろう」

「なら、何故その大勢の中にニーナは含まれない!? 一人一人を守れない奴に、大勢の者達を守れるものか！」

「綺麗事だな。何事にも犠牲というものはつきものだ。それを最小限に抑えるためには、その娘が活着ているのは都合が悪い。ーもう一度いう、そこをどけ、ゼフォン」

「嫌だ！」

ゼフォンと風神、お互いが一步も引かず、暫く睨み合いが続いた。

「何故そこまでその娘を庇う。お前とて神としてのあり方を知らぬわけではあるまい。ときに何かを切り捨てることも必要だと理解しているはずだ」

「ああ、知っているさ！ だがニーナは、俺が誤って首飾りを盗んだ犯人だと決め付けたにも関わらず、恨み言一つ言わないどころか、困っているならと、探すのを手伝おうと言ってくれた心の優しい娘だ！ 困っていた見ず知らずの俺に、手を差し伸べてくれたのは彼女だけだった！ そんな澄んだ心の持ち主を犠牲にすることなど、俺にはできない！」

ゼフォンの背中に庇われながら、ニーナは瞳に熱いものが込み上げてくるのを感じた。

首飾りを探すと言ったのにもかかわらず、ニーナは全く役に立ってはいないと言っている。アズマのように墮霊に立ち向かえるわけでもなく、ルキのように精霊の力を使えるわけでもない。それどころか精霊喰らい（ディヴァイター）に目をつけられ、狙われている有様だ。

だというのにゼフォンはニーナを見放すどころか、彼を手伝うと言ったその心を評価してくれたうえに庇ってくれる。優しいのはニーナではない、ゼフォンだ。

「……ありがとうございます、ゼフォン様」

だから、それだけで充分だ。優しい彼に、自分のせいで父親と仲違いしてほしくはない。

ニーナはゼフォンの隣に立ち、風神を見上げた。鋭い瞳と目が合い、思わず萎縮してしまうが、今は怖がっている場合ではない。

「あの……わたしが犠牲になれば、皆が助かるのですか？」

「ニーナ!？」

「助かるかどうか……はわからぬ。ただ、お前のせいで精霊喰らい（ディヴァイター）が力を増すことがなくなることだけは確かだ」

「.....それでしたら」

ニーナはぎゅ、と胸部の服を力強く握った。こんなことを言ったら生意気だと怒りを買ってしまうかもしれない。でも、どうしても風神に伝えなければならないことがある。

「不躰を承知で申し上げます.....それで皆が助かるというわけではないのなら、承諾できません」

「ほお。確かにまだ歳若い娘なのだから、自分の命は惜しいだろうな」

ニーナを見下ろす風神の瞳は冷ややかだ。怖い。でも、ここで逃げるわけにはいかない。

ちらりとゼフォンを一瞥する。彼はじっと心配そうな眼差しでニーナを見つめている。羨みかけた心が、力を取り戻していくのを感じた。たった一人でも、自分のことを心配してくれる人がいることの、なんて心強いことか。

「はい、死ぬのは怖いです。でも、それだけではありません」

ニーナは真っ直ぐ風神の瞳を見据えた。

「わたしの命は、わたしだけのものではないからです」

風神が僅かに眉根を寄せる。それでもニーナは視線を逸らすことはしなかった。

「わたしは見ての通りの脆弱な娘です。一人で出来ることも限られてます。――そんなわたしが、今までこうやって元気に生きてこられたのは、周りの人達に助けられてきたからです」

一番初めに脳裏によぎったのは、やはり大好きな青い髪の少女だった。いつもニーナを守ってくれる優しい親友。そして次によぎったのは、もうこの世にはいないたった一人の兄の姿。

アズマと兄だけではない。セフィラスにきてから面倒を見てくれているケティス、何だかんだで気にかけてくれる自警団の人達、そしてセフィラスに住む朗らかな人々。

「わたしが今ここにいるのは、多くの人達に助けられてきたからこそです。そんな助けてくれている人達にわたしが出来ることと言ったら、常に感謝する心を忘れず、笑いながら日々を過ごすことしかありません」

だからこそ、頼まれごとや困っていることがあったら力になりたかった。それで少しでも恩を返せるならと。それをお人よし、とアズマはいうのだけれど。

「だから――わたしの命を、わたしだけの判断で差し出すわけには、いきません」

ニーナの命はニーナだけのものではないのだ。自分だけの考えで簡単に差し出していいものではない。特にアズマがそれを知ったら、勝手なことをするなと怒ると同時に悲しむだろう。だから、それだけは絶対にしてはいけない。

風神は暫く無言でニーナを見据えると、フ、と軽く息を吐く。その後には厳しかった視線が穏やかなものに変っていた。

「――成る程、精霊に好かれるわけだな」

ポツリとそう呟くと、風神はニーナに歩み寄ってくる。目の前に立つと膝を折ってニーナの低い目線に合わせてくれた。

「この世で生を受けているものに、己の力のみで生きている者などいはしない。誰も何らかの形で関わりあい、助け合い、生きているのだ。それを真に理解している者は、一体どれだけいるのだろうか.....お前は数少ないその一人らしい」

風神はニーナの頭にポンと手を置いた。ニーナは思わずへ？ と間の抜けた声をあげる。

「怖がらせてすまなかったな。私も四百年以上生きているが、精霊を惹きつける娘の存在を確認したのはお前が初めてだったのだな。確か名をニーナと言ったか」

「は、はい」

「その殊勝な心を捨ててはならんぞ。たとえどんなことがあろうとも」

それだけ言うと風神は立ち上がりゼフォンの方を向いた。

「糞親父.....ニーナを試したのか」

「言っただろう。精霊に好かれる娘を見たのは初めてだと」

だからニーナのことをしっかり把握しておく必要があったようだ。精霊を惹きつける力を持っているだけなのか、それとも心根に惹かれてやってくるのかを。そして後者だと判断してくれたらしい。

「しかし正直なところ、精霊喰らい（ディヴァイーター）が完全に復活してしまえば、ここも安全とはいえぬ。いや、安全な場所などどこにもないことになる」

知力を得ても、そこは墮霊。あらゆるものを破壊しつくす点は変わらない。普通の家も神殿も、墮霊にとっては同じ破壊対象となる。

「ニーナが集めた精霊を精霊喰らい（ディヴァイーター）に喰われないようにする方法が、一つある」

「本当ですか!?!」

「それを先に言えばいいものを.....」

ゼフォンは恨みがましい目で風神を見る。風神はそんな息子を後目にしながら教えてくれた。

「簡単なことだ。神が精霊を統率していればいい。ただ集まるだけの烏合の衆だから喰われるだけだからな」

統率されていない精霊は無闇に精霊喰らい（ディヴァイーター）に近寄ってしまうため、捕まってしまうのだとか。しっかり統

率がとれていれば問題ないらしい。

「だからゼフォン、その娘を連れて力を取り戻しに行って来い」

「は……？」

ゼフォンはあぐりと口を開けた。ニーナも耳を疑った。今風神は自分を連れて行けといわなかっただろうか。

「正気か!? ニーナをあんな奴のところに連れて行けとは……！」

「あいつの近くにしようが遠くにしようが、危険なことに変わりはない。お前がニーナの傍にいて精霊達を管理していれば、精霊が喰われる心配もない。なら、お前が乗り込んでいっても問題ないだろう。お前が喧嘩を売られたのだから、しっかり買ってやるがよい」

「あいつが恨んでるのは俺じゃなくて親父だろう！」

風神は食って掛かるゼフォンに落ち着くように促すと、大きく嘆息した。

「今の私に、精霊喰らい（ディヴァイーター）と渡り合える力はない。二百五十年という月日は、神にとっても長いものだ。三百を超えたあたりから力が落ち始めると、お前も知っているだろう。――若いときでさえ封印するのがやっとだったというのに、そのときよりも落ちた力で奴に敵うとは思えん。口惜しいことだがな」

ニーナははっと風神を見上げた。ゼフォンの父たる風神ならば精霊喰らい（ディヴァイーター）を何とかできると、自分達は楽観視していたことに漸く気づく。今の風神にその力があるのかを知りもせず。それなのにただ守ってもらおうとやってきた己の、なんて厚かましいことか。

「……俺は更に力を失っている状態なんだが」

「だから先に力を取り戻せといっている。お前はまだ若く伸びしろがある。力を取り戻せさえすれば、奴に対抗できるかもしれん」

ゼフォンは黙ったまま俯いた。彼が風神の言うことに素直に頷けないのは、きっとニーナを連れて行かなければならないからだろう。力を失っているゼフォンは、ニーナが惹き寄せる精霊の力を頼らなければならないから。それさえなければ、ゼフォンは風神の言う通り、精霊喰らい（ディヴァイーター）との決着を己自身の手でつけることに戸惑いはあっても躊躇いはしなかっただろう。

風神は黙ったまま何も言わないゼフォンに近寄ると、腕を伸ばし、右手でゼフォンの目を覆った。

「い、いきなり何をするんだ！」

「周りを見てみる。今なら精霊の姿が視えるはずだ」

ゼフォンが風神の腕を撥ね退けると、瞳を大きく見開きながら何度も首を大きく動かす。風神の言う通り、精霊の姿が再び見えるようになったのだろう。ゼフォンはニーナに視線を向けた。

「……こんなにたくさん、いたんだな」

「私の力を分け与えた。しかしそれはあくまで一時しのぎのものだ。いつまでもつかはわからん。だが、全く見えずに精霊を統率するよりは大分ましだろう」

風神にここまでしてもらったら、彼も嫌だとは言えないだろう。

「ゼフォン様、わたし、足手纏いにならないように気をつけますから……行きましょう、祭壇へ」

「ニーナ……！」

風神が精霊喰らい（ディヴァイーター）を封じることができず、どこにいても危険なのであるならば、神殿で大人しくしていても意味はない。ならば、ゼフォンの役に立てることをした方がいいに決まっている。

「危険なのは重々承知です。でも、わたし、貴方に協力すると言いました。それなのに、まだ何の役にも立っていません。わたしにできることなんてたかが知れてますけど、それでも、貴方の力になりたいです」

先に彼を助けると言ったのはニーナの方なのに、肝心のニーナはゼフォンに何もしていない。ここで少しでも役に立てるのであれば、嬉しいと思った。

「――わかった。一緒に行こう。ただし、絶対俺の傍から離れてはならない。いいな」

「はい！」

「どうやら、話は纏まったようだな」

行くと決めたなら、すぐに行った方がいいだろう。精霊喰らい（ディヴァイーター）がのんびり自分達を待っているとは思えない。

「森の中にある魔獣の里を目指せ。二百五十年前の生き残りの子孫が祭壇周辺を守っている。場所も彼らが知っているはずだ」

魔獣の里、と聞いて思わずアズマの姿が脳裏をよぎる。アズマの母は魔獣だった。しかしアズマから話を聞いただけで実際見たわけではない。アズマと出会ったのは、既にアズマの母が亡くなって暫く経った後だから。

アズマによると、鮮やかな青い毛に覆われた美しい獣だったという。アズマの容姿がとても綺麗なことを考えると、母である魔獣も綺麗だと考えるのが妥当だろう。

その里に住む魔獣がアズマの母と同じ種族かはわからないが、やはりとても美しいのだろうか。不謹慎だが、思わず胸が躍った

。「それとルキ、お前もついて行ってやれ。流石にこの二人だけでは不安が残る」

ずっと傍観していたルキが、風神の言葉にコクリと頷く。

「そんなに不安なら親父も来い。息子に全部押し付けるのではなくな」

「馬鹿者。私まで行ったら、誰が精霊を統率するんだ。周りにいる精霊しか従わせられない今のお前に、世界を預けるわけにはいかぬだろう」

神は世界中の精霊を従わせなければならない。精霊喰らい（ディヴァイーター）との戦いは激しく、とてもそんな余裕がないのだとか。風神自身が行くのではなくゼフォンに行かせようとしている理由には、どうやらそのことも含まれているらしい。

「だからさっさと行って来い。――とりあえずどんな状態でも、生きて戻ってさえすればそれでいい。私の跡を継ぐのは、お前しかいないのだからな」

「――わかっているさ」

そう言って父を見るゼフォンの瞳には、力強い光が宿っていた。

「この馬鹿！ 阿呆！ お人よし！ でもって更に考え無し！」

アズマはニーナに向かって雑言を浴びせた。こんなことを言いたくもなる。アズマの記憶が正しければ、神殿へは保護を求めるために行ったのであって、精霊喰らい（ディヴァイーター）の元へ行くために行ったのではないはずだ。

台所を片付けている最中、ケティスは目覚めた。ケティスの体調は思っていたよりもよく、一緒になって台所を片付けてくれた。この様子なら一人にしても大丈夫だろうと、思いついた言い訳を述べ、ニーナの様子を見てくると言って神殿へ向かう最中のところだった。ニーナ達三人がやってきたのは。

「実は……」

「わたし達が精霊喰らい（ディヴァイーター）を封印することになった」

言いづらそうに顔を強張らせたゼフォンを後目に、キリッとした顔でとんでもないことを告げたニーナに対しての先ほどの雑言だった。

「何でニーナが行くわけ!? いくら何でも、どれだけ危険かがわからないほど馬鹿じゃないだろ!？」

ニーナは確かに騙され易いが、自ら危険とわかっているところに飛び込むような、無鉄砲な人間ではない。

その後ゼフォンから詳しい経緯を聞かされたが、どう考えても納得できるわけがなかった。

「すまない、アズマ。でもわたし、ゼフォン様の力になりたいんだ」

しかしニーナの心は既にそう決まっているらしい。こうと決めたニーナを止められたことが一度もないアズマは、今回もまたしぶしぶ頷く他なかった。

「なら、あたしもついてく……戦力は一人でも多いほうがいいだろ？」

「ありがとう、アズマ！」

ケティスには暫く神殿にやっかいになるとあってある。もし暗くなって家に戻れなくなっても、心配されることはないだろう。

隊長からはそろそろ仕事に戻れと言われそうだが、これはセフィラスにとっても大事なことだ。充分仕事内容に該当する。

「闇の森に行くんだっけ。祭壇への道はわかんの？」

「ああ、それなんだが、どうやら森の中に魔獣の里があるらしい。まずはそこへ向かう」

「魔獣の、里……？」

心臓がどくりと音を立てた。森の中に魔獣が住んでいる。森とセフィラスとの距離はそう離れてはいない。そんな間近に住んでいたなんて。

「アズマ、大丈夫か？」

ニーナが心配そうにアズマの顔を覗き込む。アズマは自分が呆然としていたことに気づいた。すぐに何でもないと取り繕うと、ニーナはすぐに納得してくれた。

「行くなら、さっさと行こうか」

こんなところでのうのうと立ち話をしている暇などないはずだ。己の懊悩を押し込み、森がある東の門を目指した。

街の周囲を土壁で覆っているセフィラスは、東西南北に一つずつの四つの門がある。門の前には門番をしている自警団が交代で見張りをしているはずだ。もし出て行こうとしたら絶対引き止められるだろう。そんな彼らを振り切るには、権威を利用するのが一番だ。

「その四人、止まれ」

案の定、門が見えてくるとアズマ達は呼びとめられる。門番をしていた団員は、アズマの姿を見るとぎょっと目を開いた。

「な、何故お前がここにいるんだ!? 仕事はどうした！」

「今がその仕事なんだけど」

「ふ、ふざけるな！」

「ふざけてなんかないよ。そこの深緑の長い髪をしてる奴、どう見ても一般人じゃないだろ？ お忍びの護衛を任されたってワケ」

門番は頭の先から足までゼフォンを眺め、上質な服と偉そうな雰囲気はどこかの偉いとこの息子だと感じとったのか、そうかと焦り混じりに一言いうと、手を横に振って行けと示した。

「お忍びだから、他の団員には言うなよ？ あ、隊長にだけは伝えといて」

ついでに面倒くさい報告義務を押し付け、アズマ達四人は近くにある森へと足を運んだ。まだ日は充分高いところにあるにも関わらず、森になっているところは薄暗い。

森の中を進むにつれて、アズマは身体が強張っていくのを感じていた。理由はわかっている、これから魔獣に会うからだ。

アズマはニーナと出会う前、ずっと森の中で母と二人で暮らしていた。入用のときには母が人型になって街にまで買出しに行っていたが、魔獣の住んでいるところに行ったことはない。それこそ、アズマが生まれてからは一度も。

母が病気になったとき、アズマは必死で看病したが人間用の薬は魔獣である母には効かなかった。そのとき母に言ったのだ、他の魔獣が住んでいるところに行き薬を分けてもらおうと。同じ魔獣なら効く薬を持っているはずだと思って。

しかし母は首を振った。そしてそれなら探しに行くと言ったアズマに、絶対行ってはならないと強い口調で厳命した。ずっと優しくかった母の初めて聞いた強い口調に気圧されたアズマは、結局魔獣を探しに行くことを諦め、結果、母は快方に向かうことなく亡くなってしまった。

あのときは、何故そんなに魔獣に会おうとすることを良しとしなかったのかはわからなかったが、今ならその理由がわかる。アズマが混血だからだ。

人間が魔獣の耳を生やしたアズマを拒むように、魔獣も完全な獣になれないアズマを拒むことはあれど、受け入れることはないだろう。人間よりも力が強い分、下手に会っていたら問答無用で命を奪われたかもしれない。恐らく母はそれを恐れたが為に、アズマを魔獣の元へと行かせなかった。そのせいで自分が死ぬことになろうとも。

祭壇を守っているという魔獣達は、アズマを見たらどう思うだろうか。少なくとも、いい顔はされないだろう。よくて帰れと言われるか、最悪の場合、命を狙われることもあり得る。

だが、だからといって引き下がりはしない。祭壇で待っている精霊喰らい（ディヴァイーター）から、ニーナを守らなければ。もしも命を落とすとのだとしたら、そのときだ。

「大丈夫か」

「！」

ルキが立ち止まってアズマを見ていた。気づくとニーナはゼフォンに抱き上げられ、かなり先を行っている。そういえば二匹目の墮霊を倒して合流したときも、ニーナはゼフォンに抱き抱えられていた。箱入り息子のわりに、力はあるらしい。そしてどうやら、アズマは考え事をしていたために遅れてしまったようだ。

「悪いね、すぐ追いつくか、ら!？」

アズマは思わず声を上擦らせる。前方にいたルキがアズマの前にやってくるやいなや、ニーナと同じようにひょいと抱き抱えられたから。

「いきなり何すんだよ！ あたしはニーナと違って自力で行けるから！ 降ろせ！」

宙に浮いた足をばたつかせながら吼えると、ルキは何も言わずにそのまま降ろす。アズマはバツとルキから離れ、背を向けた。

「ちょっと考え事してただけだから！ 一人で平気だから！」

「.....その考え事とは、魔獣のことか？」

「.....っ」

何を考えているかわからないくせに、勘だけは鋭い。口に出さない分、頭の中は様々な思いが巡っているのだろうか。

「悪い？ あたし混血だから、いるだけでいらぬ怒りを買って一悶着起きたら大変だろ？」

アズマは誤魔化したりはしなかったが、いつも以上にっつけんどんに返した。ルキを相手にするとどうも調子が狂うため、そうでないと普段通りでいられないから。

「気にするな、とは言わない。だが、魔獣と戦うことにはならないと思う。ゼフォンがいるから」

まだ息子で力を失っている状態とはいえ、ゼフォンは風神だ。アズマのことを憎らしく思おうとも、風神の命令ならば確かに聞き入れるかもしれない。

「.....あいつにはまだ、あたしが混血だって言ってないんだけど」

「知ったとしても、俺と同じように珍しいと思うだけだろう。混血とは、人と魔獣が歩み寄った結果なのだから、別段悪いことじゃない」

アズマは何も言えなかった。ルキの言う通りだったから。

母は父を心から愛していた。怪我をして動けなくなっているところを偶然通りかかった父に手当てされ、そのとき父の心の優しさに惹かれたのだと。その後、人の姿をとって会いにいった母に、父は一目惚れしたらしい。

しかし幸せは長くは続かず、本性である獣の姿をある日街の住人に見られ、父に見つかる前に母は森へ逃げた。しかし父は母を追って森の中へとやってきた。再び母と出合ったときから、自分が助けた魔獣だとわかっていたと言って。結局共にあり続けることは叶わなかったが、父も確かに母を心から愛していたのだ。

そんな心から想いあった二人が、悪いはずがない。

「ルキ！ アズマ！ 何ももたもたしているんだ！ 速くこい！」

いつまで経っても距離が縮まらないどころか広がっている自分達に痺れを切らしたのか、ゼフォンが苛立ちを隠すことなく叫ぶ。

結局この話はこれで終わり、アズマとルキはひたすら進むことに集中した。二人としても早く進まなければという気持ちはある。

前を向けば後は早かった。ゼフォンとの距離はすぐに縮まり、四人はひたすら森の奥へと進む。

魔獣に会うことの不安はすっかり消えていた。アズマの両親は互いを想いあっただけ。それは胸を張って誇るべきことであり、

引け目に感じることはない。それが魔獣に通じるかはわからないが、少なくとも、ニーナは心から賛同してくれるだろう。それで充分だ。

黙々と奥へ奥へと進んでいく。魔獣の里はいつになったらつくのだろう。それをゼフォンに聞くために口を開こうとしたとき、身体に戦慄が走った。

「止まれ！」

そう叫んでアズマは身構えた。周囲からとてつもない威圧感を感じる。何か、いる。

「ここから立ち去れ、愚かな人間達よ」

そう口にしたのは人間ではなかった。草陰から姿を現したのは、こげ茶色の毛に覆われた、細いがしっかりとした四肢を持つ獣だった。頭からピンと立つ耳は長く大きく、変わりに顔は小さく鼻先が長い。琥珀のような色を持つ瞳は、拒絶以外の光を宿してはいなかった。そしてそんな魔獣が一頭、また一頭と次々に姿を現していく。気づくと、アズマ達は魔獣に囲まれていた。

「お前達か、祭壇を守っている魔獣達というのは」

「.....貴様、何故祭壇のことを知っている」

ゼフォンの言葉に、一番始めに出てきた魔獣の琥珀色の瞳に剣呑が帯びる。どうやら、ゼフォンが風神の息子だということに気づいていないようだ。

ゼフォンはニーナをゆっくりと降ろすと、腕を真っ直ぐに伸ばす。すると周りに風が渦巻くように吹きはじめた。魔獣達に響きが走る。

「ま、まさか貴方は.....風神様.....？」

「ああ。事情があって今は力を失ってしまっているがな。お前に祭壇のところへ案内してもらいたい。精霊喰らい（ディヴァイター）が復活しつつある」

魔獣達はお互い顔を見合わせる。囁く声も聞こえた。それは本当なのか、だとしたら一大事だ、と。どうやら、精霊喰らい（ディヴァイター）の復活を彼らは把握していなかったようだ。

「.....大変失礼致しました風神様。私が一族を纏める者、ハウジと申します」

ハウジと名乗った魔獣は平身低頭した。それに倣い、他の魔獣達も次々とゼフォンに低頭する。しかし、ピリピリとした緊張感相変わらず漂っていた。そしてそれは主にアズマへと向けられている。

「最近祭壇に異変はなかったのか？」

「.....我々が守っているのは祭壇ではなく、祭壇へ続いている洞窟の入り口なのです。不用意に祭壇を刺激しないよう、祭壇まで我らが行くことはありません。昨日、確かに不穏な気配を感じたので入り口付近を確認はいたしました、そこには特に異常はありませんでした」

今も特に何かが出てきたとか、そういうことはないらしい。それはつまり、まだ復活はしていないということになる。意識だけが身体と封印を抜け出し、セフィラスへとやってきたという仮説が確信へと変わった。

「だが、それも時間の問題だな。だが、もしもまだ復活していないのであれば、そのまま再度封印しなおせるかもしれない」

今ならまだ戦う必要がないかもしれない。それはニーナの身の安全に繋がることになる。

「なら、今すぐ案内してくれ。頼めるな？」

「.....そのことですが」

ハウジは頭を上げるとちらりとニーナやルキ、そしてアズマを順番に見遣る。

「貴方様だけならともかく、そちらの者達を祭壇へ連れて行くわけには参りません。――特にそこの青い髪の娘。即刻お帰り願いたい」

ギロリとアズマを睨みつける瞳はとても冷たかった。案の定な反応に、アズマは内心嘆息した。ゼフォンの手前、丁寧な口調をしているが、本当は視界に入れるのも嫌なのだろう。

「――それはアズマが混血だからか？」

アズマはぎょっとゼフォンを見た。彼には話してはいないはずなのに、どうしてそれを知っている？ ニーナとルキでさえ目を大きく開いてゼフォンを見ていた。どちらもアズマが混血だということをゼフォンには伝えていない。

「――ええ、そうです。混ざりものの獣ほど、見苦しいものではありません」

「な.....！」

驚愕の声をあげたのはニーナだった。アズマは逆に落ち着いていた。魔獣の冷やかな態度は完全に予想がついていたから。

「何故そんなことを言うのですか!? アズマにも魔獣の血が流れているというのに.....！」

「だからこそ、だ。人間の娘よ。魔獣の血が流れているが魔獣ではない。そんな中途半端な存在を、我らは受け入れることなどできん」

やはり混血である自分は人間だけでなく、魔獣にも否応なく嫌われるらしい。アズマとしても、彼らに気に入られたいわけではないから、別に嫌われたままでも一向に構わないが、こんなところまで来たというのに引き下がるわけにはいかなかった。それをどう彼らに納得させればいだろうか？

「……アズマを中途半端な存在というのであれば、同じく人の母を持つ俺も、中途半端な存在ということになるな」

「な……！　なんてことをおっしゃるのですか!?　神の子たる貴方とその娘とでは話が全く違います！」

ゼフォンの言葉にハウジは狼狽した。彼が拒むのはあくまでアズマであり、風神の子たるゼフォンのことを悪く言ったつもりはない。

「同じことだ。人間を親に持つということはない。――別に俺はお前達に理解を求めているわけでも、そのことを責めるつもりもない。ただ、纏めて案内してもらいたいだけだ。戦力は一人でも多いに越したことはないだろう？」

ハウジは俯いた。どうやら悩んでいるらしい。周りの魔獣達も、おろおろと緊張した面持ちで彼を見つめている。

「――わかりました。ご案内致します」

「ありがたい」

ハウジは首を振って仲間を一瞥する。すると、魔獣達が次々とアズマ達に背を向け、森の奥へと姿を消していった。

「それではついてきて下さい」

全ての魔獣達が視界から消えたのを確認すると、ハウジもアズマ達に背を向けた。ゆっくりと歩みを進める彼の後ろに四人はついていく。どうやら、魔獣達に追い返されずに済んだようだ。ルキの言っていた通りに。

しかし、本当の問題はここからだ。精霊喰らい（ディヴァイーター）が大人しく封印されるとは思えない。

アズマは前を歩くニーナを見据える。やはりニーナはアズマを庇ってくれた。大勢の魔獣に囲まれて、怖くなかったわけがないのに。

絶対にニーナを守る。アズマは拳を握り締め、強く心に誓った。

道は段々と険しくなっていく。鬱蒼としているから、どこまでも深い森が続いているのだと思ったが、奥はむしろ岩山だと言った方がいいのではないだろうか。凸凹とした道に切り立つ崖。しかし、ここまでくるのに上り坂ではなかったと思うのに、何故こんなところに崖があるのだろう。そのおかげで明るくはなったが。

ゼフォンはちらりとニーナの方を見た。自分達の中で唯一彼女だけが息を切らせながら、必死になってついてきている。だからまた抱き抱えようかと言ってみたところ、大丈夫ですと言って頑なに聞き入れない。

自分よりも他人を優先する彼女のことだ、どうせ自分に迷惑をかけるわけにはいかないと思って断ったのだろう。混血であるアズマやゼフォンの洗礼を受けたルキとは違い、ニーナは普通の娘なのだから大変なのは当然だろうに。

「ニーナ、大変ならまた抱えてやるが」

「だ、大丈夫、です！」

再度声をかけてみるが、やはり大丈夫の一点張りだった。どうしたものかと、ゼフォンは内心嘆息した。ニーナが頑張っているおかげで今のところ進むのに支障はないが、どう見ても辛そうなのは確かだ。アズマもニーナが倒れるのではないかと、冷や冷やしている。

このままでは、本当に倒れるまで無理に歩こうとするに違いない。

「仕方がないな」

ニーナの背後に回るとそのまま膝の裏に腕を入れ、足を掬う。バランスを崩して後ろに倒れそうになったニーナの背中をもう片方の腕で支えた。強情な少女には、もう実力行使しかないだろう。

「ぜ、ゼフォン様！ わ、わたし、大丈夫ですから……！」

「案ずるな。神にとってこのくらい造作もない」

神の身体能力は人間を遙かに超える。人の十倍も長く生きる分、肉体も強靱にできているのだ。だからニーナのような華奢な少女を抱き抱えながら進むことに、支障はおきない。

「それに」

ゼフォンは近くなったニーナの顔を見ながら微笑んだ。

「この体勢だと、ニーナの顔がよく見える」

「……！」

ニーナは美人ではないが、大きな黒い瞳は愛嬌があり、小さな唇は楚々としてとても可愛らしい。笑ったり戸惑ったり悲しんだり、表情もまたくるくると変わって見ていて飽きなかった。

しかしニーナの頬に朱が走ったかと思ったら、ふいと顔を逸らされてしまう。何か機嫌を損ねることを言っただろうか。

「……ここから先は足場が不安定ですので、充分注意してお進み下さい」

先頭を歩いていたハウジがこちらを振り返る。確かに道幅が狭くなっていた。時折パラパラと斜面から石が落ちていく音がする。

「……ここは標高は高くはないのに、何故崖になっているんだ？」

「この崖は、二百五十年前の風神様と精霊喰らい（ディヴァイター）との戦いの痕です」

「！ これがか!？」

この崖が戦いの痕だとすると、どれだけの力でえぐり取ったというのだろう。

身体に戦慄が走る。精霊喰らい（ディヴァイター）との戦いがどれだけ熾烈を極めたか様々と見せつけられて。それなのに力を失っている状態の自分が倒せるだろうか。まずは力を取り戻せと父は言っていたが、どうやって取り戻せばいいのかもわかっていないというのに。

「あの……ゼフォン様、どうかしましたか？」

ゼフォンの緊張が抱き抱えているニーナにも伝わったのだろう、気遣わしげにニーナがゼフォンを見上げていた。

「いや、何でもなし。大丈夫だ」

守らなければならない少女に、己の不安を悟られてはいけぬ。精霊喰らい（ディヴァイター）を倒さなければ、ニーナは精霊喰らい（ディヴァイター）が精霊を喰らうのに利用されてしまう。精霊のことすら気にかけるような心の優しい少女が、自分のせいで精霊達の命を脅かしてしまうことになったら、とても傷つくだろう。

ニーナには笑っていてほしい。他愛ないことで喜び、目をきらきらと輝かせるような。不安で怯えてほしくはない。

そのためには、精霊喰らい（ディヴァイター）をゼフォンが何とかしなければならぬ。ニーナから笑顔を失わせないためにも。

「そういえば、ゼフォン様はどうしてアズマが混血だとわかったのですか？」

ニーナはわからないことがあると、その度ゼフォンに聞いてくる。ゼフォンとしても神としての知識をニーナに披露できるのが

嬉しかったので、いつも嬉々として答えていた。今回も、思わず得意げになる。

「それは出合ったときから気づいていたぞ。アズマから、人間と魔獣の気配が両方していたからな。力を失ったといってもそれくらいはわかる」

ゼフォンの説明を、ニーナは関心しながら聞いている。聞く側が真剣に聞いてくれると、説明しがいもあった。そんな二人の様子を、アズマが呆れ混じりで見ていることには全く気づかずに。

「全員止まれ！」

不意にハウジが鋭い声を上げ、頭を低く構えた。アズマとルキもつられて前を警戒する。

「何かが……走ってくる？」

「……墮霊だ！」

前方から黒い影が猛スピードでこちらにやってきている。それは身体全体が黒いから影のように見えただけの、四足歩行をする生物だった。そんな生物は墮霊に他ならない。

「ニーナ、下がっている」

ニーナを下ろし、安全なところへとさがらせる。同時にルキが詠唱を唱え終え、突風が墮霊を襲った。何とか勢いは止まったが、墮霊は四肢に力を入れて地面から離れないよう身体を伏せ、吹き飛ばすまでには至らない。

「しぶといな……！」

アズマが舌打ちをしながら墮霊に向かって走り出す。突風にうまく乗り、あっという間に墮霊の懐まで行くと、剣を抜き放ち墮霊の喉元を切り裂いた。

――グルオオ……！

喉を切り裂かれた墮霊はぐらりと身体が傾ぎ、霧散しながら崖下へと落ちていく。

「安心するのはまだのようです！ また来ます！」

今度は黒い影が二つ。こんなに連続で墮霊が襲ってくるなど、意図的でなければありえない。精霊喰らい（ディヴァイーター）が差し向けた墮霊と考えて間違いないだろう。

ハウジが片方の墮霊に飛び掛り首筋を噛み砕くと、もう片方の墮霊にルキのおこした落雷が命中し、身体が霧散する。

「また来るかもしれない。今のうちに走るぞ！」

後ろで固まっていたニーナを抱き抱え、ゼフォン達は幅の狭い道の上を走る。案の定、やはり前方から再び墮霊が向かってきた。今度は一頭だが、一番初めの墮霊よりも遙かに大きい。

「撃ち放て、水の弾丸」

ルキの詠唱と共に水の塊が宙に現れ、墮霊の前足の付け根を貫き、体躯から切り離れた。三つ足になりバランスを失った墮霊は地面に倒れこみ道を塞いでしまう。

「精霊よ！ その墮霊を道からどかせ！」

ニーナの傍にいる風の精霊に命ずると、ピュウッと墮霊の所まで飛んでいき、風を起こして墮霊を崖下へと落とす。数秒の後、ドスンという大きな音が地面を揺らした。この高さだ、落ちたら間違いなく絶命するだろう。

「この調子だと、精霊喰らい（ディヴァイーター）のどこにつく前に力つきない？ 数多すぎ」

アズマが苛立ちを顔に地面を蹴る。確かに何度も何度も墮霊を相手にしていたら体力が持たないだろう。だが、墮霊を乗り越えていけない限り精霊喰らい（ディヴァイーター）の元へは辿り着けない。

「祭壇は、この道をまっすぐ抜けたところにある洞窟の中です。……しかしこの様子だと、洞窟の中にも墮霊が蠢いているやもしれません……」

確かにその可能性は高い。それでもゼフォンが神の力を失っていなかったなら、墮霊が何匹束になろうとも一掃できたはずだ。

力のない自分が悔しかった。久しぶりに神殿の外に出たことに浮かれ、注意を怠った自業自得な事実が、情けなさに拍車をかける。何故今日、自分は外へ出てしまったのだろう。神殿の中で大人しくしていれば、少なくとも力を失うことはなかった。そして、今腕に抱えている少女を危険に巻き込むことも。

「ゼフォン、お前はあまり力を使わない方がいい。精霊喰らい（ディヴァイーター）と対峙するときのために、温存した方がいいかもしれない」

「……それだと、墮霊はお前たちに任せてしまうことになるが」

「そのために風神は、俺を連れて行けと言ったんだと思う」

まだ経験不足のゼフォンと違い、先を見通すことができる父のことだ。多くの墮霊に襲われることを想定していたに違いない。

ゼフォンは軽く嘆息した。今は力がないのだから、ルキ達の力を借りてしまうのは止むを得ない。

「何ぼさっとしてんの！ くるよ！」

アズマの鋭い一喝にはっと前を向くと、今までの中で最も巨躯を持った墮霊が接近してきていた。身体が大きいということは、それだけ重量もある。近づくとつれて地面がグラグラと音を立て、足場を揺るがす。

ルキは素早く詠唱し術を発動させた。幾つもの火の玉が墮霊に襲い掛かるが、墮霊の勢いは衰えていない。

「効いてない……!?!」

「毛が厚くてダメージを抑えられたのかもしれない」

「温存すると言ってる場合じゃなくなったな……！」

霊術が効かないとなると、力の温存を言っている場合ではない。墮霊は物理的な力は頸部への損傷以外、死には繋がり難いうえに、あの巨体だ。アズマとハウジにそこを狙ってくれと望むのは酷だろう。

「何度も悪いが下がっていてくれ」

「は、はい」

ニーナを後方へ下がらせてから周りの精霊を集め、間近に迫っていた墮霊の横側から精霊に突風を吹かせる。ダメージを与えないなら、崖下へと落とせばいい。

しかし墮霊は巨躯が幸を奏したのか、突風をものともせず耐え、巨体を宙へと踊らせた。

「！ 離れろ！」

全員その場からさっと離れた刹那、墮霊が大地へと降り立ち、大音量と共に表面に亀裂が入った。狭い足場は墮霊の重量に耐え切れなかったのだろう、罅は前後左右に広がっていく。

「足場が……！」

バラバラと成す術もなく足場が崩れ去る。はっと後ろを振り返ると、ニーナの周りにも罅は広がっていた。

「わ……！」

「ニーナ！」

ニーナの元へと走り、抱きとめると同時に足場が完全に崩れた。落ちる。

「精霊よ！ 俺達を風で包め！」

重力に従い落下するゼフォン達の周りにぐるぐると風が渦巻きはじめた。次第に落下のスピードが緩やかになっていく。

ゼフォンは上を仰ぎ見た。地上は僅かに見える程度で、大分下まで落ちてしまっている。落下スピードを緩やかにするので精一杯な精霊達に、上まで自分達を運ばせるのは無理だろう。このまま上に行くことは諦めた方がよさそうだ。

そのままふわりと地面に着地した。念のために周囲を見回すが、墮霊の姿は無い。

「あ、あの……ゼフォン様。ちょ、ちょっと苦しい、です」

「あ、すまない」

咄嗟に抱き寄せたために腕の力の加減を考慮していなかったのだろう。ゼフォンは背中に回していた腕をとき、ニーナを解放する。

「ア、アズマとルキさんは無事でしょうか……」

「そういえば、あいつら近くにいないな」

足場が崩れたとき、もしかしたら反対側へ落ちたのかもしれない。だがルキならばゼフォンと同じように風の精霊の力を借りて無事に着地しているはずだ。心配は無用だろう。

それを伝えようとした途端、頭上に影が差した。上を見るとこげ茶色の毛に覆われた獣が上から降ってくる場所だった。ハウジだ。大きな地響きと共に地面に降り立つ。

「風神様、ご無事でなによりです」

高いところから落ちてきたとは思えないほど、ハウジの声音は落ち着いていた。どこか身体を痛めたようでもないし、怪我もしていない。

「あ、あの、アズマとルキさんは無事ですか？」

「あの二人なら無事だ。何とか落ちずに上にいる。――あの二人には、そのまま真っ直ぐ進むよう伝えました。ここからでも祭壇へ続く道に出られますので、ご案内致します」

ニーナがハウジの言葉にほっと胸を撫で下ろす。相変わらず、自分のことよりも人のことを気にする少女だ。

「それなら進もう。遅れるわけにはいかないからな。このままでは日が暮れてしまう」

ニーナに歩けるか尋ね、大丈夫だと帰ってきた。ニーナの大丈夫はあまり信用できないから、疲れたようであるならまた抱き抱えればいいだろう。

ゼフォンとニーナは、ハウジの後について再び歩き出した。

先程からずっとアズマは崖下ばかりを見ている。それだけゼフォンと一緒に落ちていったニーナが気になるのだろう。何度もゼフォンに抱き留められていたから大丈夫だと言ったが、無事な姿を見るまではこの調子かもしれない。墮霊が再び襲ってくる心配がないことだけが唯一の救いか。

足場が崩れたとき、ルキは咄嗟に近くにいたアズマの手をとった。そして風の精霊の力を使って風をおこし、ホウジを含めた三人を高く吹き上げたが、離れた位置にいたゼフォンとニーナにその風は届かなかった。

ニーナの周りにいる精霊を使えば落下を緩めることぐらいはできるだろうから、せめて落ちる原因となった墮霊だけは鎮めるべく、契約している全ての水の精霊の力を総動員させ、至急巨大な氷柱を作り、上から首を目掛けて突き刺した。足場がなくなっただけで避けられないのと、落下するスピードが合わさり、巨大な氷柱は見事に墮霊の首を貫く。それを確認したと同時に、ルキ達は崩れなかった足場へと着地した。

「ニーナ！」

アズマが崖下へ飛び出そうとしたため、手首を掴んでそれを止める。

「落ち着け。ゼフォンがいるから大丈夫だ。墮霊も何とかなった」

「でも……！」

「なら、私が降りよう」

ホウジがアズマの横に立った。アズマは目を大きく見開き驚いた様子でホウジを見る。

「勘違いするな。風神様が下におられるからだ。傍にいた娘のことなどどうでもいい」

琥珀色の瞳に宿る光は相変わらず冷たい。魔獣は基本排他的で、人を受け入れることすら稀だから当然といえば当然だ。

「お前達はそのまま真っ直ぐ進め。そうすればいずれ祭壇に続く洞窟の入り口が見つかるはずだ。ここまでくれば、それほど時間もかからないだろう」

それだけを言い残し、ホウジは躊躇なく崖下へと飛び降りた。魔獣の魔力がどのくらいあるかは知らないが、全く躊躇うことなく降りたことを考えると、無事である算段があるのだろう。ゼフォン達は彼に任せ、自分達は言われた通り真っ直ぐ進んだ方がいい。

崩れかけている足場から黙って下を見続けるアズマに行こうと声をかけると、アズマはコクリと頷いた。

「また……守れなかった……」

真っ直ぐ伸びる道を歩き続けていると、崖下から自分の足元に視線を移したアズマがポツリと呟いた。それは本人も無意識のものだっただろう。近くにルキがいるというのに、そんな弱気なことを強がりのアズマが意識して言うはずがない。

アズマは口は悪いが、それは己を強く見せるためのものだと思っただけでルキは思った。街で何とか墮霊を倒した後、打ち明けてくれた混血だという事実。人間でもなく魔獣でもない自分は一体なんなのだと口にしたときのアズマは、とても弱々しかった。先程まで勇敢に墮霊に立ち向かっていた少女と同一人物とは思えない程に。

アズマは弱い、精神的に。だからニーナは、アズマの精神的な支えとなっているのだろう。

そんな無意識に見せた弱さに、思わず腕の中に抱きたくなる衝動に駆られたが、同時にそうしてはいけないような気持ちも沸いて、伸ばしかけた腕を一旦抑えた。しかし触れたいという思いは消えることはなく、結局は頭を撫でることで身体を落ち着けた。初めはどうしてそんな衝動に駆られたのかわからなかったが、深く考えるにつれて、この混血の少女のことを『可愛い』と思っているからだという結論に至り、納得した。

大切な者を守るために立ち向かう強さと孤独に怯える弱さ。その両方を垣間見たためにそんな気持ちが沸き起こったに違いない。

しかし、一つ腑に落ちないことがある。どうしてアズマはそこまでニーナを守ることに固執しているのか。アズマのニーナへの態度は、まさしく過保護の一言に尽きる。確かにニーナが精神的支えとなっているのはわかるが、何もそこまで徹底して守ってやる必要はない。失うことを恐れつつも、だからといってずっと戦々恐々としてる少女ではないのに。

「アズマ、何故お前はそこまでニーナを守ろうとしてる？」

ニーナは逆に、墮霊に立ち向かえるような力はないが精神的に強い。彼女は己が弱いことを知った上で、そんな自分でもできることを精一杯するという気概がある。自身の命を差し出せと言った風神に、畏れながらも自分の思いを伝えた姿には驚嘆したものだ。

人がよすぎるのが玉に瑕だが、だからといって全ての危険から守ってやろうとする必要はない。騙されたとしても、それはニーナ自身が考え選択した答えなのだから、彼女は後悔しないはずだ。

「俺には、お前がニーナに守られているように見える」

「……！」

思ったことをそのまま伝えると、アズマの肩が僅かに震えた。翠の瞳を閉じ、暫くして徐に目を開く。

「そう……だろうね。あたしはいつも、ニーナに守られてばかり。今も、あのときも……」

俯いていた顔を前に向けたアズマの表情は、泣きたいのを必死に堪えているようだった。

「……ニーナさ、どうして普段男みたな口調で話すと思う？」

突然ふられた話に思わず首を傾げた。ゼフォンやルキに対しては敬語だが、アズマに対して話す、砕けていると思われる口調は確かに男口調だ。しかしそれに一体何の意味があるというのだろう。

「ニーナには、歳の離れた兄がいたんだ。両親を早くに亡くしてずっと二人で暮らしてたから、そのせい」

アズマの言葉が過去形だということにすぐに気づく。そしてケティスが経営しているという花屋に、ニーナの兄らしき人物の存在は見当たらなかった。

「亡くなったのか、ニーナの兄も」

「……そう——あたしを庇って」

聞き返したルキに頷いたアズマの言葉は、震えていた。

「前に住んでいたのは、自警団もないような小さな街だった。そんな街に墮霊が現れて、当然太刀打ちできる奴なんてほとんどなくて……運動神経がいいって理由だけで、あたしや猟師だったニーナの兄がかりだされて」

このときのアズマは墮霊と戦うのは初めてで、『魔獣』と呼ばれた墮霊を攻撃するのに躊躇いがあったという。そのせいで思うように身体が動かず、墮霊の鋭い爪がアズマ目掛けて振り下ろされた刹那、ニーナの兄がアズマを突き飛ばし、代わりにその凶刃を一身に受けた。

「あのとき……今みたいに躊躇いなく戦えてたら、あいつは、リディアンは死なずに済んだのになら、今でも思う」

そのとき初めて魔獣としての力、相手の目を睨むことで麻痺させる不思議な力を使ったという。そのおかげでニーナの兄以外の犠牲を出すことなく倒すことができたが、アズマが睨みつけた途端動きを止めたことに、共に退治をしていた者達は不審を抱いた。横たわるニーナの兄を呆然と見つめているアズマのリボンを手勝手にほどき、混血であることが知られてしまったらしい。

「あたしは、そのまま『魔獣を引き寄せた』罪をなすりつけられて、街を出て行くことになった。騒ぎを聞きつけたニーナが必死に抗議してくれたけど、そのせいでニーナまで追い出されることになって……」

安易に想像がついた。人が少なければ、墮霊の出現も少ない。その分対処に不慣れで、一度現れたら壊滅的な被害を被ってしまうだろう。そして、墮霊に蹂躪され、住むところを奪われた行き場のない恨みや悲しみは、人とは異なった者にぶつけられる。家を壊され、アズマに怒りを向けていたあの少年と同じように。

「兄が死んだ上に、自分まで追い出されることになったのに、ニーナはあたしに恨み言一つ言わなかった。ニーナは、あたしを全く責めなかった。——今でもあのときの言葉を鮮明に覚えている。ひたすらゴメンって謝って、あたしが死ねばよかったのになら、あとのニーナの言葉」

アズマは一旦言葉を切ると、再び顔を俯けた。

「『兄さんが死んでしまったことは確かに悲しい。でも、アズマが生きていてくれたことはとても嬉しかった。それなのに、自分が死ねばよかったなんて言わないでくれ』って」

その後二人して大泣きし、お互いを抱きしめあって気持ちを落ち着けた。家に戻り、簡単な旅支度をして、破壊された街並みを後目に街を出たという。

「あたしは、そのとき誓ったんだ。絶対ニーナを守るって。——ニーナを守れなくなったあいつの分まで、あたしが……！」

それが二人に対する自分なりの贖罪なのだとアズマは続けた。

「……それなのに、あたし、何もできなかった……」

肩を落としながら俯いたままのアズマは、とても小さかった。それは身長差からくるものではなくて。

「ニーナは気にしてないと思うが」

「……だろうね。あたしが一方的に気にしてるだけ。……そんなのわかってるよ」

「それに、あれはお前のせいじゃなくて、アズマの手を掴んだ俺のせいだろう」

元々距離的に無理はあったが、ルキがアズマの手を掴んだことがニーナの元へアズマが行けなかった大きな理由だ。もしもあのままアズマがニーナの元へと飛び出していったら、途中崩壊に巻き込まれ、同じく落下していただろうが。

「……」

アズマは何も言わなかった。アズマもルキが手を掴んでいなければ、今頃崖下で命が絶えていたかもしれないと、わかっているらしい。

「祭壇の洞窟前でゼフォン達と合流したとき、アズマが自分を守れなかったと落ち込んでいるのをニーナが見たら、彼女も落ち込むと思う」

自分のことより他を優先するニーナなら、充分考えられることだった。ピクリとアズマの肩が動く。

「そう……だね。あのお人よしは、いつも自分のことより人のことばかり……」

再び前を向いたアズマの顔は、泣きたいのか笑いたいのかわからない表情だった。しかし、先程の必死に泣くことを堪えていただけの表情に比べたら、随分和らいだと思う。

二人は暫く無言で歩いた。歩くことに集中すれば、後は早い。混血故に身体能力が高いアズマは言うに及ばず、ルキはゼフォンから洗礼を受けた際、身体の構造も神と似たような造りに変わったため、常人以上の動きをすることができる。そんな常人離れた二人は、あっという間にそれらしき洞窟の前へと辿り着いた。

「.....ここでいいんだよね」

「多分」

入り口だと思われる直径二メートル程の穴が、地面にぽっかりと開いていた。覗き込むと、深さと共に奥行きがあり、長く続いているのだと検討がつくが、これを洞窟と言っていいのか判断に悩むところだった。

「そんなに時間もかからないって言ってたし、ここでいいと思うけど.....」

アズマは周りを見て、自分達以外の誰もいないことを確認すると嘆息した。ゼフォン達の姿はまだ見えていない。

「とりあえず、ここで待ってればいいよね。この中が複雑な構造になってたら困るし」

「ああ」

その場に腰を下ろし、ルキはふうと一息つく。今日だけで、ほぼ一年分の墮霊を鎮めたのではないだろうか。流石に少しばかりだが消耗してしまっている。これからまだ大きな敵が残っているのだから、少しでも休んでおかなければ。

「あ、あのさ、ルキ」

アズマが前に立ち、ルキを見下ろしていた。しかし視線は脇に逸れ、ルキを見ようとしていない。

「どうかしたか？」

「いや、その.....まだ礼とか、言ってないと思って」

「礼？」

何か礼を言われるようなことをしただろうか。思わず首を傾げると、アズマは逸らしていた視線の先をルキに向ける。

「.....出合ったときとか、その後のこととか.....さっきとか。何回も助けられた、から」

たどたどしく言葉を紡ぐアズマの頬はうっすらと赤く染まっていた。

「だから、ありがと」

「――っ」

刹那、胸に強い衝動が湧いた。あのときと似ている。アズマが自身のことで酷く気落ちしていたときと。あのときはそれほど強くなかったため、簡単に抑えられた。しかし今度は押えがきかない程、強い。

「え、うわっ！」

気づけばアズマの腕を引っ張って引き寄せていた。両手を背中に回して抱きしめる。

アズマはやはり小さかった。肩も背中も細く、頼りない。こんな小さな身体で一人の少女を守ろうとしていると思うと、自然と抱きしめる腕に力が籠った。

「な、なななな何すんだよ！」

腕の中でアズマが抗議の声をあげて、ルキの腕から離れようとするが、力が全く込められていない。顔を見ると、全体が見事に真っ赤に染まっている。可愛い、とあのときと同じ形容詞が頭に浮かんだ。

「こうしたいと思った。――アズマが可愛いと思ったから」

「.....！」

アズマは顔を俯かせると大人しくなった。そんなアズマを見て、ルキは頬が緩んでいるのを自覚する。

思えば、誰かを可愛いと思ったのは生まれて初めてだ。こんな風に気持ちが高ぶるのも。しかし、どこか温かみのあるそれは決して悪いものではない。

「暫くこのままでいいか？」

「.....あいつらが、来るまでなら」

ボソリと呟くような声だったが、ルキの耳にはしっかりと届いた。

ハウジが言った祭壇への道はほぼ上り坂と言ってもいいかもしれない。かなり高い所から落ちたのだからそれも当然か。急な坂ではなく緩やかな坂なことが唯一の救いだったが、体力のないニーナがへばるには、十分な坂だった。

「お前は普通の娘なのだから無理をするな」

ゼフォンにそう言われ、結局ニーナは再びゼフォンに抱き抱えられることになってしまった。彼は遠慮しなくていいと言っているが、ニーナが断っているのは迷惑をかけてしまうから、というだけではない。

ニーナの視線の先にあるのはゼフォンの端正な顔。いつ見ても綺麗だと思うが、今は綺麗とは別の言葉が頭に浮かんでいる。かっこいい。

「――！」

ニーナは掻き消すように、頭をぶんぶんと振った。風神の息子に対し、そんなことを思ったなんて不躰にも程がある。

「ニーナ、どうかしたのか？」

「な、何でもありません！」

そんなニーナを心配そうに見下ろすゼフォンに申しわけなく思いながら、ニーナはドキドキと音を立てる心臓に手をやった。さっきからそこはずっと大きな音を立てていて、煩くてかなわない。しかし、どうしてこんなにも心臓が高鳴るのか、全くわからなかった。一つわかるのは、ゼフォンの傍にいるときに煩くなるということだけ。

だから抱き抱えてもらうことに抵抗があった。ゼフォンとの距離が近すぎて、心臓がやかましい程に音を立ててしまう。唯一の救いは、その心臓の音がゼフォンの耳に届いていないことだろう。こんなにもバクバクと鳴っている音を、彼に聞かせてしまうわけにはいかない。

「ハウジ、祭壇へはどのくらいで辿り着く？」

「大きく迂回している道なので、まだかかります」

まだかかる、つまり、その間ずっとこの体勢ということか。うう、と心の中だけで呻いた。

ニーナは落ち着かない心臓を抱えていたために、ほぼ無言で進んでいたことや、ニーナを抱える腕に力が籠っていたことに気づくことができなかった。

坂道は自然、歩む速度が緩やかになる。小気味よく揺れる身体に突然襲い掛かったのは、睡魔だった。支えてくれるゼフォンの腕が温かいのもあって、とても心地がいいせいだろう。しかしこんなところで寝てしまうわけにはいかない。

目を閉ざさないよう大きく開こうとして、そのとき視界に映ったゼフォンの表情が強張っていたことに気づいた。前を見据える視線にも、いつもの覇気がない。

「ゼフォン様、どうかなさったのですか？」

様子のおかしいゼフォンに、ニーナの睡魔はあっという間に退散した。彼に何かあったのなら、僅かばかりでも力になりたい。

「え、あ、いや……何でもない、大丈夫だ」

そういうとゼフォンは微笑んでくれたが、明らかに無理をしていることがわかる。何か気がかりなことでもあるのだろうか。

「あの……わたしでは頼りにならないかもしれませんが、話を聞くだけならできます。だから――一人で背負い込まないで下さい」

精霊喰らい（ディヴァイーター）を封印できるのはゼフォンだけ。もしかしたら、そのことで不安になっているのではないだろうか。もしもニーナも、自分にしかできない重大なことを任されたら、失敗しないだろうかとか、大丈夫だろうかとか、不安になるかもしれない。

いや、むしろ悩むのが普通ではないだろうか。そして彼は、そんな悩みを自分一人で解決しようとしている。そんな彼にしてあげられることは何だろう。やはり無力でしかない自分が悔しかった。

「わたしは、ゼフォン様なら、きっといい方向へ物事を進められると信じます。それに、ゼフォン様はお一人ではありません。アズマルキさんも、きっと力になってくれます。……わたしは、こんな風に応援することしかできませんが……」

所詮自分は口だけだ。そんなニーナが出来ることと言ったら、最後の最後までゼフォンを信じることだけ。だが、あの強い二人も一緒なのだから、一人で全てを背負い込んでほしくはない。

「……ありがとうニーナ」

フ、と漏らした笑みは、無理をした笑みではなかった。

「実を言えば、少し弱気になっていたんだ。力を失っている状態で、どこまで精霊喰らい（ディヴァイーター）と渡り合えるのか。――お前を守りきれぬのか。この調子ではニーナを不安にってしまうと思ったから誤魔化そうとしたが、どうやら隠しきれなかったらしい」

「不安に思うのは当たり前ではないですか。恥ずかしいことはありません」

誰だって不安になるときはあつ。崇高な存在である神とて人と同じように感情があるのだから、不安にかられたとしても何もお

かしくはない。それをそのまま言うと、ゼフォンはハハと苦笑した。

「確かにそうだな。感情がある時点で、神も人に対して変わりはあるまい。そして万能な存在というわけでもない。悩みや不安を抱えるのも当然か」

ゼフォンの瞳にいつもの力強さが戻った。ニーナはよかった、と内心ほっと安堵する。

「不安がなくていい、俺に出来る最大限のことをしよう。――ニーナ、お前のことは絶対俺が守ってみせる。だから、俺を信じていてくれるか？」

「はい！」

ニーナは力強く頷いた。

その後もまた沈黙が続いたが、心地が悪いものではなかった。ニーナを支える腕は細いが力強く、心から安心できる。

今後ゼフォンが父から神の座を受け継ぎ、新たな風神となったならば、きっと優しい神様になってくれるに違いない。その頃、ニーナがまだ生きていけるかはわからないが、これから生まれてくるであろう新たな命達が安心して生をまっとうできるように、見守ってくれるだろう。

「もうそろそろです」

ハウジの示す先には切り立つ高い段差があった。段差の上に祭壇に続く洞窟があるのだという。落ちた高さを思えば、ほんの僅かの段差なのだろうが、それでも二メートル近くある。ニーナにはまず登れない。

そんなニーナを後目に、ハウジはひょいと、軽々と段差を飛び越えた。すると、その段差のところから青い髪を持つ少女が顔を覗かせる。

「ニーナ!?!」

「アズマ！」

大好きな親友の無事な姿を見て、ニーナは思わず安堵した。ハウジの言葉を信じていなかったわけではないが、こうして自分の目で無事を確認することができて本当に嬉しい。

「……流石に少し厳しいかもしれないが、やってみるか」

「ゼフォン様？」

「しっかり掴まっている」

言われた通り、ゼフォンの服をしっかりと掴むと、ゼフォンは助走をつけ、跳躍した。襲い掛かった浮遊感に思わず彼にしがみつくくと、ストーンと軽い音と共に地に着地した。

「何とかあったな」

「ニーナ！」

アズマが駆け寄ってくる。気づくとそこは段差の上だった。どうやらゼフォンがニーナを抱えたまま飛び越えたいらしい。これも神の力なのだろうか。

「アズマ、無事でよかった」

「それはこっちの台詞だ、阿呆！」

ベシ、と額に軽く手刀を落とされる。ニーナがアズマを心配したのと同じように、アズマもまたニーナを心配してくれたのだろう。にっこり笑ってありがとと告げると、アズマはふいとそっぽを向いてしまう。相変わらず素直じゃない。

「祭壇へ続く洞窟というのはこれか？」

ゼフォンが近くにあった大きな穴を見ながらハウジに尋ねる。その穴以外に入り口と思われるものはないからそれで間違いないだろう。ハウジはコクリと頷いた。

「この下は洞窟となっており、一番奥に祭壇がございます。――申しわけありませんが一族の決まりにより、私はこの洞窟より先に進むことができません。一本道と聞いておりますので、迷うことはないと思われます」

「そうか。案内ご苦労だった」

「私はここでお待ち致します。――必ず、生きて戻ってきて下さい」

「もちろんだ」

四人は無言で頷きあうと、まずはルキが、アズマが、そしてゼフォンとニーナが穴の下へと身体を躍らせる。ニーナは再びゼフォンにしっかりしがみついた。

洞窟の中は日が差さないため薄暗い。高い位置にある入り口から入る僅かな光だけでは、とてもじゃないが奥までの明かりは望めないだろう。

「ルキ、洞窟内を照らしてくれ」

「わかった」

ルキが手を翳しながら呪文のようなものを唱えると、ルキの頭上に幾つかの小さな火の玉が浮かび上がる。それはスッと天井に登っていき、ニーナ達を上から淡く照らしてくれた。

「すごいな！」

ニーナは感嘆の声をあげる。先程墮霊に連続で襲われたときは後方に下がっていたため、霊術をこんなに間近で見たのは初めてだ。紅く揺らめきながら頭上を照らす火の玉は、淡く儂く、美しい。

「……これは霊術の初歩だ。すごくも何ともないぞ」

そう説明してくれたゼフォンの声音は無然としていたが、火の玉に感動していたニーナはそれに気づかない。

「でも、とても綺麗です」

「俺とてそれくらい……」

「下らないことで張り合っていないで、先行くよ」

アズマが一人先に進んでいく。それと同時に火の玉も動いた。自分達の動きにあわせて、頭上の火の玉も動くらしい。それを聞いてニーナの目はさらに輝いた。

「感動するのもいいけど、あたしらが何のためにきたのか忘れるなよ？」

「う、あ、ああ……」

横目でアズマに釘を刺されて、ニーナはしゅんと俯いた。確かにはしゃぎすぎたかもしれない。今はそんなときではないというのに。

「……力が戻ったら、あれくらいならいつでも見せてやるぞ」

「え、いいんですか？」

「フ、それくらい、どうということはない」

ゼフォンは得意げに胸を張る。あんな綺麗なものをまた見られると思うと、胸がどきどきと高鳴った。

ふとゼフォンの顔を見上げると、彼は瞳を細め、優しげに微笑んでいた。

カアッと頬に熱が走る。心臓がけたたましく音を立て始めた。まただ。今までこんなことになったのは一度もないから、理由がさっぱりわからない。何か得たいの知れない病気にでもかかってしまったのだろうか。

「あ、あの……そ、そろそろ自分で歩き、ます」

「俺はこのままでも別に構わんぞ」

「え、えと……その……」

心臓が落ち着かなくなるからとは言えず、ニーナは言葉を詰まらせる。それは完全にニーナの一方的な都合だ。しかしこのままでは、心臓が耐えられそうにない。

「いつ精霊喰らい（ディヴァイーター）が襲ってくるかわからないんだから、ニーナは降ろした方がいいんじゃないの？ その体勢でも胸張って戦えるっていうなら別にいいけど」

前を歩くアズマが腰に手をあてながらこちらに振り返る。翠色の瞳は、完全に呆れ返っていた。

「……そうだったな」

そういうとゼフォンはニーナを降ろしてくれた。アズマの助け舟に、ニーナはほっと内心安堵する。これで心臓が収まってくれるはずだ。

「ならばこうしよう」

ずっとニーナの右手が掬われる。線は細いが長く大きな手が、ニーナの小さな手を包んだ。ドキリと心臓が大きく跳ねる。

「え、あ、あの」

「こうしていれば、逸れないだろう？」

繋がれた手が、酷く熱くなっていくのを感じた。ゼフォンが触れている手だけが、自分のものではないかのようにじわじわと熱を発していく。

「一本道をどうしたら逸れるんだよ」

「ニーナを置いていってしまうかもしれないだろう。それに、こうしてニーナに触れていると、俺が安心できる」

「お前の都合かよ」

アズマは呆れ混じりに嘆息すると、やれやれと言わんばかりに首を振ってどんどん先へと行ってしまふ。それを追いかけるようにルキが続き、その後ろをゼフォンとニーナが進んでいく。

ゼフォンがニーナに触れていると安心すると言ったのとは裏腹に、ニーナはゼフォンに触れられていると逆に落ち着かなくなっている自分に不安を覚えた。安心すると言ってくれたのに、申しわけがない。このドキドキと鳴る心臓は、どうしたら落ち着いてくれるのだろう。

「止まれ！」

アズマが鋭く静止の声を上げた。腰のベルトに吊るしている剣の鞘に手を伸ばす。途端、空気がピンと張り詰めた。ついに精霊喰らい（ディヴァイーター）が姿を現したのだろうか。

――グアルルルルルルル……

――グルオオオオオオオ……

洞窟内に響きわたったのは複数の低い唸り声。ルキが火の玉に視線をやると、火の玉がス、と前方に移動し、前の方を明るく照

らした。

そこにいたのは墮霊だった。しかし数が半端ではない。狭い洞窟の中に、ゆらりゆらりと所狭く、蠢いている。――なんともおぞましい光景だった。一体どれ程の精霊が犠牲となってしまったのだろう。そして、これだけの墮霊を同時に相手にしなければ先へは進めない。

「焼き尽くせ、劫火」

ルキが素早く詠唱を唱えた。一番手前にいた二匹の墮霊が炎に包まれる。しかしその後ろから別の墮霊がニーナ達目掛けて突進してきていた。

「……！」

アズマがその墮霊の赤黒い瞳を睨みつける。ピタリと突然動きを止めた墮霊の懐に飛び込み、喉元を短剣で切り裂いた。その動きに、今まであった戸惑いや躊躇はない。血の変わりに黒い霧が首筋から溢れ、そのまま全ての体躯が霧へと変わり、霧散した。

「全部を相手してる暇はないよ！ 向かってくるのだけ倒してひたすら進むから！」

アズマは再び襲ってきた二匹の墮霊の瞳を睨みつけて動きを止めた。刹那、身体が宙に浮く感じがし、気づけば再びゼフォンに抱き抱えられている体勢だった。

「行くぞ、ニーナ」

「わっ……！」

ニーナはゼフォンの胸にしがみつく。前の方をちらりと見遣ると、アズマとルキが道を切り開くかのように墮霊を倒す、または動きを止めていた。ゼフォンもニーナの周りにいる精霊に命令を下しながら、襲い掛かる墮霊の凶刃を次々と躲していく。真横に何度も墮霊の鋭い爪が振り下ろされ、その度に肝が冷えた。

「よし、抜けた！」

墮霊の群れをなんとか振り切ることに成功し、そのまま祭壇のあるところへ向かおうとするが、ルキが急に踵を返して立ち止まる。

「ルキ、何をしている!? 早くこい！」

「……俺はここに残る」

そういうとルキは腕を翳して詠唱し、追ってきていた墮霊を風の刃で切り裂いた。

「足止め役がいる。だから、置いていって構わない」

「な……！」

確かにルキは頼りになる霊術師だ。しかし、一人である群れを相手にするのは幾らなんでも無理がある。彼一人、ここに残っていくわけにはいかない。

そうしているうちにもう一匹、墮霊がこちらに追いつこうとしていた。

「――ったく、世話がやける！」

先に行っていたはずのアズマがニーナとゼフォンの横を通り過ぎ、牙を向いた墮霊の赤黒い瞳にナイフを投げた。視力を失った墮霊は転倒し、後ろに続いていた墮霊の通路を妨害する。

「あたしも残ってやるよ！ ――だからそっちは任せた！」

「アズマもルキさんも無茶だ！」

一人よりはましだろうが、二人でも大丈夫とは言い難い。それなら、全員残って全ての墮霊を倒した方がいいのではないだろうか。

「こいつら全部倒してたら、精霊喰らい（ディヴァイーター）倒す余力がなくなるっての！ いいから行け！」

「でも……！」

「ニーナ」

納得がいかないニーナに、ゼフォンが凜とした声でそれを遮る。彼の赤茶色の瞳は据わっていた。

「行こう。二人の言うとおりに。俺達の目的は精霊喰らい（ディヴァイーター）の封印なのだから、それを最優先にせざるを得ない」

確かにそうだ。ニーナも頭ではわかっている。ただ、感情がそれについていけないだけで。ニーナはぎゅっと瞼を閉じる。ここで騒いでも、それはただの我侭だ。ニーナに出来るのは、迷惑をかけないように、それを受け入れることだけ。

「ニーナ」

突然ニーナの名前を呼んだのはゼフォンでもアズマでもなく、ルキだった。彼は背を向けたまま、抑揚は乏しいがしっかりとした声で言った。

「アズマは俺が守る。ゼフォンを任せた」

次の瞬間地中から尖った槍のようなものが飛び出し、アズマの近くにいた墮霊の身体に深々と突き刺さる。

ニーナはアズマの方を向いた。アズマは詠唱中のルキに飛びかかろうとした墮霊の動きを止める。ナイフを投げながら、空いた手でニーナに軽く手を振った。

「――行きましょう、ゼフォン様」

心は決まった。二人はきっと大丈夫だ。今のようにお互いを守りあってくれるはず。

「ああ、わかった。――アズマ！」

ゼフォンがニーナを抱えなおし、アズマの方へ向かって叫ぶ。

「ニーナは必ず俺が守る！ ルキを頼んだ！」

「――了解」

アズマの短い返答を聞きながら、ニーナとゼフォンは奥へと向かう。待ち受けているであろう精霊喰らい（ディヴァイーター）のもとへ。

一体何体の墮霊を倒しただろう。倒しても倒しても次々と襲ってくるため、数を数えることなんてとうに放棄している。

ギロリと墮霊を睨む瞳が震んできていた。今までこんなに何度も連続で魔獣の力を使ったことはなかったため知る由もなかったが、この力にも限界というものがあるのだろう。そして今、その限界がこようとしていた。しかし、墮霊はまだまだ数多く残っている。

「押し流せ、濁流」

ルキの詠唱と共に、アズマの目の前に巨大な津波が現れた。津波は墮霊を次々と飲み込み、押し流していく。僅かだが、息つく暇ができた。

「かっこよく引き受けたものの……やっぱり数、多いね」

「……ああ」

何度も術を使ったせいか、ルキの顔色が悪い。確実に疲労しているのがわかる。彼にとっても、こんな数を一度に相手にするのは初めてのことははず。疲れないはずがない。

「……アズマ、頼みがある」

「何？」

「大きな術を使う。この一本道なら一度で全てを倒せるはずだ。だが、それだけ詠唱が長い」

「……つまり、その間墮霊の群れを一人で引き受けてくれる？」

ルキは口を一字に引き結び、コクリと頷いた。罰が悪そうな表情なのは、ニーナに向かって守ると豪語したからだろう。

その言葉と同時に思い出したのは、抱きしめられた感触。背中に回された力強い腕に硬かった胸板。そして優しく暖かな温もり。それがはっきりと呼び起こされて、アズマの全身がカッと熱くなった。

普段のアズマなら、男に触れられた時点で嫌悪感から殴るか蹴るかしているだろう。出会ったばかりの相手なら尚更だ。なのに、ルキ相手だとそうする気がおきない。嫌だという気すらおこらないことに、アズマは自分でも驚いていた。これがもし他の男なら、熱くなることもなく、冷静に鳩尾に拳を叩き込んでいただろう。

これが一体どうしてなのか、決して鈍くはないアズマは大体検討がついていた。

自分はルキに惹かれている。

初めは何度も首を横に振っては違うと否定していた。しかし抱きしめられたとき、気恥ずかしさと同時に嬉しいと思ってしまった自分を否定できない。暫くこのままでいたいと思ったのは、ルキだけではなかった。ここまで自覚してしまったら、最早否定する意味などないだろう。

アズマにとって、心を救ってくれたニーナだけが全てのようなものだった。それで充分と思っていたこともあり、こんな感情とは一生無縁だとも思っていた。それなのに、アズマの心にはニーナではない、別の存在が入り込んできている。

だからといってニーナがアズマにとって大事な存在であることに変わりはないし、初めて湧いた感情も、決して悪いものではない。どちらも、大切な想いだ。

「――やってやろうじゃん。でも、なるべく早めに頼むよ。あたしも、いつまでもつかわかんないし」

迷いはなかった。限界が近づいているとわかっている。

ルキには何度も助けられた。ならば、今度はアズマが彼を助ける番だろう。ルキはアズマを守ると言ったが、生憎アズマは、大人しく守られるほどか弱くできてはいない。

「……すまない」

「持ちつ持たれつ。お互い様だろ？ どっちみち、ちょっとでも無理をしないと、生きて戻れそうにないしね」

剣を構えると、押し流された墮霊が再びこちらへとやってくるのが見える。アズマは頭に巻いているリボンを解くと、瞼を閉じた。

潰すように耳の上をリボンで巻いているのは、実は耳を隠すためだけではなく、この耳は鋭い聴力があり、小さな音をも拾ってしまう。人の多い街は、それだけでアズマには喧騒となるため、それを抑える役割も担っていた。

感覚が研ぎ澄まされていくのがわかる。聞こえてくる音、空気の動きを身体が感じ取っている。真っ暗な視界の中でも、墮霊がどう動いているかが手に取るようになった。

地を蹴る身体は疲れているはずなのに軽い。一番初めに戻ってきた墮霊の両前足を、一刀の元に切り落とす。転倒した墮霊には目もくれず、その次にやってきた墮霊も、同じように前足を切り落とした。

今大事なものは、時間を稼ぐことだ。無闇に倒すよりも、動きを封じるに止めておいた方が効率がいい。それに横たわる墮霊は、墮霊達の通路を妨害してくれるため、一度に相手をする数が少なくて済む。

気づくと足元から何頭もの呻き声が上がっている。ここにいる墮霊は弱い精霊だったらしく、セフィラスにいた墮霊の様に、足を傷つけられてもなお再び襲い掛かってくることはなかった。

「アズマ、戻れ！」

ルキの声に、アズマは身体を大きく後ろに跳躍させた。ルキの隣に着地した後、閉じていた瞳を開く。真っ直ぐ伸ばされたルキの腕に、風が渦巻いていた。

「全てを貫け、疾風（はやて）の槍刃（そうじん）！」

――ヒュオオオオオオオオオオ！

それは一瞬の出来事だった。腕の先から渦巻いている風が真っ直ぐ突き進んでいく。同時に突風が吹いたため、アズマは腕で顔を覆った。

風がやみ、徐に腕を下ろしたときには、横たわっていた墮霊達の身体が完全に無くなっていた。奥から新たに襲ってくる様子もない。

「や……った？」

「……恐らく」

ポツリと呟いた言葉を返してきたルキを思わず見上げると、突然彼の身体がぐらりと傾ぐ。

「ルキ！」

倒れそうになったルキの身体を、前から肩を押し上げる形で何とか支えた。しかし今度は膝から力が抜けたらしく、ルキの体重が一度にアズマにかかって流石に支えきれなくなり、アズマを巻き込んで地面に倒れ込んでしまう。

「いつ……！」

アズマは尻餅をうった痛みに顔を歪めたが、次の瞬間その痛みはどこかへ消し飛んでいった。ルキが覆い被さるようにアズマにもたれかかっているから。

「ち、ちょっ……！」

「……すまない」

どうやら意識はあるようだが、その声はとても弱弱い。当たり前か、消耗した状態で大きな術を使ったのだから。

ルキはアズマから体を離すと、片膝を立て、それに寄りかかるように座る。顔色は青白く、とてもじゃないがいい状態とは言えない。

「だ、大丈夫？」

「ああ……術を使いすぎただけだから、休めば、よくなる……」

「なら、座るんじゃないかと横になっての方がいいんじゃないの？」

今は少しでもルキを休ませたかった。しかし、ルキは軽く首を横にふる。この体勢の方が楽らしい。

「アズマ、お前はそのままゼフォン達のところへ行ってもらいたい。墮霊の心配はないから、俺は一人で大丈夫だ」

全ての墮霊を退治し終わった今、苦戦を強いられているであろう二人を助けに行かなければならないのはわかる。だが、

「……悪いけど、あたしももう大立ち回りをする気力は、残ってないよ」

先程まで軽かった身体は打って変わり、どんどん重くなっていっているのがわかる。手足がだるく、軽く上げるだけでも気持ち億劫だ。最後に無理をした反動だろう。このまま二人の所へ駆け参じたとしても、こんな状態では足手纏いにしかならない。

「……ニーナが心配じゃないのか？」

「そりゃ心配だけど。――ニーナの傍にはゼフォンがいるし」

先に行かせたとき、ゼフォンはアズマに向かって言った。自分がニーナを守ると。不思議とその言葉のままに、ニーナを任せていいと思ってしまった。

それは恐らく、二人がお互いに特別な感情を抱いているからだろう。

ゼフォンがニーナを見つめる瞳はとても穏やかで優しげで、初めて会ったときの傲慢な光はすっかりなりを潜めている。そしてそれは、首飾りの捜索に協力を申し出たことに感謝している少女に向けるものにしては、甘すぎる眼差しだ。

ニーナもニーナで、ゼフォンに抱き抱えられたときの狼狽えようを見れば一目瞭然。意識していなければ、あそこまで慌てはしない。

だからこそ信じられた。何があろうとも、ゼフォンはニーナを守り抜いてみせると。

「一体何でだろうね……不安要素はありすぎるはずなのに、あの二人が負ける気がしないや。ほんと、何でだろ」

大きな敵をあ二人に任せてしまうことになるが、何故だろう。精霊を惹きつけるだけの普通の少女と、力を失っている状態の風神という危なっかしい組み合わせだというのに、不安を全く感じなかった。むしろあの二人なら、どんな危険も手を取り合って乗り越えていけるのではないかと思ってしまう。

「――そうだな。俺もそう思う。今の精霊喰らい（ディヴァイーター）をつき動かしているのは、風神に対する深い憎しみだから、その正反対の思いを抱いている二人なら、本当に何とかかなりそうだ」

ルキがそう言うと、思わず自然と笑みが零れ、クスクスと二人は笑いあった。

アズマがニーナを守る必要は、もうないかもしれない。一抹の寂しさがよぎるが、向かいに座る青年の姿を視界に納めると、自然と心が温かくなるのをアズマは感じていた。

(アズマ……ルキさん、無事でいてくれ……！)

ニーナは何度も心の中で二人に祈りを捧げていた。最終的に行くことを決めたのは自分だが、それでもやはり不安は残る。

「奥に何かがある……！」

ゼフォンの言葉と同時に前を向くと、薄暗い中で一部影の濃いところがあった。近づくにつれ、それが幾つもの石で積み上げられた祭壇だということがわかる。

「ここが祭壇か……思ったよりも殺風景だな」

祭壇のあるところは広間ようになっており、行き止まりだった。ゼフォンはきょろきょろと周りを見回しながら、そっとニーナを下へ降ろす。

「精霊喰らい（ディヴァイーター）はどこにいるんでしょう……？」

「わからん。だが、油断するな。いつ出てくるかわからないからな」

しかし、精霊喰らい（ディヴァイーター）の影も形もなければ、気配もなかった。どこにいるのだろうと思わず中央部にある祭壇を見つめていると、上の部分に異彩を放つ宝石が安置されていた。緑色の、美しい宝石。

「俺の緑風石……！」

それはまさしく精霊喰らい（ディヴァイーター）が持ち去った緑風石だった。首から下げるための紐は外され、首飾りだった面影はない。

こんなわかりやすいところに堂々と置いてあるのだから、絶対何かあるに違いない。しかし、それを取り戻さなければ、精霊喰らい（ディヴァイーター）を封印することは叶わないのだ。

ゼフォンは周囲を警戒しながら、祭壇へとゆっくり近づいていく。積み重なっている石にそっと手を触れた。

「――待ちわびたぞ、風神！」

刹那、石から黒い霧が勢いよく噴出した。この霧には見覚えがある。ケティスの身体から抜け出たものと同じもの。しかしあのときよりも、霧は深く濃い。

噴き出した霧はシュルシュルと音を立てながら一箇所に集まり、少しずつ形を作っていく。霧散する墮霊とは真逆の光景だった。

まず、しっかりとした両足が形作られ、徐々に上部が出来上がっていく。顔までこと細かに形作られたその姿は、墮霊のような獣型ではなかった。

「ぜ、ゼフォン……様？」

黒い霧が模ったのは、ゼフォンだった。腰まである髪に整った輪郭。そしてゼフォンが今着ているものと細部まで同じ形をした服。しかし、服の色から肌の色、顔のパーツに至るまで全て黒一色の姿は、まるで石でできた彫刻のようだった。

「俺のことが憎いわりに、随分そっくりに模っているじゃないか」

「これは我が恨みを忘れぬため、己に貴様の姿を刻んだのだ」

精霊喰らい（ディヴァイーター）の光が宿っていない深淵の瞳が、カッと大きく見開かれた。

突如、精霊喰らい（ディヴァイーター）を中心に風が渦巻きはじめる。ゼフォンが吹き飛ばされないようにと、ニーナの手をとってくれた。場違いに跳ねる心臓を無理やり押さえつけ、空いている手で乱れ舞う髪から視界を確保する。

精霊喰らい（ディヴァイーター）の身体が宙に浮いた。その手には、緑色に光る宝石が握られている。

「この風は……俺の力か！」

緑風石に封じ込められているゼフォンの力。風は次第に勢いを増し、立っていることですら厳しくなる。

「う……ああ！」

ニーナはついに耐え切れなくなり、足が宙に浮いてしまった。

「ニーナ！」

ゼフォンにぐいと手を引っ張られ、懐に抱き寄せられる。おかげで何とか飛ばされずに済んだが、これでは身動きがとれない。

「フハハハハ！ 手も足も出ないようだな、風神」

「……！」

精霊喰らいが（ディヴァイーター）宙からニーナ達を見下ろしている。表情はのっぺりとしていて変わらないが、口調からして嘲笑っているのはわかった。ゼフォンが悔しげに歯をギリリと噛み締める。

「緑風石さえ取り戻せば……！」

「それは我が手にあるぞ。ほれ、取れるものなら取り戻してみるがいい」

精霊喰らい（ディヴァイーター）はこれみよがしにちらちらと緑風石を見せびらかしてくる。こちらが動けないことがわかっての行動に、ニーナも悔しくなって顔を歪めた。どうすれば、あれを取り戻せるだろう？

「しかし突風で煽るだけではもの足りぬな」

光が宿っていないはずの黒一色の瞳が、ギラリと怪しい輝きを発した気がした。ス、と精霊喰らい（ディヴァイター）は緑風石を握る腕を真っ直ぐ伸ばした。

「――！」

それを見たゼフオンは、パツ、と片手を上げた。刹那、突風が止み、変わりに次々と頭上から三日月の形をした鋭利な風の刃が降り注ぐ。ニーナ達にも風の刃が容赦なく襲いかかるが、当たる直前、薄い膜のようなものが風の刃をはじいた。

それはゼフオンが作り出した風の膜だった。ニーナとゼフオンを覆うように張られている。

「……ふん、その程度の力はまだ残っていたか。しかし、それもいつまでもつかな」

頭上から降ってくる風の刃の数が増した。ニーナはそっと地面の方を見遣ると、びっしりと風の刃が突き刺さった跡があり、えぐれていた。サアツと顔から血の気が引く。これがもし身体にあたったら、怪我だけでは済まされない。

ぐっと背中に回された腕に力が籠った。ニーナはゼフオンの顔を見上げると、彼は歯を食いしばりながら、掲げる片手に集中している。

守ってくれている。力の籠った腕が何よりの証。アズマ達と別れたときに告げた言葉通りに。

（わたしができることは……なんだろう？）

あのとき、ルキはニーナにゼフオンを任せると言った。しかしニーナに出来ることと云ったら高が知れている。ルキもそれがわかっているだろうから、ニーナがアズマのような大立ち回りをすることは期待していないだろう。なら、ニーナがゼフオンに出来ることと云ったら、何か。

「く……！」

「ゼフオン様……！」

ゼフオンの表情が苦しげに歪んでいる。なのに、ニーナは何もすることができない。何とかしなければと心は焦るばかりで、何も思い浮かばなかった。

無力。その言葉がニーナの心に深くのしかかる。

思えば、肝心なときにニーナはいつも無力だった。以前暮らしていた街でアズマの正体が知られてしまったとき、もしもニーナが街の者達をしっかりと説得できていたのなら、追い出されずに済んだかもしれない。アズマと街を転々としていたときも、ずっと守られるばかりだった。いつも守ってくれるアズマに、ニーナは何をしてあげられただろう。

「……不安か？ ニーナ」

ふと、後ろに回された腕に力が込められたのを感じた。

「え……？」

「防ぐだけで、精一杯なのだから……お前が不安になってしまうのも、当然と言えば当然か……」

「ち、違います！」

ゼフオンの視線は掲げた腕に向けられたまま。恐らく、ニーナの葛藤が抱きしめられた身体を通じて伝わってしまったのだろう。しかしその葛藤は不安からくるものではない。

「わたし、何もできなくて……ゼフオン様のお役に立ちたいのに、今もこうして守られてばかりなのが、悔しいんです」

「何を、言っている……ニーナがいるおかげで、俺は、力を使うことができるんだ。充分役に、立っている」

「でも……！」

精霊を惹き寄せるといわれても、ニーナには精霊の姿は見えない。普通の人間であるが故の愚かな考えなのかもしれないが、もっとニーナの目に見える形で、ゼフオンの役に立てているのだという証がほしかった。

それに今の状況を見るに、ニーナが惹き寄せる精霊だけでは力が圧倒的に足りていない。この状況を打破するには、もっとたくさんの精霊の力が必要なのではないだろうか。どうしたら、もっと多くの精霊を集められるのだろうか。

「っ……！」

無数に降り注がれる風の刃のうちの一つが、膜を突き破ってゼフオンの頬を掠めた。破れた膜はすぐに修復されたが、今度はまた別の箇所が破られ、ゼフオンの服を切り裂いてしまう。膜の力が弱まってきていた。

「ハハハ！ そろそろ限界のようだな。いいザマだ。貴様自身の力で屠られるがいい！」

高笑いする精霊喰らい（ディヴァイター）とは反対に、ゼフオンは苦悶の表情が浮かんでいた。しかし、それでも掲げる腕を下げようとはしない。だが、やはりゼフオンは辛そうだった。足がじりりと後ろに下がっている。

「ゼフオン様！」

ニーナは咄嗟に左腕を背中に、そして右手を伸ばしてゼフオンの掲げる腕の下を持ち上げるように添えた。

「ニーナ……？」

「わたしが支えますから！ ゼフオン様は前に集中していて下さい！」

ゼフオンより頭一つ分も低い小さなニーナでは、大した支えになっていないかもしれない。それでも、支えないよりはずっとましなはずだ。たったの少しでも、ゼフオンの力になれるのなら。

「おかしな娘だ。力のない風神を頼りない力で支えることに、一体何の意味がある。大人しく我がモノとなればよいというに」
ニーナは精霊喰らい（ディヴァイーター）の黒一色の姿を見上げた。よくよく見れば、のっぺりとした表情はゼフォンと全く似ていない。どうしてあれをゼフォンそっくりだと思ってしまったのだろう。

「……わたしは、約束したんだ！ 最後までゼフォン様を信じるって！ たとえどんな状況に陥ったとしても、わたしは、ゼフォン様を信じ続けます！」

最後に信じると言った言葉はゼフォンに向けた。

そうだ。洞窟に入る前、不安に駆られていたゼフォンを励まそうと、ニーナはゼフォンに信じることを告げた。それは口からの出任せなんかではなく、心からそう思っていた言葉だ。なら、今のニーナに出来ることは、どんなことがあろうとも、ゼフォンのことを信じ続けることだろう。信じてくれるかと言ったゼフォンに力強く頷いたことは、まだ記憶に新しい。

「愚かな娘よ……なら、その信じているという風神の死をもってして、貴様の心を抉ってやろう」

緑風石が光る。大量に降り注いでいる風の刃がピタリと止まり、精霊喰らい（ディヴァイーター）の手元へと集まっていく。しゅるしゅると音を立てながら風同士が合わさり、あっという間に巨大な刃へと姿を変えてしまう。

「散らした力ですら弾けなくなっている今、これを防ぐことはできまい。――死ね、風神！」

巨大な刃が、ゼフォンに向けて放たれる。

ニーナはゼフォンを見上げると、彼はとても落ち着いた表情でニーナを一瞥した。刃がゼフォンを掠めようとした刹那、ゼフォンの伸ばされた手が風の刃をパシ、という軽い音と同時に、掴んだ。

「――何!？」

風の刃はゼフォンが掴んだと同時に形が崩れ、宙に霧散していく。ゼフォンは刃を掴んだ手をじっと見据えた。

「……こういうことか、親父がニーナを連れて行けと言った真の理由は……」

ポツリと呟いたゼフォンは、気づくとニーナの方に視線を向けていた。

「ニーナ、頼みがある」

「……頼み、ですか？」

それはニーナでも出来ることだろうか。いや、ニーナに出来ないことをしてほしいと頼むゼフォンではない。だからそれは、ニーナでも役に立てることだろう。

「俺への心からの信頼を、祈りのように捧げてほしい」

思いもよらぬ頼みごとに、思わずきよんとしてしまう。

「えっと……それだけでいいんですか？」

「それだけのことなどではない。これは重要なことだ。だからニーナに頼んでいるんだ。頼めるか？」

「――はい！」

ゼフォンを信じることはニーナにとって当然のことだ。それが重要だというのなら、何度でもゼフォンに心を預けられる。

ニーナはゼフォンから腕を離すと、両手を結んだ。瞳を閉じ、ゼフォンへの信頼だけを一心に祈る。

風が渦巻きはじめた。しかし立っていらなくなる程の突風ではなく、ふわりと髪が舞う程度の気持ちのよい風。目を閉じていても、その風がゼフォンを中心にして吹いていることがわかった。

「く……！ 死ね！ 死ね！ 死ね！」

精霊喰らい（ディヴァイーター）は再び無数の風の刃を繰り出した。ゼフォンはそれを落ち着きをもって全てを受け流す。

「今度は俺の番だな、精霊喰らい（ディヴァイーター）」

ゼフォンはすっと手を前に伸ばし、精霊喰らい（ディヴァイーター）が繰り出した風の刃よりも更に多い数を瞬時に生み出す。そしてそれを一斉に精霊喰らい（ディヴァイーター）へと降り注がせた。

「……っ！ お、おのれ……！」

精霊喰らい（ディヴァイーター）の低く呻く声に、ニーナはパチリと目を開ける。と、同時に思わず目を大きく見開いた。宙にいた精霊喰らい（ディヴァイーター）が地面に伏せていることに驚いたのではなく、ニーナの目の前に立つ少年の髪が、深緑から緑がかかった白髪へと変わっていたから。この見覚えのある色彩は、ゼフォンの父たる風神が持っていたものと全く同じもの。

「その緑風石の力、全てお前にくれてやる。俺にはもうそれは必要ない」

「貴様……！ 何故まだそんな力が……！」

「憎むことしか知らないお前には、わからないだろうな」

ゼフォンがニーナの肩に手を置くと、そっと抱き寄せられる。ドキリと心臓が大きく鳴った。

「ありがとうニーナ。お前のおかげだ。ニーナの俺を信じる心が、俺に力を与えてくれた」

ニーナを優しく見下ろす瞳は、紅玉のごとく美しい紅色。言葉を貰ったのだからニーナも何か言わなければならないのに、ぱくぱくと音をたてる心臓と吸い込まれそうになる瞳に魅入られ、声が上手く出てこない。

「忘れていた、神の力の源を……。人々が神を信じる心が、神の力となることを。思い出せたのも、ニーナのおかげだ。本当にありがとう」

「あ、あの……えっと……」

背中に戻された腕はとても優しく温かい。

そんな温かい気持ちとは真逆に、精霊喰らい（ディヴァイーター）は忌々しげにぐにやりと顔を歪ませた。その容貌はまるでドロドロに溶けた蠟人形のように、既にゼフォンの姿からはかけ離れている。

「何故そんな心が力になる……？ 憎しみこそが、己の力を際限なく増やす根本たる源。そんな脆弱な思いが、力を生み出すわけがない……！」

「それはお前が墮霊だからだろうな」

ゼフォンは瞳を細めて、立ち上がる精霊喰らい（ディヴァイーター）を見据える。その紅い瞳から、精霊喰らい（ディヴァイーター）への悲哀の情をニーナは感じた。

「封印されたことで精霊に生まれ変わることもできず、ただひたすら憎しみばかりを募らせていたのだろう……？ 俺が全てを終わらせてやる。お前は世界に還るべきだ」

「黙れ黙れ黙れ！ 我は全てを蹂躪する！ 全てのものに憎しみを植えつける！ 死んでなるものか！」

精霊喰らい（ディヴァイーター）が吼えると、全身からゴワッと霧が噴出した。霧は精霊喰らい（ディヴァイーター）を覆うだけでなく、祭壇周辺を飲み込んでいくように広がっていく。

それを見たゼフォンはサッとニーナを背中で庇うように退げてくれた。ニーナはゼフォンの後ろから横に顔を出す。

広がった霧は、再び形を作っていた。しかし今度はゼフォンではない。太くどっしりとした四足に、ごわついた黒い剛毛。大きく伸びた耳に長い鼻先。まさしく普段現れる墮霊の姿、そのものだった。ただし、その大きさは比ではない。足だけでも二、三メートルはありそうな巨体が、赤黒い瞳をギラつかせながらニーナ達を見下ろしていた。

――グオオオオオオオオオオオオオオオオオ！

「っ！」

耳を劈くような雄叫びに、ニーナは頭を強打されたような感覚に陥る。咄嗟に耳を塞ぐが、それでもぐわんぐわんと頭の中に何度も響く。鼓膜が破れなかったのが奇跡だった。

「ニーナ、危ない！」

突然ゼフォンに抱きしめられると同時に、先ほどまでニーナが立っていた場所にドシンと岩が落ちた。ゼフォンが助けてくれなければ、間違いなくこの岩に当たって命を落としていただろう。

「あ、ありがとうございます」

「礼を言うのはまだ早い。――崩れるぞ」

天井を見上げると、幾つもの岩が落ちてきていた。思わずニーナはゼフォンにしがみついた。

ドシンという音が洞窟の中を何度も木霊した。新たな音がするたびに身体はビクリと震えるが、抱きしめてくれる存在のおかげで、次第に恐怖は薄れていった。

――ガールルルルルルルル……

低い唸り声に顔を上げると、洞窟内は崩れた岩で足場は不安定になり、そして赤い光が頭上から降り注いでいた。夕日だ。

「すっかり明るくなったが……吼えるだけで洞窟を崩れさせるとはな……」

祭壇周辺は岩に埋もれ、もはや見る影もなくなってしまっている。だが、崩壊したのは祭壇があった広くなっている部分で、通ってきた通路の方は崩れてはいない。中で足止めをしているアズマ達は無事のはずだ。

――ロス……コロス、コロス！

獣の口から漏れた言葉にはとすると、鋭い爪が眼前に迫っていた。

ゼフォンはニーナの腰に腕を回すと、軽い足取りで身を翻す。精霊喰らい（ディヴァイーター）の爪はそのまま足場を砕くが、それは砕くというより抉るといった方が正しく、まるで隕石が落ちたかのような大きな穴が足場に生まれた。

「……成程、これだけ力が強ければ、親父との戦いの痕が激しかったのも頷ける」

スッとゼフォンが空いている手を上げ、精霊喰らい（ディヴァイーター）の周りに渦巻くように風をおこす。初めは穏やかだった風は、次第に轟音を立てながら激しさを増し、竜巻となった。

――グルァアアアアアアアア！

しかし、精霊喰らい（ディヴァイーター）は躊躇うことなく竜巻に巨体をぶつけた。切り刻まれていく身体を省みることすらしない。

――コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス！

どう見ても様子がおかしかった。余裕がなくなったからという理由だけとは思えない。ひたすらコロスという言葉の口をしながら、何度もゼフォンに向かって爪を振り下ろしていく。気づいたときには、一面穴だらけになってしまっていた。

――コロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロスコロス！

「……」

ニーナは胸に手を添え、服をぎゅっと掴む。精霊喰らい（ディヴァイーター）の叫びが心に痛かった。もともとは精霊喰ら

い（ディヴァイター）も世界を構成する精霊だったはずなのに、どうして墮霊となってしまったのだろう。

不思議な気分だ。あれ程怖いと思っていた存在なのに、今はただ、悲しいとしか思えなかった。憎む以外の感情を知らず、更に憎しみを募らせ、壊し続けていく。

「俺に復讐するめに、己の全てを憎しみに預けてしまったんだろうな……。それしか術がなかったからとはいえ……。哀れだ」
「……。そう、ですね」

せっかく手に入れた知性すら手放してしまう程憎しみを募らせてしまったのは、ずっと封印されていたからだろう。そのときはそうする以外なかったとはいえ、精霊喰らい（ディヴァイター）をもし再び封印することになったら――彼は更に憎しみを募らせ続けてしまう。それでは、あまりにも可哀想だ。

「ゼフォン様……。精霊喰らい（ディヴァイター）を、世界に還してあげてください」

それがたった一つしかない、精霊喰らい（ディヴァイター）が憎しみから解放される方法。世界へと還り、また精霊として生まれてくれれば、きっと――

「無論、そのつもりだ」

穏やかに細められた紅い瞳。それはニーナと同じ気持ちなのだと言っていた。安堵から少し力が抜ける。大丈夫、ゼフォンなら叶えてくれるはずだ。

「しかし、小手先の技は通じないと思っていな……」

精霊喰らい（ディヴァイター）を攻撃するなら一撃で完全に倒せるくらいでなければ、先程の竜巻と同じように耐えきってしまうだろう。

「少しでも精霊喰らい（ディヴァイター）の気を逸らすことができればいいのだがな……」

意識を逸らし、反応が遅れればその分倒せる確率が上がる。しかし、精霊喰らい（ディヴァイター）は一心にゼフォンめがけて攻撃を仕掛けている。そんな状態で別のことに注意を向けさせるのは、並大抵のことではない。

何か、精霊喰らい（ディヴァイター）の興味を引くものはないだろうか。

「――そうだ！」

一つ、あるではないか。精霊喰らい（ディヴァイター）がゼフォン以外に興味を示したものが。

「ゼフォン様！ わたしが精霊喰らい（ディヴァイター）の気を引きます！」

精霊喰らい（ディヴァイター）はニーナの精霊を惹き寄せる力に興味を示していた。もしかしたら、気を逸らすことができるかもしれない。

「何を言っている!? ニーナにそんなことをさせられるわけがないだろう!? 危険だ！」

「う……」

確かに危険だ。ニーナの脆弱な身体では、精霊喰らい（ディヴァイター）の爪先が掠ただけでも命を落としてしまうかもしれない。だが、精霊喰らい（ディヴァイター）がいつ隙を見せるのか全くわからないのだ。それに――

「わたし、信じてます。ゼフォン様なら精霊喰らい（ディヴァイター）を世界に還して下さるって。だから――わたしに、そのお手伝いをさせてください！」

荒れ狂う精霊喰らい（ディヴァイター）に哀れみを感じているとはいっても、鋭い爪に恐怖を覚えないと言ったら嘘になる。だが、それ以上に、ゼフォンなら絶対何とかしてくれると信じていた。

ゼフォンは、とても優しく強い神様だから。

「……。アズマに知られたら、殺されるかもな」

ボソリと呟かれた言葉は、ニーナの耳には入らなかった。

「ニーナにはどうにも敵いそうにない……。わかった、お前にも協力してもらおう」

「本当ですか!?!」

「ただし、俺の言うとおりに動くんだ。いいな？」

「はい！」

力強く返事を返すと、どう動けばいいか具体的に説明してくれる。一つ一つに頷き、説明が終わると、ゼフォンは精霊喰らい（ディヴァイター）に向けて手を掲げた。風が精霊喰らい（ディヴァイター）を中心に旋回し、風の檻となって精霊喰らい（ディヴァイター）の動きを封じる。

「今だ！ 行け！」

ニーナはゼフォンから離れ、駆け出した。檻の中でもがき続ける精霊喰らい（ディヴァイター）の横を走りぬけ、後ろへと回り込む。

「精霊喰らい（ディヴァイター）！ わたしはここだ！ おまえの欲しがっていた、精霊を惹き寄せる娘はここにいる！」

自分が出せる一番大きな声で精霊喰らい（ディヴァイター）に呼びかけた。ニーナは拳を握り締め、ゴクリと唾を飲み込む。精霊喰らい（ディヴァイター）はニーナの方を向いてくれるだろうか。

緊張が走った。精霊喰らい（ディヴァイター）の巨大な後ろ姿をじっと見据えると、徐に頭部が動き、赤黒い瞳と目が合う。

終

ゼフォンに手を引かれながら来た道に戻る。来るときにあった火の玉はなく、真っ暗だったが、ゼフォンがいるせいか恐怖は全く感じなかった。

暫く歩いていると、ポウと淡い光が見える。ルキの火の玉だ。

「アズマ！」

名前を呼ぶと、座り込んでいた青い髪の少女が立ち上がり、こちらを振り返った。

「ニーナ！」

アズマが駆け寄ってくる。無事再会することが出来たアズマは少し疲れたような顔をしていたが、目だった外傷はなかった。ひとまずそのことにほっと安堵する。

「無事に帰ってきたってことは、精霊喰らい（ディヴァイーター）を倒せたの？」

「ああ、もう大丈夫だ」

そう返したのはゼフォンで、アズマはゼフォンに視線を移すと目を丸くした。風神と会っていないアズマは、この色が本来持つべき色彩だということを知らない。

「力を取り戻せたのか」

アズマの後ろからルキがやってくる。彼もまた表情に疲れが表れていた。二人もまた、ニーナ達同様、楽な戦いではなかったことがわかる。

だからこそ無事でいてくれたことが嬉しかった。

「疲れているのなら休んでいくか？ 精霊喰らい（ディヴァイーター）はもういない、ゆっくりしていても問題ないだろう」

「あたしは大分動けるようになったけど……」

そう言ってアズマはちらりとルキを見遣る。確かにアズマよりも彼の方が疲労の色が濃い。

「大丈夫だ、問題ない」

「……そういうなら本当だろうが、無理はしてくれるなよ」

コクリとルキは頷く。疲れてはいるが確かに無理をしているようには見えなかった。

四人で入り口の方へ向かい、アズマとルキは直接飛びはねて、ニーナはゼフォンに抱えられながら外へと出る。

「お待ちしております風神様」

外ではハウジが平身低頭して待っていた。辺りはすっかり日が沈んで暗闇が広がっていて、入ったときはまだ夕焼け前だということを見ると、かなり長い間待たせてしまったことになる。

「待たせたな、ハウジ。精霊喰らい（ディヴァイーター）は無事鎮めた。お前達はもうここを守る必要は無い。自由に生きるがいい」

「――ありがとうございます」

ハウジは徐に顔を上げる。琥珀色の瞳が星に照らされキラリと光った。それが涙だということにニーナは気づく。

「風神様、心よりお礼申し上げます。これにて漸く、我が一族の無念は晴らされました……！」

彼らの一族は、突然現れた精霊喰らい（ディヴァイーター）にほとんどが蹂躙されたことをニーナは思い出す。一番悲しく、やりきれない思いをしたのは、間違いなく彼らだった。今までどんな思いでここ周辺を守ってきたのだろう。しかし、それも終わった。全て終わったのだ。

「皆に精霊喰らい（ディヴァイーター）がいなくなったことを伝えに行くといい。きっと喜ぶだろう」

「……本当に、ありがとうございます」

ハウジは最後に深々と頭を下げ、踵を返して暗闇の中に消えていった。

「……すっかり暗くなってるけどさ、道、わかんのか？」

太陽が沈んでしまったため辺りは暗い。帰るためには崖となっている道を通らねばならず、そこは明るくても危険なところだ。更に、森の中は明るくても薄暗かった。今は更に暗いだろう。しかも入り組んでいて、ニーナは詳しい道を全く覚えていない。

「心配するな、森は通らん。俺達は上に行く」

「え、上って……」

すると急に身体がふわりと宙に浮く。ゼフォンに抱えられたからではない。ニーナだけでなくアズマとルキも身体が宙に浮いていた。

「よし、一気にセフィラスまで戻るぞ。安心して俺に全てを任せるがいい！」

自分の意思とは関係なく、身体が宙を進んでいく。どうやら風の精霊達が集まってニーナ達を運んでくれているらしい。ゼフォンが得意げに話してくれた。力を取り戻した今、これぐらい造作もないと。彼はやっぱりすごいな、とニーナはしみじみと感じた。

下を見下ろすと、鬱蒼とした森が連なり、その奥に、淡い灯りがたくさん燈っている箇所がある。あそこがセフィラスだ。セフィラスに辿り着けば、全てが終わる。

そう、全てが終わってしまう。ゼフォンとルキは神殿に戻り、ニーナとアズマはケティスの花屋へ。今まで通りの暮らしへと戻る。それは当然で嬉しいことのはずなのに、何故か心が沈んでいくのを感じた。

理由はすぐにわかった。ゼフォンと別れることになるからだ。ゼフォンが神殿に戻ってしまったら、今のように気兼ねなく話をするといいものもないだろう。神殿は気軽に入れるような場所ではないし、ゼフォンは神だ。会いたいと思って会える相手ではない。

じわりと瞳が滲んだ。慌てて腕で目許を擦る。こんな感情はゼフォンにとって迷惑だ。別れることが淋しいだなんて。

「ニーナ、どうした？」

「な、何でもありません！ 空を飛んでいるのに感動してしまっただけです！」

感づかれてはいけないと、必死にそれらしい言い訳を取り繕う。実際空を飛んでいることにはとても感動した。だが、それ以上にゼフォンと別れる淋しさが胸を塞いでしまう。

「……俺には何も無いようには見えないが」

そっとニーナの頬にゼフォンの手が添えられた。思わずびっくりして、いつのまにかニーナの前にいたゼフォンを凝視してしまう。

「何故そんな悲しそうな顔をしているんだ。ニーナに笑っていてほしいから俺は頑張れたというのに……どうしたらお前は笑ってくれる」

「……すみません」

「謝ってほしいわけではない。理由を、教えてくれないか？」

「……」

心配してくれている。もう精霊喰らい（ディヴァイーター）の脅威はないのにも関わらず。そんなゼフォンの優しさを嬉しいと思うと同時に申しわけがなかった。

なのに頬から伝わる温もりは心地よくて——もっと触れていてほしいと思ってしまった。

気づくと身体が勝手に動いていた。腕をゼフォンの方へと伸ばし、身体のをゼフォンへと預け——彼に抱きついてた。しがみついたといった方が正しいかもしれない。自分のとった行動に驚きつつも、全身から感じるゼフォンの温もりを離したいとは思わなかった。

「ニーナ……？」

困惑したゼフォンの声が耳朶に響く。しかし、彼はニーナの背中にそっと腕を回し、抱きしめ返してくれた。それが嬉しくて胸に顔を埋める。

「貴方が好きです」

漸く気づいた自分の気持ち。こんな気持ちが湧いたことは今までになく、気づくのに時間がかかってしまった。

畏れ多い感情だった。だが、これでもう会うこともなくなってしまうのだから、せめて伝えるくらい、許してはくれないだろうか。

「……顔を上げてくれないか、ニーナ」

ゼフォンの優しげな声音に、ニーナは埋めていた顔を上げた。すると顎にゼフォンの手が添えられ、ゼフォンの顔が近づいてくる。

「ん……」

次の瞬間感じたのは、唇に触れる柔らかい感触。ニーナは頭が真っ白になった。唇に触れたのはゼフォンの唇なのだと思いつくと同時に柔らかな感触は離れ、紅い瞳に見つめられる。

「俺も同じ気持ちだ、ニーナ」

「え……？」

顎に添えられた手が頬へと移っている。今聞いた言葉がとても現実だとは思えなくて、でもはにかんでいるゼフォンの笑顔は本物で。そしてまだ残っている唇に柔らかいものがあてられた感覚も、本物で。

「——！」

ニーナはまるで爆発するかのように、顔が一気に真っ赤に染まりあがった。羞恥のあまり、ゼフォンから身体を離そうとしたが、慣れた手つきで足をひょいと掬われる。

「こうして二人で空を飛び続けるのもいいが、そろそろ進まないでアズマに怒られそうだ」

アズマの名前にはっとしてキョロキョロと辺りを見回すと、暗闇が広がっているだけで誰もいない。どうやらアズマとルキの二人は、ニーナとゼフォンを置いて先に行ってしまったらしい。それもまた恥ずかしいやら、逆に見られてなくてよかったと安堵するやら、微妙な気持ちになる。

でも、見上げる先にあるゼフォンの顔は、とても穏やかで優しげでかっこよくて、背中を支えてくれる腕はとても温かい。ずっ

とこのままでいたいという思いが込み上げるが、その思いとは裏腹に、高度は徐々に下がってってしまう。

「遅い」

地面に着地するとゼフォンは解放してくれたが、ほぼ同時にアズマが腰に手を当てながら間髪をいれずに悪態をついた。しかし遅れた理由を告げるには気恥ずかしすぎるため、ご、ごめんと口ごもりながら謝罪するしかない。

「ニーナ。それとルキにアズマ。お前達に聞いてほしいことがある」

ゼフォンの方を振り向くと、ニーナの小さな手を、ゼフォンの大きな手で包まれる。ドキリと心臓が跳ねた。

「ニーナ、お前に俺の伴侶になってもらいたい」

「.....はんりょ？」

はんりょ、ああ伴侶か、と頭の中で整理がついたとき、ニーナの頭がドカンと爆発した。伴侶とは、生涯を共に歩む配偶者のことではないか。

「ぜ、ぜぜぜゼフォン様、そ、そそそそそれはつまり.....！」

「ああ、妻になってほしい」

ニーナは混乱のあまり、え、とかあ、とか、う、とか言葉にならない言葉しか紡ぐことができず、慌てた拍子に手をぱっと離してしまう。

そんなニーナの隣に、青い髪の少女がずっと立つ。翠の瞳は何かを探るかのように鋭く細められていた。

「.....ゼフォン。それってさ、あんたが貴族から持ち込まれる見合い話から逃れたくて、っていう理由じゃないだろうね？」

初めて耳にする話に、ニーナはえ？ とゼフォンの方を見た。するとゼフォンは額に手を当て、肩を落としながら盛大に溜め息をついた。

「.....ルキ、お前しゃべったな」

「アズマが、ゼフォンが家出をした理由を教えてくれというから」

ゼフォンがルキをキッと睨むが、ルキはいつもの無表情で淡々としている。

急に身体が冷たくなった気がした。貴族からの見合いということは、相手は貴族令嬢ということになる。常に美しいものを身に纏い、キラキラと輝いている彼女達と、特に目立つ容姿でもない自分。

どうしてゼフォンはニーナを選んでくれたのだろうか？ 見合いが嫌だったから.....？

「あたしは、そんな理由じゃ承知できないってこと。——ニーナには幸せになってもらわないと困るんだ。生半可な気持ちで言ったわけじゃないって誠意を、見せてくれる？」

ニーナは思わずアズマを見据えた。アズマはちらりとニーナを一瞥して、すぐにゼフォンに視線を戻す。

アズマは真剣だった。真剣にニーナの幸せを考えてくれている。その姿はまるで妹を大事にしてくれている姉のようで——ありがとう、と心の中でそっと礼を言った。

「.....黙っていたのは、そんな理由で神殿を飛び出した自分を情けなく思ったからだ.....お前はニーナの家族のようなものだったな。なら、そこをはっきりさせてほしいという言い分は最もだ」

フ、と軽く息を漏らしたゼフォンと再び目が合った。ドキリと心臓が高鳴る。そんな自分に、どうしようもなく彼のことが好きなのだ。とニーナは悟った。

「ニーナ」

「は、はい！」

名前を呼ばれただけなのに、どうしてこうも緊張してしまうのだろう。

「お前に初めて会ったとき、衝撃を受けた。なんてお人よしの娘なんだろうなど。だが、首飾りをなくして途方に暮れていた俺は、それがとても嬉しかったんだ。そして精霊喰らい（ディヴァイター）との戦いでも、俺のことを心から信じていてくれた。お前のその強く優しい心根に惹かれてしまったんだ」

優しげな眼差しを一身に受けて、ニーナは再び顔が熱くなる。先程の不安がまるで嘘のように溶けていく。

「だからニーナを妻として迎えたい。もうニーナしか考えられないんだ」

「ふーん、そう」

そんなゼフォンとは正反対に、アズマは素っ気ない視線をニーナに向けた。

「そういうことらしいから、後はニーナが決めるんだね」

「あ.....」

アズマにそう言われて、漸く返事をしなければならないことに気づく。

毎日のようにゼフォンの傍にすることができる、これ以上の幸せはない。

「わ、わたしでいいのなら.....喜んで」

目頭が熱い。でもこれは悲しいからではなく、嬉しいからだ。好きになった人に好きになってもらえた。将来を誓ってくれた。

不意に手を引かれ、そのままゼフォンに抱き寄せられた。背中に腕を回されて、ニーナはわわわ、と慌てた。今ここにいるのはニーナだけではないのに——

そこで漸くはっとした。彼の想いに応えることは、今まで世話になってきた人達との別れを意味するのではないかと。

まず頭に浮かんだのはケティスの姿。彼女には、セフィラスにきてから大分世話になった。恩返しらしい恩返しはまだしていない。そして、それはアズマにも同じことがいえた。

アズマと出合ってから、ずっと共に育ってきた。気づけば傍にいるのが当たり前で、もう家族と同等の関係であるアズマとも、別れなければならないのだろうか。

「そうだアズマ、お前も神殿に來い」

まるで計ったようなタイミングであっけらかんと言ったゼフォンに、ニーナは思わず耳を疑った。それはアズマも同じのようで、は？ という間の抜けた声が聞こえた。

「お前はニーナの大事な親友だからな。それに、俺も四六時中ニーナと共にいられるわけではない。俺が傍にいられないとき、代わりにニーナを守ってもらいたいんだ」

ニーナはゼフォンを見上げた。すると彼は悪戯っぽくニ、と笑う。

「.....それは、構わないけど.....あたし混血だよ？ 神殿の連中黙っちゃいないと思うんだけど」

「何、神の息子たる俺がいいというんだ。何の問題もない」

実際、その通りだろう。人と魔獣が愛し合って生まれたのがアズマなのだから。それは大変尊いことであり、決して悪いことではない。

「俺も、アズマが来てくれたら嬉しい」

ニーナも何か言おうとして身をよじると、ルキがアズマに向かって微笑んでいた。彼も穏やかに笑うことができたのだと、ニーナは驚愕する。そしてその表情は、ゼフォンがニーナに向けてくれるものとよく似ていた。

「.....！」

アズマはカッと頬を紅く染めると、ふいとそっぽを向いてしまう。ルキが不思議そうにアズマの顔を覗きこもうとして、更にアズマはそれを避けた。素直でないのはいつものことだが、そこまで赤くなるアズマを見るのは初めてで、ニーナは驚いた。いつも凜としているアズマが、今はとても可愛く見える。

「話はこれで決まりだな。よし、早速神殿に行って親父に報告だ」

「わっ」

足が宙に浮く。何度も抱きかかえられているにも関わらず、この体勢はやはり恥ずかしい。

「あ、でも先にケティスさんの所へ戻らないと.....！」

ニーナはいつも、日が暮れる前には必ず家に戻っていた。それなのにこんなに真っ暗になっても戻らないとなると、余計な心配をかけてしまうのではないだろうか。

「あ、それなら平気。ケティスさんには、実は客としてきた奴がお忍びで街にきていた神殿のお偉いさんの息子で、ニーナのことをえらく気に入ったみたいで暫く神殿に引き止められるかもって伝えたから」

「え、ええ!？」

「後で口裏を合わせてもらおうとは思ってたけど、別に嘘でもないだろ。あのときから既にニーナのこと気に入ってたみたいだし。結果オーライでいいじゃん」

「.....確かに嘘ではないな、それは」

ゼフォンがそれを聞いて苦笑した。ニーナは思わず紅くなる。あのときから既にゼフォンは自分のことを気にかけてくれたことが嬉しかったのと、それをアズマは悟っていたのに、自分は全く気づいてなかったことが気恥ずかしくて。

「ケティスさん喜んでたよ。そう遠くないうちにニーナの花嫁姿見られるんじゃないかって」

「確かにニーナは白いドレスが似合いそうだ」

「.....！」

真っ白な純白のドレス。何度か見たことはあれど、自分がそれに身を包む日が来るなんて遠い日のこととばかり思っていた。

ふと、穏やかに微笑むゼフォンと目があった。

「ニーナ、俺はお前を世界一幸せな花嫁にしてみせよう。約束する」

「.....はい」

ニーナは既に幸せが詰まった胸の前で両手を結び、ゼフォンに微笑み返した。

家から零れ出る灯りが、暗くなった夜道を淡く照らしていた。